凌辱エロゲの純愛トゥルーエンドのアフター風な、ヤンデレと泥沼な同棲ラブコメ

和鳳ハジメ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

品行方正、誰にでも優しく美人なお嬢様。

学園理事の娘にして、聖女と讃えられる一条寺初雪には奇妙な癖があった。

「がぶがぶ」

「――っ、あ、相変わらず躊躇なく噛むね君」

そう、彼女は同級生のとある男子。

竹清吉久と二人っきりになると、指や腕、首筋などを噛んで痕を残すのだ。

「こんな淫らな女にしたのは、貴男でしょう？」

「返す言葉が見つからないなぁ……」

毎日、噛み痕を残す少女と、噛まれる少年。

加害者と被害者である二人の過去には。

凌辱され犯され性奴隷にされた者、そうした者という。

今とは、全くの正反対な関係があった。

「責任、取ってくださいね」

「別の方向で罪を問われると思ってたんだけど、初雪さんも趣味が悪い……」

「ええ、だって貴男みたいな犯罪者と今日から一緒に住むのですもの。趣味が悪いという他ありませんわ」

「何それ聞いてないんだけどっ!?」

凌辱者に絆されてしまった少女と、恋心を歪ませ凌辱してしまった少年。
間違いだらけの不道徳な恋をした二人が、心から結ばれる為の同棲が始まった。

←←←以下、注意事項
※脅迫、強姦、凌辱は犯罪です。
※エロいシーンは（作者基準で）多々あるけどエロ目的じゃないので、直接的なエロやエロコメディは期待しないでください。
※本作はざっくり、凌辱エロゲの純愛トゥルーエンドのアフター物みたいな認識でＯＫです。
※カクヨムにも投稿しております
タイトルはコチラ。
←
【誰にでも優しい筈の学園の聖女様は、僕にだけ噛み痕を残す】
タイトルの違いは、場所による読者層の違いに対する実験的なやつです。

目　次

がぶがぶ／1　苦学生／卑怯者・竹清吉久 ―― 1
がぶがぶ／2　聖女様は黒下着をつけない ―― 6
がぶがぶ／3　鳴り響くベル ―― 12
がぶがぶ／4　お嫁に来ました!!（怒） ―― 20
がぶがぶ／5　じわじわと毒がまわる様に堕ちていく ―― 27
がぶがぶ／6　芽生える友情！ ―― 37
がぶがぶ／7　お義父さん!? ―― 44
がぶがぶ／8　贖罪 ―― 50
がぶがぶ／9　正しき狂信者 ―― 55
がぶがぶ／10　放課後写真倶楽部 ―― 62
がぶがぶ／11　登校デート（有料） ―― 70
がぶがぶ／12　満腹になった後は?? ―― 77
がぶがぶ／13　体を重ねて、心は繋がらない ―― 84
がぶがぶ／14　カメラとリング ―― 95
がぶがぶ／15　ブラッド・プレイ ―― 107
がぶがぶ／16　ロード・オブ・ザ・ペアリング ―― 117
がぶがぶ／17　シチュエーション・プレイ ―― 124
がぶがぶ／18　リターンズ／それでも…… ―― 131
がぶがぶ／19　アイズ・オン・ミー ―― 138
がぶがぶ／20　チェーン・デスマッチ ―― 146
がぶがぶ／21　たまごとひよこ ―― 156
がぶがぶ／22　セックスしても出れない部屋 ―― 162
がぶがぶ／23　狭間の歌 ―― 167
がぶがぶ／24　プリーズ・キル・ミー ―― 172

がぶがぶ／２５　手詰まり　177
がぶがぶ／２６　復讐の在処　183
がぶがぶ／２７　比翼連理　188
がぶがぶ／２８　甘く高まる鼓動　193
がぶがぶ／２９　罪人、ふたり（最終話）　199
がぶがぶ／３０　あの日の誘い（エピローグ）　206

がぶがぶ／1　苦学生／卑怯者・竹清吉久

何度見直しても同じだった、窮地である事を示す四桁の数字は変わらない。
（よ、四千円……だって??　今月あとまだ半分残ってるのに、これで過ごせと??）
スマホからアクセスした銀行の残高は、何度ページをリロードしても変わらない。
私立アングレカム学園に通う生徒、竹清吉久（たけきよ・よしひさ）は苦悩の表情でうなだれた。
（とほほ、確かに仕送り減らすとは言ってたけどさぁ……、いや四千円、また親父のやつクビになったね？）
彼の父は昔から運が悪かった、故に吉久は貧乏な家で育ち。
そんな彼が私立という金のかかる学園に通っているのは、勉学においては優秀であるからだ。
成績の良さにて特待生入学、学費は無償、寮の家賃だって無償。
もっとも、食費や光熱費までは支給されない故に。
（はぁ……バイト増やすかなぁ。いやでも、迂闊に増やすのも考え物だものだし）
吉久もバイトはしている、だが食べ盛りの高校生。
その殆どは食費に消えていて、余裕なんてある訳がない。
（やっぱ穴が開いたからって、下着を一式買い直したのが痛かった、穴が広がって着られなくなるまで着るべきだった。正直、ちょっと仕送りを当てにしてたもんなぁ……だよなぁ、当てにした途端こうなるって分かってた筈なのに）
放課後の教室で一人、成績を維持するため予習をしていた吉久は即座に食費の計算を始めた。
（スマホ代とかそういうのは支払い済みで、食費だけなのが助かった。残り十六日、不測の事態を考えて一日の食費は二百円……二百円だって!?）

水は水道水でいい、もやしは必須だ、買い出しで狙うは半額になった肉や魚。
彼のバイト先である学園近くの青果店、その給料の支払い日は月末。
なんとかして、乗り切らなければならない。
「――――店長に少しでも前借り出来ないか聞いてみよう、最悪の場合は先生の誰かに直訴するとして」
最悪の最悪の、奥の手といっても言い手段が吉久にはある。
消費者金融を使うより最悪の手段であり、出来るなら使いたくない。
それを使うのは、もはや人格を疑うほど非道な仕業で。
「じゃあ今日は帰るか、そろそろ日が落ちるもんね」
夕暮れの日差しが、教室を赤く染めつつある。
彼は手早く帰る支度をすると、廊下に出ようとして。
「――っ!?」
その瞬間、とっさに後ろに下がった。
廊下の先には見覚えのある人物、学園の聖女と名高い一条寺初雪が歩いていたからだ。
(不味い不味い不味いっ、不味いってこれ！　早く隠れなきゃ、初雪さんと二人っきりとかさぁ!!)
吉久は慌てて教室を見渡し、急いで掃除用具を入れているロッカーの中に入った。
息を潜めること三十秒後、彼女は入ってくるなりキョロキョロと教室を見渡して。
探しているのだ、竹清吉久その人を。
(毎日見ても見飽きないほど綺麗だなぁ、初雪さん……)
「おかしいですね、まだ教室に居ると思ってましたが。今日はアルバイトの日でもありませんし……、さっき見えたのは気のせいだったかしら？」
(同じクラスなのを感謝！　はぁ、腰まである銀髪に白い肌……、胸も巨乳で、腰は細くてさぁ、お尻も揉むのが楽しいほど大きくて、むっ

ちりしてるのにスマートさを感じる太股もまた……、流石はロシアンハーフ、じゃなくてっ！　見てたら気づかれるって!!）
「――この愛おしさに満ちつつ変態的な視線は吉久君ッ!!　……居ますね、何処かに隠れていますね？」
（何で気づくのさぁああああああ!?）
　彼は焦った、別に彼女の事は嫌いじゃない。
　むしろその逆、愛してるとさえ言っても過言ではない。
　だが、今の吉久には彼女を正面から直視できない理由が。
　自分から話しかけるのにも、躊躇いを覚える理由があった。
「何処に居るんですか吉久君？　私から隠れるなんてなんて卑劣なヒトなんでしょうね??　ええ、私を脅迫して身も心も犯したヒトに相応しい行動です」
（そう思うんならさぁ、通報してよ、僕あれからずっと待ってるんだよ？　君が通報して警察が捕まえに来る日とか、強制的に退学になる日とかさぁ!!）
　そう、竹清吉久は何処に出しても恥ずかしい犯罪者である。
　彼女への思いを募らせ、拗らせ、トイレの排泄写真を隠し撮りし。
　この学園の理事である彼女の父の弱みを握り、それを以て脅迫し。
「まだ逃げようと思ってるのですか？」
　カツ、カツと足音が響く。
「あの半年間、学園にいる間も家にいる間も、昼も夜も関係なしに私を抱き」
　カツ、カツと足音が近づいてくる。
「避妊などせず、絶頂しても許さず、強制的に愛の言葉を言わせ」
　カツ、カツと足音が止まる。
「――そんな卑劣で外道で畜生な貴方が、罪を償わず私から逃げられるとでも？」
　ぎぃと扉が開く、半顔を覗かせ、ぎょろりと青い瞳がロッカーの中に向けられる。
「ひぃっ!?」
「見ぃつけたぁ、ここに隠れたんですね吉久君。……今日こそ、色よい

返事を期待してるのです、――よっ!!」
「うわぁっ!?」
　ぐいと手を引かれ、吉久をロッカーから強制的に出された。
　思わずバランスを崩し尻餅をつくと、彼女はしゃがみ込んで彼の顔を両手で掴む。
「うふッ、あはははッ、捕まえました吉久君。私の、私だけの卑劣な王子様ッ、――――あむッ、がぶがぶ」
「っ!?　い〝っ、痛っ、あ、相変わらず君は躊躇無く噛むよねぇ」
「ええ、誰がそう仕込んだんでしょうね？」
「いやそれ君の素だから、確かに僕は君に対して許されない事をしたけど、そんな事は仕込んでないから」
「……」
「……」
「え？」
「マジマジ、気づいてなかったの？　確かに最初に初雪さんに噛み痕をつけたのは僕だけど。いつの間にか君ってば、何かにつけて噛むようになってたよね？」
　きょとんと瞬きをする初雪、その名前を表すように雪のように白い肌が見る見る内に赤く茹であがる。
　そして、その隙を見逃す吉久ではない。
「隙ありっ」
「ああッ、んもう！　待って、逃げ出さないでください吉久君、お話があるんです！」
「そんなコト言ってさ、また責任取って結婚しろとかそういうのでしょ？　何回も言ってるけどさ、僕は卑怯だから自分から警察に自首しないけど。脅迫材料は全て渡してあるんだから好きに通報してよ」
「被害者である私が側に居てと言うのですッ、なんで側に居てくれないんですか!!　自慰をしても一人で絶頂に達する事の出来ないカラダにしておいてッ!!」
　うがー、と怒る初雪に彼は冷静に、そして穏やかな表情で告げた。
「だってさ、君は心も綺麗だから。僕みたいに卑怯で卑劣なヤツが側

にいるなんて、君という存在が汚れるだけなんだ。――僕は、竹清吉久という男は君の隣に世界で一番相応しくない」
そう言い切った彼に、彼女はキッと睨みつける。
（そんな言い訳ッ、こっちは聞き飽きてるんですッ！）
腹立たしい、実に腹立たしい。
目の前の陵辱者はそう言って、いつも初雪の求愛を躱すのだ。
うっかり絆されてしまったのに、こんな卑怯者を王子様と勘違いしてしまったのに、彼はそれを拒否する。
「――――良いのですか？　また逃げて」
「うん、僕は卑怯者だからね」
どこか悟った顔でいつもの様に、彼がこうなったら梃子でも動かないのは体験済みだ。
しかし今日の彼女は昨日までとは違う、全てを終えて此処に立っているのだ。
絶対に、もう逃がさない。
怒りを堪え、初雪は目を細めて突きつけた。
「貴方のお父様が失職するかどうか、それが今、決まるとしても？」
「なっ!?　は、初雪さん!?　まさか――――」
「ええ、黴臭い古びた、落ちぶれた家柄とはいえ、一条寺は名家。その伝手を侮りましたわね吉久君？　まさか卑怯とは言いませんわよね他ならぬ貴方が。……話を聞く耳はございますか？」
うっすらと不気味に微笑む彼女に、吉久は頷くしか選択肢が無かった。

がぶがぶ／2　聖女様は黒下着をつけない

「素直でよろしい、ふふッ、初めて貴方から一本取った気分です」
「僕は君に敗北し続けてる気がするんだけどなぁ……」
「あら、その割には実に好き放題してくれたではありませんか」
「敗北してるからこそ、かな。――それで？　親父に何をした訳？」
　率直に切り込んだ吉久に、初雪はくすくすと笑って答えた。
「直接クビにするように伝えるなんてしてませんわ、ただ、お勤め先に火遊びをしてる方がいらっしゃったので」
「……はぁ、またそのパターンか。親父はいつも貧乏クジを引くんだよ。でも今回は君が意図して巻き込んだ。そうだね？」
「ふふッ、どうでしょうか。私はただ少し人を介して助言をしただけ。ええ、それだけです。強いて言うなら、予め義父さんの再就職先を用意しているだけかしら？」
「今、親父のコトを変なイントネーションで呼ばなかった??」
「気のせいでしょう」
　彼の疑問をばっさり切り捨てた初雪は、制服のブラウスの釦を上から三つ開けて。
「――ね、此処まで言えば後はどうするかお分かりでしょう？　それに吉久君は何やらお金に困っているご様子、……もしかして、靴下やシャツに穴でも空きましたか？」
「っ!?」
「このままでは月末まで四千円で暮らす事になるのでしょう？　ああ、もしかするとアルバイト先の経営が悪化して、お給料が支払われないかもしれません」
「……初雪」
　さん付けが消えた険しい顔の吉久の視線に、彼女は体を火照らせた。
　後少し、もう一押しで彼は彼女を獣の様に求める、征服するために力付くで押し倒す。

初雪は臍までブラウスを開く、そしてスカートをゆっくりと持ち上げる。
（なら、次の一手に耐えられるかしら吉久君？）
（乗るなっ、乗るなよ僕！　挑発されてるんだ、そして選択肢を狭められてる、親父を見捨てられないだろうって）
（逃げ道を封じ、言い訳を用意して、そして目の前には気持ちいい解決法がある、ええ、受けるしかありませんわよね）
（――初雪は僕の財布事情まで知ってる、つまり盗聴や盗撮、スマホに細工されてても不思議じゃない）
詰みだ、そしてこれは罰なのだ。
彼女を陵辱した、取り返しの付かない罪に対する罰。
だからこそ、――応じる訳には、流される訳にはいかない。
（だって、初雪さんはさ……綺麗、だから）
吉久は己という汚点が彼女と共に在る事を望まない、汚してしまったからこそ、これ以上は汚せない。
「残念だけど、君の言いなりにはならない。……どんなに誘惑しても無駄さ」
「――義父さんが再就職先に困るとしても？」
「いつものコトだよ」
「……ッ、こ、このままだと、食べ物を買うお金もアルバイト先も無くなりますよ吉久君？」
彼女は唇を噛んで彼を睨んだ、だが吉久は飄々と受け流す。
初雪を見る視線に、暖かなモノを滲ませながら。
「それが君を汚した罰だというなら、僕は例え住む家を失って餓死するのでも受け入れよう」
「ッ!?　～～～～～～ぃ、どうしてッ、どうしてそうなんですか吉久君!!　今更聖人ぶって、なら何で自首しないんですか!!」
「僕は卑怯者だからね、君が法で裁くというなら受け入れよう。君が私的制裁をするなら喜んで受ける、そうでないのなら……僕は君の近くで、君が幸せになるまで見守るだけさ」
「ふざけないでくださいッ!!　私の幸せ？　そんなものは私が決める

んです、貴方が教えてくれた事ではないですか!!　抱けッ、抱きなさいッ、抱いてください私を!!　それが貴方の償いなんです!!　――――お願いよぉ、私から離れていかないでぇ……」

「……ごめんね、初雪さん」

涙混じり悲鳴を前に、吉久は拳を握りしめて拒絶した。

（どうして、どうしてなの吉久君、私は、私は貴方の女として側に居たいだけなのに……）

学園の聖女なんて呼び方、一度も望まなかった。

全生徒の憧れなんていらない、心を許せる友が、恋人が欲しかった。

母は彼女が産まれたと同時に亡くなり、母の死に悲しんだ父は初雪を愛さなかった。

（貴方だけが、たった一人、私に愛をぶつけ温もりをくれたのに……）

その彼も、学園の聖女という幻想に囚われ彼女から離れようとしている。

許せるはずがない、例えどんなに歪で不格好だったとしても、どんなに卑劣で卑怯だったとしても、彼だけが彼女の全てを包み込んでくれたのに。

「吉久君……よし、ひさ君……、お願い、お願いしますご主人様、もう一度、もう一度だけでも、この哀れな雌豚にお情けをくださいませ、なんでもします、財産を貢げというなら貢ぎますッ、一条寺の家が欲しいなら全て差し出しますッ、アダルトビデオに出ろというなら出ます、靴だって嘗めます、公衆トイレで肉便器になれというならなります、だから、だから」

初雪は大粒の涙をぽろぽろこぼしながら、必死に笑顔を作って吉久の下半身に縋りついた。

それを彼は、痛ましそうな目をして首を横に振り。

「……違う、違うんだよ初雪さん」

「ね、見てください。好きでしょう黒い下着、レース透けているんですよ？　下だって直ぐに挿れて貰えるようにパックリ開いてるんです、ああ、ピアスッ、そうです貴方の女という証にクリトリスにピアスを付けますッ、このおっぱいでも腕でも吉久君の名前の入れ墨だって―

―」
お願い、捨てないで。
人としての尊厳すら捨てて愛されようとする初雪に、吉久は昏倒しそうであった。
（僕が、僕がっ、壊してしまったっ!!）
手の届かない高みに居たからこそ、汚したいと思った。
どんな事をしても、手に入れたいと思った。
尊厳という尊厳を壊して、夢という夢を壊して、でも。
（壊したい訳じゃなかったんだよ……っ）
どれ程に矛盾して、どれ程の自分勝手な想いである事は自覚している。
けれど押さえられなかった、そして貫き通せなかった。
その結果が今だ。
――吉久は自分への怒りで、憤死しそうだ。
「知っていますか吉久君、ブラのサイズだってワンカップ上になったんですよ？　貴方が毎日揉んで育ててくれたから。フェラチオだって今なら上手に出来ます、貴方が仕込んでくれたからイラマチオだって平気です、ね？　犯したいでしょう？　貴方好みに躾た私の体、飽きた訳ではないでしょう？」
（……ああ、怒りすぎると一周回って冷静になるって本当だったんだね）
「だってほら、こんなに大きくして……。ねぇご主人様、その逞しいモノで前みたいに可愛がってくださいまし……、初雪は全てを貴方に捧げます……」
（今、僕に出来るコト。それは――――）
「――――きゃッ!?」
ズボンの上から盛り上がった股間にキスを始めた彼女を、吉久は無理矢理に引き剥がす。
そして屈み込み目線を合わせると、パン、と乾いた音が一つ。
「……え？」
「目は覚めたかい初雪さん？」

吉久は彼女の頬を叩き、初雪の意識は思わぬ衝撃に空白が産まれる。
「君を抱くかどうかは僕が決める、さ、立って全裸になるんだ」
「――――はいッ、ご主人様」
「何を勝手に雌奴隷になろうとしてるワケ？　竹清か吉久で呼べって言ったよね」
「はい、……はい吉久君！」
「よく出来ました、じゃあ両手を挙げて目を閉じて」
「嗚呼、帰ってきた……私の吉久君が――」
愛して貰える、歓喜の心が初雪の中で溢れる。
また犯される、憎悪の心が初雪の中で忍び寄って。
体が震える、今日はどんな事をされるのか。
（ふふッ、前みたいに繋がったまま校舎を一周……それともトイレに連れ込まれて……）
（うーん、処分しようと思って忘れてたけど。こんな所で役に立つなんてなぁ）
（――――あれ？　私、今、下着を着せられてます？　何故？　いえ……今日は履いたままで、そういう趣向ですか？　敢えて下着だけ……はい？　ブラウスやスカートも？　いえ中途半端ですね。――――そうですか、最初に犯した時を再現し、私との力関係をあの逞しいモノ様で再確認させる、嗚呼、嗚呼、嗚呼、なんて卑怯な男でしょうッ!!）
（……うん、こんなもんかな？）
吉久は最後に鞄を持って、彼女から一メートル離れる。
「もう目を開けて良いよ」
「はい、……はい？」
己の格好に、そして彼との距離感に初雪は思わず小首を傾げた。
「どうして下着が普通の白いのに変わってるんですか？」
「それはね、初雪さんには純白が似合うから。ああ、それは君が僕の部屋に忘れていった物だから安心してよ」
「どうして微妙に距離を開けて、帰ると言わんばかりに鞄を持ってい

らっしゃるの？」
「それはね、今から君を置いて帰るからさ。その中途半端な格好なら直ぐには動けないだろう？」
「……」
「……」
「吉久君、指を甘噛みされるの好きでしょう？　ちょっと近づいてください、がぶがぶしたいです」
「近づくと思う??」
　視線が混じり合う、奇妙な沈黙と緊張感。
　そして。
「じゃあね初雪さんっ！　また明日！　でも明日はこんなコトしないでねえええええええええっ!!」
「待ちなさい卑怯も――――――チィッ!!　逃がしました!!　あああもうッ、なんて、なんて、なんて卑劣な人なんですか吉久君ンンンンンンンン!!」
　猛然と走り借りている部屋へ急ぐ吉久は、背後から聞こえる罵倒は聞こえないフリ。
（ホント、どうしてあそこまで依存する様になっちゃったワケ??　あの時は怖いぐらいに輝いてたし、だから解放したのにさぁ……）
　激しい後悔に襲われながら、吉久は初雪との出会いを思い出していた。

がぶがぶ／3　鳴り響くベル

一条寺初雪という女の子に出逢ったのは、入学式の時だった。
壇上で挨拶する彼女の柔らかな笑顔に、胸が苦しくなる程の目眩を覚えたのを今でもはっきり覚えている。
（こんな綺麗な顔で笑う人っているんだ……）
外部から入ってきた吉久と違い、彼女は付属幼稚園からのエスカレーター組。
それ故に、少し問いかけただけで周囲から膨大な量の情報が入ってくる。
（へぇ……、理事長の一人娘で大切に育てられた箱入り娘、誰にでも優しく、規律正しい。学園の聖女様って呼ばれてるのも頷ける話だなぁ）
転んで怪我した者を見かけたら、率先して手を差し伸べ。
成績が悪い者がいると耳にしたら、勉強会を開く。
喧嘩が起これば駆けつけて、両者を見事にノックアウト。
恋や家庭問題にも手を貸し、皆に慕われている。
（マジで完璧だ、貧乏育ちの僕とは世界が違う……）
家柄も、容姿も優れていれば、性格や成績もまた申し分ない。
（ま、接点なんて無いしね。僕は外から見るだけで十分さ）
何もかもが釣り合ってない、だから気持ちに蓋をして。
特待生を維持できるように勉強に励む中、時折、彼女の横顔を遠くから見るのが幸せだった。
でも、だからだろうか。
（――――なんだろうね、一条寺さんは確かに笑ってるのに……少し、寂しそうな時があるのは）
それが、本格的に彼女を好きになり始めた切っ掛けだろう。
でも、どこで間違えたのか。
（隠れて写真売ってたアイツが一線を越えた時に、頑張って止めた時？　それとも、彼女を調べ始めた時？　或いは……元々そういう性質

だったのかな僕って）
それまで平凡そのものだった吉久の歯車は、突如壊れた。
自然と壊れたのか、自分の意志で壊したのかはもう分からない。
だが、その時は訪れた。
「――ははっ、ははははははは!!　これで君は僕のモノだ一条寺さん、いや今後は僕の性奴隷になるんだから名前で呼ぶことにするよ」
「あ、い、いやぁ……、も、もう酷いことしないでぇ……」
日が落ちて月明かりが照らす教室に、制服を破かれ、股間から白濁液を垂れ流し倒れ伏す彼女が居た。
（嘘だろ、この短時間で何回も出したのに……勃起が止まらないぐらいエロいって。――くくっ、楽しみがいがあるなぁ……!!）
ながい銀髪は火照った体に張り付き、泣きはらして腫れた目元は、嗜虐をそそり。
白い肌は汗で美しさを際だたせ、その大きな乳房には吉久の手の痕や噛み痕が、もちろん首筋や腕、臀部にいたるまで激しい陵辱の痕が残っている。
――男として征服したのだ、この極上の女を。
「どうして……はァ、あ、ん……こ、こんな、酷い事が出来るの、です、か……？」
「酷い事？　あんなに嫌がってたのにさ、散々イキちらかしてたのは誰だい？　スマホで撮ってあるから一緒に見ようか？　幻滅したなぁ、童貞の僕に良いようにイカされるなんてさ、気分はどう？　自分の視界にすら入らなかった底辺の男に犯された気持ちを教えてよ聖女様？」
挑発する様に、嘲るように出された言葉に。
初雪は眉根をきゅっと寄せて、まっすぐに視線を合わせ気丈に言い返す。
「～～ッ、はァ、んッ……――、こ、今回の事は誰にも言いません、脅迫に狼狽えて隙を見せた私が悪いのです」
「へぇ、まだそんな風に口がきけるんだ。さっすが初雪さんだね」
「だから、……貴方の心が壊れる前に、これでお終いにしてください竹

清君。本当の貴方はこんな事をする人じゃない筈です、だから――――」
「……僕の心配までしてさ、心の底から自分が聖女とでも思ってるワケ？　ふざけんなっ!!　そういう所が苛立つんだよ君はさぁっ!!」
「そ、そんなつもりじゃ――――ッ!?　あ、ああッ、も、アァッ、また大きく～～～～ッ!!」
そこから、半年にも渡る陵辱と調教の日々が始まった。
皆の憧れの人物を独占し、隠れて淫行に耽る日々。
すぐに初雪の体も快楽に慣れて、まるで最初から吉久の為だけに存在していたかの様に変化していった。
けれど心は、堕ちていく体に反してその精神の輝きだけは失わず。
（どうして……どうして初雪は……っ!!　なんで以前と変わらず笑えてるんだっ、なんで僕に優しくする、僕を気遣うっ、君は被害者で僕は加害者なんだぞ？　～～～～～っ、嗚呼、嗚呼、嗚呼、そんな風にさ、恋人みたいに振る舞わないでくれっ!!）
最初に犯してから四ヶ月経過した頃、彼女は通い妻のように私生活では吉久の世話を焼き始めた。
機嫌良さそうにエプロンを付けては、部屋の掃除をしたり料理を作ったりする。
学校でも時間を作り吉久に会いに来ては、誰も見ていない所では静かに寄り添い頬を赤く染める。
（違うっ、違う違う違うっ!!　違うだろう!!　君は僕を恨んで復讐するべきなんだよっ！　気づいているのか？　学園の皆の前で笑ってる時が減ってるんだぞ？　誰かを自分から助けようとしてないし、違う、こんなの違うっ!!）
気が狂いそうだった、その精神の輝きは失われていないのに。
彼女は自分にだけ微笑む、自分にだけ優しくする。
まるで性奴隷こそ本当の自分だと、吉久の拗れた愛情を受ける事こそが本懐だと。
（僕は……僕はただ、君の輝きを見たかっただけなんだ、どんなに汚さ

れても屈しない、誰にでも優しい笑顔が素敵な君が好きなんだよ……）

初雪への憧れと壊れた恋愛感情に押しつぶされ、精神が追いつめられて行く中。

吉久は決意した、今だけじゃない未来も奪うのだと。

（はっ、将来は幸せな家庭を持って普通に暮らしたい？　聖女じゃない自分を見てくれる人と？　――ふざけんなよ？　君は僕の、僕だけの聖女なんだ）

他の誰にも渡さない、普通の幸せなんて一生訪れないのだと。

もし己以外と結婚しても、その結婚式はトラウマになるようにと。

吉久は準備をした。

（ははっ、ここまですればさぁ初雪だって――）

飴がついてる玩具の指輪と、犬用の首輪とリード。

それでいて、本物の純白のウェディングドレス。

生きていく上で必要ない物を全て売り、アルバイトを増やし、同級生の伝手を頼り、土下座なんて安いものだ。

だが。

初雪は喜んだ、涙を流して感謝した。

夢が叶ったと言うのだ、ウェディングドレスは無惨に破られ、前の穴も後ろの穴もドロドロに犯されて。

精液まみれの飴付きの指輪を美味しそうに舐め、残ったリングを大切そうに握りしめる。

（駄目、だ……もう、駄目なんだ。僕はもう……初雪さんを汚せない、壊せない。こんな優しい人を、犯しちゃいけないんだ――――）

性も根も尽き果てて、吉久は決断する。

あんなに好きだった初雪の笑顔が怖かった、その優しく労る声色が重くのしかかった。

愛おしそうに見つめる青い瞳に、背筋が凍る思いをした。

指輪の交換の代わりに、と甘噛みされた左手薬指の根本が妙に寒い。

だから。

「これ、今まで撮ったデータと脅迫に使った材料。――初雪さん、君を僕から解放するよ。もう僕に抱かれなくて良い、自由の身だ。通報してくれて構わない、だから……この部屋から出て行ってくれ、もう僕の前から消えてくれ、……勝手な言いぐさだけどさ、君の幸せを祈ってる」

「――――――……え」

そうして、半年にも及ぶ日々は終わった。

吉久は表面上、普通に暮らしてたが内心はいつ警察に捕まるかと怯えて暮らして。

でも、それで少しでも償えるなら、彼女が元に戻るならと飲み込んでその時を待つ。

――だが、待てど暮らせどその時は来なかった。

「お久しぶりですね吉久君、あれから三ヶ月ですか？　ふふッ、意地悪ですね貴方は。遠くから視線を送ってくるだけで本当に何もしてこないなんて」

「どう、して……――――？」

三ヶ月後、初雪は彼の前に再び現れるようになった。

そして決まって、責任を取って恋人に、将来は夫婦になれと告げる。

吉久の発言の有無に関わらず、彼女は以前より強く噛み痕を残すようになって――――。

■

「……訳が分からないよ、どうして僕なんかを」

無事に寮に戻った吉久は、鍵をかけながら嘆息する。

寮と言っても、実際は学園が借りているマンションの一室。

幸か不幸か、裕福な生徒が多いアングレカム学園では部屋を貸し出されているのは彼だけで。

「今思えば、隣に他の生徒がいたら実行しなかったかもなぁ」

良くも悪くも、状況が整っていたのだ。

初雪が通っても噂にならず、寝室の防音もしっかりしているのか彼女がどれだけ嬌声をあげても苦情は来ず。
一人で罪と向き合うには、ぴったりな環境とも言える。
「……でも差し当たっては、金策かなぁ。セックスの時に使ってたアダルトグッズ、使用済みでも売れるのかな、もう使わないし、でもお金かけた分は少しでも……うーん、フリマアプリ使っても買う人居るのか??」
未練か或いは罪の象徴としてか、彼自身でも分からぬ感情で残してた物品を少しでも金銭に変えようと思案していた時であった。
ぴんぽーん、と呼び鈴が鳴る。
「――――誰だろ？　宅配便？　何かを買う余裕なんてないし、親父達の方も何かを送ってくる余裕なんてなさそうだし」
回覧板だろうか、とアレコレ考えながら扉を開けようとし。
ふと気になって、ドアスコープを覗きこむ。
そこには。
「～～～～～～～～～～ひぃっ!?」
思わず大声で叫びそうになった、よくぞ堪えたものだと吉久は自画自賛して。
そしてバクバクと大きく鳴る心臓を上から押さえながら、恐る恐るもう一度覗く。
そこには、やはり。
(初雪さんが居るぅ～～～～～～っ!?　は？　え？　なんで??　どうしてっ!?)
これは居留守を使うしかない、もし彼女の背後に警察官が居たなら喜んで招き入れただろうが。
ドアの外には初雪が一人、しかも大きく息を乱し鬼の形相で立っている。
吉久は思わず寝室のベッドに潜り込み、耳を両手で塞いで。
(はやっ、早くっ、早く帰ってよ初雪さん!!)
ぴんぽーん、ぴんぽーん、ぴんぽーん、ぴんぽーん。
ご丁寧に等間隔で鳴り響くベル、それは絶え間なく続き。

（しつこいっ、どうして帰らないんだよ!!　居ないって分かれよ!!）
ぴんぽーん、ぴんぽーん、ぴんぽーん、ぴんぽーん、ぴんぽーん。
ぴんぽーん、ぴんぽーん、ぴんぽーん、ぴんぽーん、ぴんぽーん。
ぴんぽーん、ぴんぽーん、ぴんぽーん、ぴんぽーん、ぴんぽーん。
ベルが一度途切れ、吉久のスマホが勝手に通話を開く。
慌てて電源ボタンを押しても切れず、画面をタップしても操作を受け付けない。
（そんなっ、いつから仕込まれたんだよっ!?）
『――――居るんでしょう吉久君？　ＧＰＳでそこに居るのは判ってるんですよ？』
（～～～～～～～～～～っ!?）
吉久は激しく恐怖した、そこまでするのかと。
もうどうすれば良いか分からない、彼に出来るのはただ怯える事だけだ。
ぴんぽーん、ぴんぽーん、ぴんぽーん、ぴんぽーん、ぴんぽーん。
ぴんぽーん、ぴんぽーん、ぴんぽーん、ぴんぽーん、ぴんぽーん。
ぴんぽーん、ぴんぽーん、ぴんぽーん、ぴんぽーん、ぴんぽーん。
がちゃ、がちゃ、がちゃ、がちゃ。
がちゃ、がちゃ、がちゃ。
ぴんぽーん、ぴんぽーん、ぴんぽーん、ぴんぽーん、ぴんぽーん。
ぴんぽーん、ぴんぽーん、ぴんぽーん、ぴんぽーん、ぴんぽーん。
ぴんぽーん、ぴんぽーん、ぴんぽーん、ぴんぽーん、ぴんぽーん。
（帰ってっ、頼むから帰ってくれ!!）
『――――嗚呼、そうでしたね。忘れていました、合い鍵を持ち歩いているんでした。毎日大切に持っているのにいざとなれば忘れるだとか、少し頭に血が上っていたみたいですね』
（しまったぁあああああああああああっ!?　というか今、毎日大切に持ってるとか言った!?　というか渡した覚え無いんだけど!?
僕、一回も君に合い鍵なんて渡してないよね??　どういうコト!?）
恐怖と困惑に陥る吉久、同時に一瞬だけ静まりかえり。
――かちゃん。

ギィと扉の開く音が一つ。
続いて、がちゃん、かたんと鍵と防犯ロックが閉まる音も一つづつ。
（っ!?　はぁ、はぁ、はぁ、っ、ぁ、く、来るっ、入ってくる、来たっ、何のためにっ、どうしてっ!?）
すたすた、すたすた。
足音は近づき、止まり、コンコンとノックの音。
ガタガタと青い顔で震える吉久は、必死に息を押し殺し。
気づかれてはいけない、今までこんな事は一度だって無かった。
殺されるのか、とうとう殺されるのか、だがそれならば受け入れるべきだ。
しかし、――怖いものは怖い。
「吉久君?　そこに居るんでしょう?」
（居ない居ない居ないっ、居ないから帰って!!）
「うふふッ、相変わらず焦らすのが好きなんですね。……でも堪え性の無い女でごめんなさい、開けますよ」
そして。
「――――ほら、やっぱり、いましたね」
「～～～～～～～～～～～～～～～っ!?」
吉久は、盛大に声無き叫びをあげたのだった。

（し、ししししし深呼吸しろ僕ぅ～～、吸ってぇ吐いてぇ吸って吐いてぇ、れ、れれれ冷静にっ、冷静になるんだっ）
「……吉久君？　大丈夫ですか？　息が荒いですけど」
（ぬおおおおおおおおっ!?　こっちに来るっ!?　なんでっ!?　どうしてっ!?　しかも心配してる!?　どうしてだよおおおおおお!?）
こひゅーこひゅーと追いつめられた者特有の荒い吐息を出す吉久。
初雪からしてみれば、自分がそこまで追いつめているとは思わず純粋に心配で。
（どうするっ、くるまってるこの掛け布団を盾に――いやむしろ簀巻きに……）
「本当に大丈夫ですか？　お熱計りましょうか？」
（待て待て待て、それすら予想されてたらどうする？　だって初雪だぞ？　僕らの聖女様だぞ？　こっちの行動は読まれてる、その前提でどう動く？　そもそも目的は何だ僕への復讐を始めたのか？）
「吉久君？　ご主人様？　旦那様？　ねぇ、寝たふりしないで何か言ってください」
狂乱に陥り思考が堂々巡りする吉久を前に、初雪は両手をぽんと合わせると。
「――雌奴隷らしく、全裸で自慰をしながら土下座してご奉仕する許可を取れ。そういう事ですね？」
「違うよバカ!?　どうしてそうなるんだよっ!?　誰がそんな事をしろって言った!?」
思わず布団をはねのけ、吉久は起きあがる。
すると彼女は、真顔で言ってのけた。
「貴方が四ヶ月と三日と三時間前に、私を七時間三十二分バイブで責め立て絶頂寸前で止め、思考能力を極限まで落とした状態で洗脳なのか愛なのか分からない囁きと愛撫と共に命じたではありませんか」
「……そうだったっけ？」

「そうですよ」
「というか、なんでそんなに細かく覚えているワケ??」
「吉久君から与えられた愛の内容は全て覚えてるのは当たり前じゃないですか」
「……」
「……」
訪れる沈黙、彼女の頭の良さは知っていたが。
ここまで細かく覚えているのは、幾ら何でも異常の一言である。
（もしかして僕は本当にヤバい存在を目覚めさせてしまったのでは？）
冷や汗が一筋、逃げたい、今すぐ逃げたい。
だが何処に逃げると言うのだろうか、ここはその逃げる先の吉久の部屋だと言うのに。
（安全地帯いいいいいいいいいっ!?）
その上、彼女と向き合ってしまった。
もう寝ているフリも出来ない、否、本当にそうだろうか？
嘘も突き通せば真実となる、ならば今からでも寝直せば夢で通せるのではないか？
だから。
「――――これは夢だな、お休み」
「お目覚めのフェラをご所望ですか？」
「畜生っ!? どうしてそう君はエロに走るんだい!?」
「そう躾たのは吉久君じゃないですか、僕のエッチなお嫁さんになれって心から言うまで繰り返させて、事ある毎に執拗に言わせたのは貴方ですよダーリン？」
「……相も変わらず反論出来ないっ!?」
因果応報とはこの事か、祈るように天を仰いだ吉久は。
疲れ切った顔で、初雪に問いかけた。
「それで、何しにきたのさ。セックスならしないよ、恋人にもならないし結婚だってしない」
「金欠なのでしょう？ だからご飯を作りに来たんです」

「……そう、か。憎い僕を毒で殺すんだね。つまり最後の晩餐と」
「お望みとあらば今すぐ生きたフグを手配して、口移しで食べさせますけれど？」
「それ君も死ぬやつっ!?」
「貴方の居ない世界に、何の意味があるのでしょう……」
強い、これ程までに強い存在だったか。
吉久は初雪の強さに戦慄した、もはや無敵と言って過言では無いだろう。
そうたじろぐ彼を前に、彼女はその手を両手で包んで微笑んだ。
「私は貴方が心配なんです、今の状況は私が仕組み誘導した結果とはいえ。元より吉久君は私優先で、食費すら削って愛してくれたでしょう？　――今度は私が貴方に愛を返させてください」
「……っ」
何で、とも、どうして、とも言えなかった。
初雪の目を見れば分かる、吉久には理解できる。
彼女は、己の事を本気で心配しているのだと。
（僕は初雪さんを受け入れて良いのかな、こんな僕が、傷つける事しかしなかった僕が、どこまでも一方的だった僕が、こんな、こんな――）
（――やっぱり、貴方はそういうヒトなんです。罪を悔いる事が出来る優しい人、本当は女の子を強姦する事すら考えない普通のヒト）
だからこそ、と初雪は心の中でほくそ笑んだ。
もう一押しすれば、吉久はこの場を受け入れると。
確信がある、彼女には絶対の確信が。
（ええ、だって――私は貴方好みに魂の底まで染め上げられてしまったのですもの、優しい私が好きなんでしょう？　聖女の様に清らかな私を好ましく思うのでしょう？　可愛くおねだりする私にグッとくるのですよね？）
演じる、と言うには少し違う。
表に出す心を取捨選択するだけだ、彼の愛を求める自分ではなく、

彼を慈しむ自分だけを出すのだ。
「お夕飯、作らせてくれませんか？　もう何日ももやしだけで過ごしているじゃありませんか……」
「なんでご飯の内容まで知ってるか聞いて良い??」
「……」
「……」
　またも沈黙が流れる、思わぬ返しに初雪は言葉に詰まる。
　そして吉久は、笑顔のまま固まる彼女の視線が泳いだのを見逃さなかった。
（こ、コイツっ!?　合い鍵やスマホのハッキングだけじゃなくて盗聴盗撮までしてるでしょ絶対っ!?　僕が寝てる間に不法侵入してるまであるよ!?　いやまぁ犯罪については僕はとやかく言えないけどさぁ!!）
（聖女のフリは失敗ッ、こうなったら他の手を――）
（いやどうしよう、力付くでも合い鍵取り上げて無理矢理追い出す？　うん、そうするべきだよね？）
（色仕掛け……は駄目です、今の吉久君には効果ありません。なら、そう、罪悪感、罪悪感に付け込んで……）
　交わる視線、吉久が動く寸前で初雪の行動が間に合う。
　ほろり、彼女の右目から涙が一つ。
　勿論、切なそうな、悲しそうな表情も添えて。
「酷い……、狡いです吉久君……。私にお嫁さんという夢を見せた癖に取り上げて……、分かってます、貴方が私を愛してない事は、でも……もう一度、もう一度だけ、その甘い夢をと、……その夢すら見せてくれないのですね、身も心も弄んだ癖に……」
「ぁ、っ、そ、それは――（泣いたあああああっ!?　い、いやそれ絶対に嘘泣きでしょ!?　そうだよね!?　で、でも本当だったら僕はっ、～～～～僕はっ!?）」
　嘘だと断じて、冷酷に突き放せればどんなに良かっただろうか。
　だが、それが出来ないから。
　それをしてしまったら、吉久は本当の鬼畜生になってしまう。

（で、でも、初雪さんのコトを思えば僕は冷酷な畜生であるべきなんだ、だから）
しかし、口は餌をねだる鯉の様にパクパク動くばかりで、拒絶の言葉など一つも出てこない。
彼女はそれを見逃さず、彼の胸に抱きついて。
「嘘でも幻想でも良いんです、どうか、どうか私を少しでも好きなら、愛してるなら、此処に居ても良いって」
（泣きながら上目遣いは反則だよねえええええええええっ!?）
「お願いです、吉久君――――」
（い、一度だけ、そう、一度だけ、たった一言だけ言うだけだから、そうすれば初雪さんは満足するから）
ごくりと、吉久は大きな唾を飲み込む。
胃が痛い、きりきりと痛む、穴すら開いている気がする。
上手く呼吸が出来ない、どうやって肺を動かしていただろうか。
（言え、言うんだ、言えば終わるんだ）
（――――これは落ちましたね）
吉久は錆び付いた機械の様にぎこちない動きで、初雪をしっかりと抱きしめて。
「側に居てほしい、好きだ、愛してる初雪、僕のお嫁さんになって欲しい」
「……はい、しっかりと録音できました。言質は取らせて頂きました」
「ですよねぇ!!　だと思ったよ畜生うううううううううううう!!」
敗北だった、完全なる負けだった。
虚ろな目でへなへなと座り込む吉久とは対照的に、初雪はルンルンと上機嫌で録音を再生。
『側に居てほしい、好きだ、愛してる初雪、僕のお嫁さんになって欲しい』
『側に居てほしい、好きだ、愛してる初雪、僕のお嫁さんになって欲しい』
『側に居てほしい、好きだ、愛してる初雪、僕のお嫁さんになって欲し

い』
「なんで繰り返し再生するんだよっ!?」
「ふふふッ、もう言い訳は聞きませんよ吉久君、貴方が言ったんですからね？　他ならぬ【今の】貴方が側に居てくれって。――さ、お夕飯の支度するのでテレビでも見て待っててください。ちなみに今晩は記念としてすき焼きですッ!!」
　台所へ歩いていく彼女の背に向かって、吉久は敗北感にまみれながら問いかけた。
「……所でさ、マジでさぁ、何しに来たの？　言質を取るだけの為に？」
「え、そんなのオマケですよ」
「じゃあ、何？」
「お嫁さんになりに来ました、ああ、心配しないでください父は貴方がくれた脅迫材料で説得しましたから。あの家に帰らずに、これからはずっと一緒です」
「……え、……は??」
　足取り軽く部屋を出て行く初雪、残された吉久は呆然と大口を開けて。
（どうしてこうなったあああああああああああああっ!?）
「そうそう、言い忘れていました。――これからも宜しくお願いいたします吉久君。……どうか、今の私を受けれて末永く愛し可愛がってくださいね、朝も昼も夜も、――貴方に逃げ場なんて無いと思ってくださいまし？」
　うっとりと告げられた言葉に、吉久は絶句し頭を抱えるしかなかった。
　なお、夕食のすき焼きは美味しかった。
　箱入り娘で調理なんてした事が無かった彼女ではあるが、半年に及ぶ調教生活の中で料理の腕もあげていたからである。
　――そして、夜半。
（わ、忘れてたあああああああああっ、初雪さんって何処で寝るんだよ!!　予備の布団とか貧乏な僕にあるワケ無いし、というか絶対に

ベッドの上で待ってるよね??　セックスしようと待ちかまえてるよね??　風呂場から出たく無いんだけどっ!?)

彼女が泊まる、正確に言えば同棲を開始したという事は。

吉久を愛すると宣う、彼女面したというか一度は性奴隷にした彼女が夜に何を望むかなんて明白であり。

パジャマに着替えた吉久は、恐る恐る自室を覗くと。

「ふふっ、――――はァ……、今日は久々ですし、もしかして獣の様に――――」

(ですよねぇ!!)

彼はベッドの上の光景を見て、何もかもを忘れて実家に帰りたくなった。

がぶがぶ／５　じわじわと毒がまわる様に堕ちていく

ベッドの上の初雪は、ピンクのシースルーのベビードール、勿論の事、下も併せてピンクのスケスケレースであった。
そんな彼女が何処で買ってきたのかＹＥＳとデカデカとプリントされた枕を強く抱きしめているものだから。
（ぐっ、え、エロい……何あれ誘ってるの??　いや誘ってるんだろうけどさぁ!!）
元々大きな胸は、さらに強調されボリューミーに。
更には期待しているのだろうか、その名の通り初雪のように白い肌はうっすらと紅潮して。
（――いや待て、このまま逃げるのはどうだろうか？　残ってる僅かな全財産でも実家までなら余裕だし。もしくはこのままリビングで寝てしまうのもアリだね）
三ヶ月前の己なら、一、二もなく飛びついただろうが。
今の吉久は自制出来ている、少なくとも出来ると自分を信じている。
（風邪引かないようにねーー、じゃあ僕はこっちで寝るかぁ）
回れ右をし、一歩踏み出した瞬間であった。
彼はそれ以上は進めずに、足を止める。
「あはっ、何処に行こうとしてるのですか吉久君？」
「いやぁちょっと戸締まりが気になって、ガスの元栓閉めたかなって」
「大丈夫ですよ、玄関は私の許可無しでは開きませんし。このマンションはオール電化してますから」
「おっと、実家に居る時の癖が出ちゃったね。あっはっはっはっ……」
「もう心配する事はありませんよね？　なら――、一緒に寝ましょう？」
ぴとっと胸を押しつけ、耳元で囁く初雪。

我が儘で豊満な胸に対し、華奢過ぎるように見える腕はしっかりと吉久の胸に回され。
その細く形の良い手は、胸板や股間周辺を撫でまわし始める。
（何かっ、何か言い訳はないのかよっ!?　一つでも良いからこの場から逃げ出す言い訳――――）
（そんなものあると、本当にお思いです？　嗚呼、可愛らしく憎たらしいヒト……）
（――――いや、そもそも抱かなければ良いんだ。断固として拒否する、さっきみたいに泣き落としは通用しないよ）
（私の事を拒否できる、そう思っていますか？　ええ、それは余りに甘い考えとしか言いようがない）
ごく、と唾を飲み込んだのは果たしてどちらか。
吉久は身を堅くして、緊張気味に提案した。
「ちなみに聞くけど、コンドームはある？」
「ええ、子作りよりも快楽を優先するだけのセックスもしたいと思って三箱用意しておきました。ああ、勿論、近くのコンビニで彼氏に無理矢理命令された感じを出して買ってきました、あ、小声で貴方の名前を呟いておきましたけど、大きな声の方が良かったですか？」
「そのコンビニもう行けないよっ!!　本当に何してくれてんの!?」
「――貴方のご両親に挨拶するのを、後回しにしている、と言っても？」
「それマジで僕が詰むやつっ!?」
敵は本気だ、このまま絡め取られてしまうのか。
だがまだ大丈夫だ、雰囲気さえ壊せば何とかなる。
吉久は、そう信じて。
「……ならさ、ウチの親や君のお父さんに僕の罪を告白する、そして自首するよ」
「知ってます？　被害者が合意であったと言えば問題ありませんよ？
試してみますか？　まあその場合は――――、一生、お日様の下に出られませんが」
「うーん、僕は警察に捕まって塀の中に居るって意味だよね？」

「話は変わりますけど、私の家には座敷牢という物があるんですよ」
「本当に話変わってる??」
「古い家ですから、歴代当主の妻となった方の中には座敷牢に入れられ子を産んでも引き離され、死ぬまで当主に犯され続けた者もいるとかいないとか」
「いやぁーー、きょーみぶかいはなしだなーー」
　ははは、と乾いた笑いしか出てこない。
　背中から奇妙な寒気を感じる、胸を執拗に愛撫する手に冷たさしか感じない。
　耳元で囁かれる言葉は、こんなにも熱を持っているというのに。
（これ、今の君は解釈違いだから勃起しないとか言ったら詰むやつだよね。多分、勃起はすると思うけどさ）
「もういいでしょう、――私を気絶するまで抱いてください吉久君……こんなに大きく堅く勃起……勃起？　いえ待ってください、何で勃起してないんです??」
「今のホラー過ぎて勃起しないと思うよ普通は」
「は？　以前の吉久君なら『は？　何を生意気言ってるんだい、君は僕の女だって骨の髄まで愛してやるっ!!』って！　強引に唇を奪ってディープキスで呼吸困難になるまで責め立てつつ、体を愛撫してトロけさす所でしょうッ!!」
「あ〝っ、い〝ったぁっ!?　そ、そんなに思いっきり耳噛む??」
　恐らく耳には歯形が付いてしまっただろう、だがそんな事はどうでもいい。
　吉久には、一つだけ気づいた事があって。
（なるほど、……初雪さんもさ、僕と同じか）
　はぁ、と軽くため息を出して、吉久は彼女の腕をふりほどく。
　そして向かい合って、その華奢でしっとり吸いつく肌の肩を掴むと。
「僕が言えたコトじゃないけどさ、初雪さんって僕に幻想抱いてるでしょ。強引に迫る野蛮な王子さまみたいな？」
「本当に言えた事ではありませんね、私をいつまでも聖女扱いして。

抱きたくないのも、どうせ僕みたいな罪人には抱く権利が無いとか汚れてしまうとか、そう思っているのでしょう？」
「それが分かってるならさ、どうして僕に抱かれようとするんだい」
「貴方がそうした癖に、今更それを言うんですか？」
「なら――話は平行線だね、僕と君は一緒だと険悪になるだけだ、別々に寝よう」
「やはりそれが目的ですか、ええ分かっていましたとも。貴方は一度そうと決めたら覆さない、……だから私を犯したのでしょう？」
　震えた声で睨む彼女は、はぁと熱い吐息と共に己の体を抱き抱える。
「知っていますか？　性奴隷から解放されてから寝れないんです、体が火照って、どんなバイブを使っても満足できず絶頂出来ず、貴方に触られただけで乳首で達してしまうのに、自分ではどうやっても絶頂出来ないんです、――こんな淫乱な体にして、男として責任を取るべきでしょう？」
「……病院に行こう、僕も付きそう」
「違うッ、違いますッ!!　誰がそんな事を望みましたか!!　抱かれなくても良いんです、ただ、隣で一緒に居てくれれば、あの頃のように抱きしめて寝てくれれば私はッ、私はそれで満足出来るのに――――ッ!!」
　それは憎しみなのか、或いは本当に愛だというのか。
　或いは、体に染み着いてしまった習性か。
　本来ならば、病院に通って治療を受けるべきだろう。
　だが。
「渡しません、決して、誰にも。この体は私だけの、この感覚は私だけの絆、例え誰かが、貴方が嘘だと、錯覚だと言ったとしても、――貴方を求めるこの体は愛なのです、空虚な私を埋めた何より大切な愛なのです」
「……君はさ、僕という毒に犯されて正常じゃないんだ。だからそう思うだけさ」
　この言葉は初雪には届かない、それでも言わずにはいられなかっ

た。
　そんな彼に、彼女は嗚呼としめった吐息を吐き出すと。
「貴方自身が毒というなら、――きっと私こそが毒なんです、私という毒がじわじわと時間をかけて吉久君を蝕み、狂わせてしまった。……ね、お互い様なんです私たちは、お似合いでしょう？　それに……知ってますよ、あれから一回も吉久君は自慰をしていない、いいえ、出来ない、私以外では勃たないし、絶頂できない」
　そうでしょう？　と初雪は嗤った。
　彼女が彼でしか満たされない体になった様に、彼もまた彼女でしか満足できない体になってしまった。
　じわじわと毒が回って、吉久の体は堕ちているのだと。
「それでも、僕は拒否するよ。もう間違いは犯したくない、君を、初雪さんとセックス出来ない、したくないんだ」
「吉久君なら、……そう言うと思っていました」
　どんなに抵抗の言葉を出しても、初雪にはひっくり返す言葉がある。
　必ず、初雪を抱く言葉を持ち合わせている。
　どろり、音がするように空気が濁る。
（これを言えば、ええ――取り返しがつかない）
　例えば彼が彼女を犯したのと同じ様に、取り返しの付かない関係になる。
　吉久だからこそ、吉久にしか効果が無いそれを。
（でも、悪いのは吉久君なんですよ？）
　もう一度、三ヶ月前の様に抱いてくれるという希望は儚く散った。
　彼に抱かれる事だけを考え、彼に愛され、温もりと快楽に溺れ全てを忘れ去るという望みはきっと、最初から叶わぬ夢だったのだ。
　くつくつと下腹部が煮えたぎる、吉久はどんな顔をするのだろうか。
　どんな顔で、初雪を愛してくれるのだろうか。
（嗚呼、――これがきっと、私を犯す時に吉久君が笑っていた理由、なんて、なんて背徳的な快楽なのでしょう）

粘り着くような妖艶さを瞳に宿した彼女に、吉久の本能は撤退の鐘を盛大に打ち鳴らした。
だが、どこに逃げるというのだろうか。
そもそも、逃げられるのだろうか。
――思わず一歩下がった彼に、初雪は告げた。
「抱いてくださらないのならば、……このまま外へ行き見知らぬ男に抱かれてきます。そして孕むまで帰りませんし、孕んだ子は貴方の子として、憎しみだけを注いで育てます」
「～～～～～～っ、ぁ、お前っ、初雪ぃ!!」
それは正しく脅迫であった、吉久が初雪を好きだからこそ、歪なれど愛してるからこそ、今もなお憧れているからこそ。
「さ、答えは如何に？　吉久君？」
「ぼ、僕はっ、――僕は、僕は、僕はぁっ!!」
「くふふっ、嗚呼、こんなに心地よいんですね誰かを脅迫するって。ええ、貴方の気を引く冗談であるという甘い考えは捨てた方がよろしいですよ？」
（冗談である可能性だって？　それこそ冗談だろっ!!　畜生っ!!　逃げ道を塞がれた!!）
吉久は必死に抜け道を探す、何処かに活路はないかと探す。
（そうするなら僕も他の女を抱きにいくって言えば？　――駄目だ、良くて僕だけが殺され、最悪の場合はその誰かを巻き込んで全員死ぬ未来しか見えないっ）
窓に駆け寄って、投身自殺を計るというのはどうだろうか。
（……それも駄目だ、窓に行くまでに追いつかれる可能性だってあるし、初雪さんが一緒に死ぬ可能性も高い）
ならば、暴力はどうだろうか。
（僕は男だ、腕力なら勝てる。――でも初雪さんは護身術を習ってるし、あの細い腕は柔らかい癖に筋肉がついてるんだ。それにさ、あの時に強姦出来たのは、弱みを握ってて、かつ脅迫で動揺していたからだ）
屈するしか道は無いのか、本当にそれしかないのか。

唇を強く噛む吉久に初雪はゆっくり近づくと、その血の気の失せた顔を暖めるように両手で包み込む。
「っ、ぁ――――」
呼吸が上手くできない、蛇に睨まれた蛙の気分とはこの事か。
初雪は何も言わず、妖しげに微笑みながら彼の胸板へパジャマの上からキスを降らす。
その一つ一つが、ナイフで突かれている様に痛む。
(これが、……これが報いだって言うのか？　初雪さんを汚し、壊してしまった報いだって？)
もう昔の彼女は、聖女のように皆へ優しく微笑んでいた彼女には戻らないのか。
吉久の想いなんて知らず、周囲に恵まれ幸せに満ちた道を歩む本来の彼女には戻れないのか。
(意地を張って拒絶すれば、本当に初雪は――)
他の男に抱かれる、あの白く大きな胸も、括れた腰も、頬擦りしたくなる臀部も、全部他の男の手の垢がつく。
(そんなっ、そんな事は――――っ)
それどころではない、きっと彼女はその相手に微笑むだろう。
(絶対に、僕は、僕はっ!!)
吉久への当てつけとして、恋する乙女の様に愛を囁くだろう。
そして喜んで子を孕み、他の男の精子の匂いを口からさせながら吉久を座敷牢へと監禁するのだ。
(僕が拒めば、絶対に初雪は行動に移す)
確信がある、彼女は愛していると告げるが本当にそれだけだろか。
憎まれている、それだけの屈辱を彼女に与えている。
だから、復讐されない理由が無い。
(冷静になるんだ……、僕の身の危険とか心を守ろうとするな、初雪さんの事だけを考えるんだ)
脅迫に抵抗した場合、彼女は身も心も犠牲にしながら破滅の道へ突き進むだろう。
ならば屈した場合はどうか、彼女は望み通りに吉久の隣を手に入れ

て。

（僕が犠牲になる、なんて自分に酔うコトなんてしない）

それに、屈した場合はまだ救いの道は残っている。

以前の通りに戻らなくても、彼女を救えるかもしれない。

（これは言い訳かな？　それとも本当に初雪さんを考えても決断か？

或いは単に我が身可愛さか、……僕にはもう分からないよ）

でも、道は一つしかない。

「……決まりましたか、吉久君」

「こ、これからも……僕の側に居てくれ初雪さん」

「足りません、言葉だけじゃ足りないと思いませんか？」

「っ!?　――…………キスでもしろって言うのかい」

「膝をついて、私の手の甲にキスをして誓ってください。二度と私を手放さないと、永遠に私を愛すると、幸せなお嫁さんにすると、誓ってください」

くすくす、くすくす、吉久の耳を犯すような軽やかな笑い声が響く。

屈辱による目眩か、悲しみによる絶望か、もしかすると彼女の色気に堕ちていたのかもしれない。

ゆっくりと膝をつくと、差し出された左手の薬指の根本に唇と押しつけて。

「未来永劫、来世も初雪さんを愛してる。僕の妻になってくれ、二度と君を解放するなんて言わないよ、――君がいないと、僕は生きてけないんだ」

「――――――――――嗚呼」

初雪は狂おしいほどに歓喜した、この感情の高鳴りをどう言い表せばいいのだろうか。

もう吉久以外は目に入らない、衝動のままに、背筋を襲う背徳的な快楽が命じるがままに。

爪をたてて顔を掴み、唇を奪って口の中を舌で蹂躙する。

（畜生……、なんで、なんでさ、こんなに――）

ぱたんと吉久は床に押し倒された、馬乗りになった彼女の青い目は欲望で爛々と輝き。

パジャマの上がむりやり引きちぎられて釦が飛んだ、手の痕がつく程に強く胸や腹が愛撫される。
「ねぇ、吉久君も触ってください……」
手首を捕まれ、無理矢理に初雪の胸に押しつけられる。
その柔らかさに、彼は抗うことが出来ず。
（毒だ、そうだ初雪さんが言うとおり。僕はもう、初雪という名の毒がじわじわと回って、もう手遅れなほど堕ちていたんだ）
全身が悲しみに満ちているというのに、性欲は壊れたように彼女を求める。
吉久は考える事を止め、初雪の体に溺れた。

□

そして次の日である、いつの間にベッドに移ったのだろうか。
彼は汚れのないベッドの上で、スマホのアラームにより目を覚ます。
「……シャワー浴びるか」
昨晩、情事で濡れた床は綺麗になり。
リビングのテーブルには、ホットケーキとソーセージ、そして目玉焼きのセットが用意されている。
その横には、メモ書きが残されていて。
「先に行く、と。スープは鍋の中に……いや良くあれだけセックスしたのに、朝から用意する元気あったね!?」
これからどんな生活が待っているのか、初雪を救う道はあるのか。
答えの出ない問題に悩ませながら、吉久はいつも通りの朝を過ごし登校した。
すると。
（……なーんか、今日は視線を感じる。さっきからひそひそ物言いたげに見られてるのって気のせいじゃないよね？　男子連中の視線も何か突き刺さってる気がするし）
嫌な予感がする、学園に着いたら情報収集は必須だ。

今日は忙しくなるかも、と決意しながら教室に入ると。
「――――ねぇヨッシーっ!? キミというヤツはあの聖女様と結婚前提で恋人になって同棲開始してるって本当かいっ!?」
「ちょっとシャラさんっ!? なんでそこまで具体的に知ってるんだよおおおおおおおおおおおおおおっ!?」
親友兼悪友であり、貴重な女友達である。
根古紗楽（ねこ・しゃら）の叫び声に、吉久は膝から崩れ落ちた。

がぶがぶ／6　芽生える友情！

「そ、その反応……っ!?　まさか噂は本当だって言うのかいっ!?　キミにっ、あの狂信者とも呼ばれるキミに聖女様という恋人が出来たって言うのかい!?　一時期はボクと非モテ同盟を結び、先に恋人は作らないと男女の性別を越え堅い友情を共に誓い合ったキミが!!　本当の本当の本当に、一条寺初雪と恋人になったっていうのかい!?」

この芝居がかった口調こそ、根古紗楽という人物の性格を表してた。

劇役者のように大げさで、しかし妙に似合っている。

そして、どこか抜けている三枚目なボブカット（自他共に認める）美少女（写真部所属）が、彼女であった。

――ともあれ、彼女の言葉に吉久は反応しない訳が無く。

「は？　何の権利をもって初雪さんを呼び捨てにしてんのシャラ？　というかその非モテ同盟を結んだ一週間後にボク恋人が出来たからやっぱ無しとか、超絶ムカツク事を言ってたの誰だっけ??」

「あ、これマジだね？　ちょっと皆、朝から駆けめぐっている噂は本当みたいだ。今の聞いたかい？　昨日までずぅ～～っと一条寺さんって名字で呼んでた人間がさ、いきなり初雪さんって呼んでるんだよ？」

「――――……っ!?　お、お前っ!?　僕を引っかけたんだなっ!?」

そう、最初の問いかけから既に罠。

吉久はそれに気づかず、まんまと引っかかってしまったのだ。

悔しがる彼を前に、クラスメイト達は。

「え、本当に!?　あの竹清君が!?」「狂信者がついに聖女に手を出したのか？」「あ、ありえないっ!?　吉久は狂信者だから吉久なのに!!」

と驚愕する者。

「……でも、割とお似合いなのでは？」「まぁウチは上流階級の家柄が多いけれど、今の時代、そんなに家柄に拘るべきではありませんし」

と理解を示す者。

「よっしーは無駄な行動力と性格と成績を考えたら、割と優良物件だもんな」「これで狂信者でなければねぇ……」
と吉久を評価するもの。
三つに別れてはいたが、総じて。
「「「おめでとう、よっしー!!」」」
「祝福してくれるのは一歩譲って受け入れるとして、そもそも狂信者って何？　僕ってそんなあだ名で呼ばれてたの??」
そんな単語で呼ばれた事など、一度も記憶にない。
首を傾げる吉久に、紗楽を筆頭にクラスメイト達は信じられない者を見る目を送り。
彼らは互いにアイコンタクトで通じ合った後、彼女が代表して告げた。
「よっしーさぁ、キミってヤツは本当に気づいてなかったのかい？　あれだけの事をしておいて？　自分が狂信者だって気づいてなかったのかい??」
「心当たりが全然無いんだけど??」
「我らが私立アングレカム学園の全生徒から慕われ、教師からの信頼も厚い、理事長の一人娘、天が使わした現代に生きる聖女、それは……一条寺初雪」
「『さん』か『様』を付けろよシャラ、僕は冷静で居られないぞ？」
「なんでその言葉が出てきて、自分が狂信者でないと??　どう見ても、一条寺さんを狂気を感じるまでに崇拝する信者そのものだよね??」
紗楽はジトっとした目で、彼を見据えた。
吉久は善き友人、成績も優秀で、性別を越えた親友ではあるが。
一条寺初雪の事となると、非常に盲目かつ行動的になる。
「まったく……、気づいてなかったのかいキミは??」
とはいえ、ここまで自覚無しだとは思いもよらなかった。
肩をすくめた彼女は、やれやれと言わんばかりに説明を始める。
「彼女をナンパしようとした男をさ、陰から実力でねじ伏せ友人となり」
それだけではない。

「彼女が良く通る道は毎日掃除し小石一つ残さず」
どうして、そんな偏執的に行動出来るのだろうか。
「他にも陰から色々助けてるのに、己の存在を少しも本人に知らせず、ひたすら尽くしていた異常者を、狂信者と呼ぶ以外ないと思わないかい??」
「だって初雪さんは聖女様だよ??　僕みたいな小物を気にせず、皆を幸せにするべきなんだよ」
「よっしー、なんでキミは変なところで自己評価が低すぎるんだい？」
そういう拗らせ方をしているから、ふとした拍子に彼は歪み、凶行に至った訳ではあるが。
今の本人には、あまり自覚は無く。
「……はぁ、仕方がない。その辺は聖女様に任せるとしよう。――――おめでとう吉久君、入学式以来ずっと熱烈に片思いしてきたのが実ったんだね。クラスメイトとして、何より親友として、キミの幸せが嬉しいんだ!!」
屈託のない笑顔を向ける親友に、吉久は後ろめたい思いを必死に隠しながら笑顔を作って。
「おおっ、ありがとう友よ!!　こんなに喜んでくれるなんて!!」
「それにしても水くさいよ、よっしー。いつどこで彼女と出逢って仲を育んだんだい？　幸せのお裾分け的に聞かせてくれたまえよ。あ、その前に祝福のハグでもする？」
「ねぇシャラ、君ってば息を吸うように男を勘違いさせるムーブをする時があるよね。後でアイツに怒られるよ？」
「え、ハグしないのかいっ!?」
「そういうトコだよ？　いやするけどね」
「よーし、祝福のハグだ!!」「はいはい、ありがとう」
吉久と紗楽は堅く抱き合った、クラスメイト達はその光景を苦笑しながら見守って。
嫉妬や動揺する顔はひとつも無い、つまりは何時の事なのだ。
だがこの瞬間、がらりと教室のドアが開いて。
「失礼します、吉久君は――――」

「あ」「っ!?」
空気が固まった、入ってきたのは話題の当人である一乗寺初雪その人。
彼女が目にしたのは、美少女と抱き合う恋人。
（え、誰？　誰ですそれ??）
きっかり一秒、彼女の思考が止まる。
そして再起動を果たした後、本人も気づかぬまま目がすっと細まる。
同時に、妙な威圧感と寒気がクラスを直撃して。
（うわあああああああっ!?　ヤバいって、これマジでヤバいって、え？　ええっ!?　どうする、ここからどうすんのさ僕っ!?）
（ふむ、珍しい。あの聖女様がこんな顔をするとは……実の所まだ疑っていたのだが、これは本当に本当だったみたいだね）
（これはそう、浮気、浮気ですよね？　昨日の今日で？　私との関係は嫌がったのに？　朝から教室で皆の前で仲良さそうに抱き合って??）
吉久、余りに想定外でパニック状態。
紗楽、冷静に観察をしているが己の状態に気づいておらず。
初雪、堪忍袋の尾が切れかけて。
（――――裏切り者、吉久君の裏切り者、私の心を裏切っただけじゃなくて、当てつけるように見せつけるなんて……絶対に、許さない）
この不義理な男をどうしてくれようか、一歩、一歩、静かに初雪は踏み出す。
「お、おいこれヤバいんじゃないのか？」「だよな、絶対に誤解してるって」「誰か説明しろよ」「いや待て、逃げるのが先じゃない？」
クラスメイト達はひそひそと頷きあいながら、教室の隅へポテチ片手に退避。
（ひいいいいいいいいいっ!?　ち、近づいてきたぁ!?　死ぬっ!?　僕今日死んじゃう!!　どうする、逃げる、そう逃げる――って今逃げたらシャラが殺されかねないよねぇっ!?　どうしろってんだよ!!）
（ほうほう、ほう？　こーれーはー、もしかして嫉妬かな？　しかし何故……、ああ、そういえばボクとよっしーは抱き合ったままだったな。

これなら誤解は必須だ、うむ、親友のよしみだ誤解を解いてやろうではないか!!）
（落ち着きなさい、落ち着くのよ初雪……。これは誤解、或いは何かやむを得ない理由があるのかもしれません。冷静に、そう、冷静に、――どうやって息の根を止めるかを考えないと）
静まりかえった教室に、カツカツと初雪が歩く音だけが響く。
十秒もかからず、彼女は二人の目の前に来て。
青い顔をした吉久が、紗楽を庇おうとした瞬間であった。
「やぁやぁ!!　お初にお目にかかるよ一条寺さん!!　ボクは根古紗楽、よっしーの親友さ!!　彼の恋人になったんだって？　ならこれから顔を合わせる事も多くなるだろう、これからは友達として宜しく頼むよ!!」
（何だよそのクソ度胸っ!?　大丈夫なのかいシャラっ!?　一歩間違えると殺されるんだぞっ!?）
「……初めまして紗楽さん、どうか初雪と呼んでください」
（目ぇ怖っ!!　スッゲー睨まれてるっ、これ絶対に僕とシャラを殺そうとしてる目でしょっ!?　嫉妬とか通り越して殺意になってない!?）
戦端は開かれてしまった、吉久は二人の顔を忙しそうに見ながら狼狽えるばかりだ。
しかしそんな彼に構わず、親友は楽しそうに彼女へ話しかける。
――心臓に毛でも生えているのだろうか。
「ところで、今日は何の用事で来たんだい？　――おっと、すまない愚問だったね初雪嬢、愛しのよっしーに会いに来たに決まってるっていうのにボクは……、あっ、そうだ！　ちょうどよっしーの話をしてたんだ、聞きたくないかい？　狂信者の話。……ああ、それとももう聞いてるのかな？　ボクの推測としては、まだだと思うんだけど……」
（マシンガントークっ!!　いよっ、喋らせたら恋愛候補から外れる女!!　トラブルメーカーな君がこんなに頼もしく思えたコトはないよ!!）
まくし立てられる言葉に面食らった初雪ではあるが、吉久の話題と聞いて食いつかない筈がない。

彼が、あ、これヤバい流れじゃね？　と逃げ腰になる中、親友と恋人（強制）の話は進む。
「狂信者？　何ですそれは？」
「ほうほう、知らないと。とある学園の聖女様に忍びよる魔の手やら、待ち受ける困難を事前に排除しながらも、その聖女様に存在の一切を悟られなかった大バカ者の話さ、――気になるだろう？」
にやにやと楽しそうに言われた内容を、初雪はしみじみと噛み砕いて飲み込んだ。
どうもこれは、自分の知らない吉久の話らしい、と。
そして目の前の彼女は、どうやら敵ではない、と。
（けれど、まだです。まだ彼女と吉久君が抱き合っていた理由を聞いてはいません）
それを聞かない限り、紗楽という女生徒の事を無害だと判定できない。
「――大変興味深いお話ですね、吉久君はあまり自分の事を話してくれないので」
「そうだろう、そうだろう。よっしーは君を崇拝してるからね、こんなねじ曲がった男の恋人になるのは苦労しただろう。うんうん、――――っと、そういえば謝罪がまだだったね、先程、抱き合っていたのは君という恋人がよっしーに出来た事を喜んだ友情の発露なんだ。そしてボクには恋人がいる、ボクらのこれからの友情の為にも誤解しないで欲しいのだが」
（いつもながら、一回の話が長いよねシャラってば。流石の初雪さんもこれには……ってっ!?　ええっ!?）
新妻（予定）の顔をこっそり伺った吉久であったが、思わず目を見開いた。
何故ならば彼女は、満面の笑みで右手を差し出していたからだ。
「――友達なんて水臭いですね、私達はきっと親友になれると思うんです」
「おおおっ!?　本当かい!?　やったね！　じゃあボクらは今から魂の姉妹！　ベストフレンドさ!!」

（展開が早いっ!!　着いていけないんだけど!?）
「ではさっそく、ホームルームが始まるまで狂信者？　の事を聞かせてくださいませ」
ずずいと身を乗り出す初雪と、何故か誇らしげな紗楽は両手を取り合い。
きゃいきゃい、と微笑ましい光景。
「何だったら昼休みや放課後だって、幾らでも話すよ！　そうだ、ボクは写真部に所属してるんだけど。カメラに纏わるよっしーのエピソードも……」
「是非、是非とも聞かせてくださいましッ!!」
（……あ、これ地獄に発展するやつじゃね??）
あの聖女様に、初雪に初めての親友。
本来ならば陰から堪能したい吉久ではあったが、どう足掻いても己の悪行に飛び火しそうな話題からは逃げたい。
（抜き足、差し足、忍び足……気づかれてないよね？）
二人からの離脱を計る彼に、当然目撃していたクラスメイト達は苦笑したり呆れたり。
とはいえ、阻止しないあたり理解はあるようだ。
吉久は廊下に出るなり、競歩のペースで逃げ出して。
（まさか外堀をここまで大胆に埋めてくるなんて……。でもね初雪さん、学園内では一歩先を行かれたけど、僕にだって打つ手はあるんだ）
数分もかからず、彼は理事長室の前にやって来たのであった。

がぶがぶ／7　お義父さん!?

「外堀がうまって行く気分はどうかね？　婿殿……」
「そんなに簡単に婿認定しないで頂けますか理事長っ!?」
　理事長室に入って早々、吉久を待ち受けていたのはげっそりとしたロマンスグレーのイケオジだった。
　彼こそが初雪の父であり、私立アングレカム学園の理事長である一乗寺吹雪である。
「君の気持ちは理解しない事もない、ああ、何せアイツは母親そっくりだからな……。私の時も、逃げられずに……ううっ、思い出したくもない!!」
「聞きたくなかった、そんな情報……っ!?　というか父親として！理事長として！　娘が在学中に男子生徒と同棲とか良いんですかっ!?」
「ふむ、それを娘をコマした君に言う資格があるのかね??　あの様子だと深いところまで行ったのだろう？」
「父親として複雑な気持ちになるとか、こんな貧乏人に結婚は断じて許さない、とか無いんですか??」
　吉久の問いかけに、吹雪は深いため息を吐き出すと。
「……君にも責任があるんだぞ婿殿」
「具体的には、というか婿殿止めて頂けます？」
「私に妻激似の子が在籍してる男の娘風俗を紹介したのは誰だったか？」
「それはバレるのが悪いんじゃないです??」
「ほう？　ではちょっとした予算の使い込みの証拠の書類をアイツが握っていたのは？　それも君だろう」
「僕だという証拠はあるので？」
「無いな、だが理事長として、一条寺の元当主としての勘がそう言っている。――竹清吉久、君は油断ならない男である、と」
「過分な評価ですね」

「そうかな、私の予想通りなら陵辱エロゲーや陵辱系官能小説の主人公と同じぐらい行動的で絶倫の持ち主だと思うのだが」
「理事長ってエロゲーとかするんです??」
「そこは義父さんと呼べぇい!!　初雪は任せたぞ!!　私はもう面倒な色恋沙汰には関わらんからな!!」
「そこは止めてくださいよ理事長っ!?　というか恋愛にトラウマ持ってるんですかっ!?」
　初雪を止めたい吉久に、初雪に制圧されてしまった吹雪。
　当然、話は平行線である。
「諦めろ婿殿、君は特待生を維持出来るほど優秀……というか、初雪を学年トップにする為に本来ならばトップの所をわざと空欄にして点数を調整している可能性がある、と報告が上がっているぞ」
「う、うぐっ、あはははは、そんなの気のせいですって、そんなの出来たらマンガの主人公になれますよ!!」
「他にも娘の為に、色々と陰から尽くしてくれているらしいじゃないか。――まぁ、色々と怪しい所があるし娘に無体を働いた可能性も捨てきれないが」
　そこだ、そこを突けば彼とて父親として交際を止めるはず。
　吉久は形振り構わない勢いで、身を乗り出し。
「そうです、僕は――初雪さんに無理矢理関係を強要しました、本来は警察に突き出される筈の人間なんです、どうか、どうか初雪さんを説得して頂けませんか!!」
「それが嘘であれ真実であれ、娘が初めて言い出した我が儘にして、その実力を示す切っ掛けとなったのだ。――私は文句は言わんよ、命が惜しい」
　顔を青くする一条寺吹雪、初雪は父親に何をしたのだろうか。
　思わず血の気が引いた吉久であったが、怯んではいられない。
　このロマンスグレーのイケメンの他に、彼女を止められる人物など居ないのだ。
「そこは父親として娘の過ちを正し、市民の義務として犯罪者を警察に通報したりするべきでしょう!!」

「君は何を望んでいるのかね？　親の欲目ではあるが、申し分のない娘だ、何処に出しても恥ずかしくない良く出来た娘だ。アイツが君と結婚して幸せになると言うなら何の問題がある」
「僕が気持ちよく罪悪感に浸れて、かつ初雪さんを説得出来るように断固として反対して欲しいんですが??」
「やはり吉久君、君は中々に屑だな？　うむ、黴が生えて腐りきって弱小化し親戚も居らずこの学園だけが頼みの綱で没落しそうな我が家門であるが、君ならば初雪と一緒になんとかなるだろう」
「どうしてそうなるんだよおおおおおおおおおおっ!?　畜生っ!!　僕の様に汚らわしい人物は初雪さんと一緒に居ちゃいけないっての に!!　何故、何故僕は彼女を怪物にしてしまったんだ!!　汚したくないけど汚したいだけだったのに!!」
　盛大に嘆く娘婿（確定）に、吹雪は可愛そうな者を見る目で告げた。
「一条寺は代々、外面だけは良い家系でな。そこに良くも悪くも情熱的すぎる母親の性質を受け継いでしまったんだろう……。懐かしいなぁ、脅迫されて逆レイプされ、挙げ句に子供が出来たと。……だが私も頑なで愚かだったのだな、喪ってから愛していた事に気づくとは……」
　悲しい顔で思い出に耽る理事長に、吉久も思わず涙腺が緩む。
　と同時に頭の冷静な部分が、似たような事を彼女にしてしまったのでは？　と告げる。
　冷や汗をかく彼に、吹雪は続けた。
「私はな、今でもあの子の母を忘れられないのだ。だから君が男の娘の風俗をそれとなく進めたとき、お気にのあの男の娘を見たとき、衝撃が走ったのだ……、私はまだ、思い出に浸れるのだと」
「そこはもう少し、娘に目をやってどうぞ??」
「娘を見ると、辛いのだ。今でもな……どうしてもあの子の母の姿がちらつく、喪失感が襲ってくるのだ。……だから、初雪には悪いことをしたと思っている、今更、父親面なんて出来んよ」
「……だからって、僕に任せるんですか」
「そうだ、君がどの様な手段で、あの子とどんな関係になったか知らな

いが。過程はともあれ、初雪の心を埋めてくれたのだ。――せめて、幸せになってくれると祈っている」
　そう語る吹雪に、吉久は鋭く切り込んだ。
「娘に家の権力を奪われた割に平気そうですね、風俗通いを止めてる気配が無い……その胸ポケットからチラ見してる紙、あの男の娘の風俗店のサービス券ですよね、しかも最近の」
「家の実権と、君との交際を認めれば。後は仕事をしてれば自由にして良いと言ってきてな、悪く思うな、私は娘婿より――男の娘風俗を優先する!!」
「このクソ親がっ!!　けど僕が勧めた以上、責められないっ!!　どうして僕は初雪さんを脅迫する為に理事長へ風俗を勧めてしまったんだ!!」
　膝から崩れ落ちて悔いる吉久に、一条寺吹雪は頼もしそうに見つめた。
（この状況で父親である私に直談判、そして私や教頭のみならず、数々の教師や生徒と親交があるコミュニケーション能力。更に犯罪もやむ無しで欲しいものを確実に手に入れる行動力……）
　挙げるべきは、それだけではない。
（犯罪の尻尾を掴ませないのも評価するべき点だ。うむ、彼は確保するべきだな、弱点は我が娘だが……主導権は娘にあるようだし何の問題もない）
　家の事を考えれば、下手に政略結婚を企むよりよっぽど良縁だ。
「――さ、そろそろホームルームが始まる時間だ。教室に戻りなさい婿殿」
「くっ、絶対に後悔しますからね義父さん!!　もし僕がお腹を刺されたら犯人は初雪さんなんで絶対に通報しないでくださいよ!!」
「なんでそんなにドロドロの関係築いているんだ婿殿??」
　頭を抱えて出て行った少年を、吹雪はあの頃を思い出すと複雑な思いで見送って。
「……――――ふむ、お祝いとして防刃ベストでも送るべきかな？　それとも週間マンガ雑誌、いや分厚い月刊雑誌を定期購読の方が

……しかし、初雪には彼を憎んでいる気配なんて……うむ、分からん」
等と呟いていたのは、吉久は知る由もなく。
差し当たっての問題は、階段の踊り場ではち合わせた初雪に壁ドンされている事であり。
「ねぇ吉久君？　教室から消えたと思えば……いったい、何処に行っていらしたのです？」
「ああ、ちょっとヤボ用があってね。初雪さんに言わずに出て行ったのは悪いと思ってるよ」
「嘘つき、ちっとも悪いと思っていないでしょう。それに――見ましたよ？　理事長室から出てきたでしょう」
「そうかい？　前を通りがかっただけさ」
「……中の会話を盗聴していた、と言っても？　ご覧になりますか？　最新の技術は素晴らしいですね、音声を認識して自動で文字に起こしスマホに送れる様になるなんて、ええ、録音もしてありますよ？　嗚呼、動画の方がお好みですか？」
「ねぇ初雪さん？　君さぁ、僕よりヤバそうな事してない??」
「ッ!!　貴方という人はいつもいつもッ!!」
表面上は余裕を崩さず、冷静に言葉を返す吉久。
その姿に、初雪は唇を噛む。
（どうして、どうしてそうなんです？　父の所に行って、何を話していたかなんて盗聴しなくたって分かりますッ!!）
そして実際に、盗聴をしていたからこそ余計に腹立たしい。
目の前の愛しい男は、昨日誓ってなお初雪から離れようと画策している。
ありもしない幻想を、憧れを拗らせ、彼女を一人にしようとしている。
（もう、――貴方という温もり無しでは生きられないと言うのにッ!!）
もし今の状況が、普通の恋愛の結果なら初雪は憤りを覚えなかっただろう。
だが違う、吉久という男は己を卑劣な手段で抵抗を許さず、身も心も犯したのだ、尊厳を全て壊されるような陵辱を行ったのだ。

決して、断じて、魂にかけても。
「――――許しません、吉久君、私は貴方を許しません」
「いいよそれで、僕は君に許されようとなんて思っていない」
「～～～～ッ!!　その態度が気にくわないと言っているのですッ!!
許しを請いなさいッ、何もかも許してくれと土下座しなさい!!　そしたら私はッ、私は……ッ!!」
「許すって？　でもそれは嘘だ、僕の気持ちに、そして何より君の気持ちに嘘を付くコトになる」
「貴方に私の何が分かるのですかッ!!」
「分かるよ、少なくとも僕を憎んでいるって。初雪さんはさ、勘違いしてるんだよ。憎みすぎて僕を愛してるって錯覚してるんだ」
「～～～～～～ぁ!!　竹清吉久ッ!!」
次の瞬間、吉久の腹部に鈍い衝撃が走る。
思わず体を折り曲げたその時、頭や背中にも痛みが起こった。

がぶがぶ／8　贖罪

「このッ、このッ、このッ!!　私がッ、私がどういう思いでッ!!」
「ぁがっ!!　〜〜〜〜っ、は、ぁ――――っ!!」
「許さないッ、貴方だけは決して許しません、私に愛を請うまでッ、全ての許しを請うまでッ、愛しているのにッ、こんなにも貴方を愛しているというにのに――――」
　倒れ込む吉久の体を、初雪は激情のままに今度は蹴り続ける。
　反射的に防御した腕を、その奥の腹を、頭を、爪先で蹴って、骨を折る勢いで足を踏みつけにする。
「憎いんです、愛しているのに、貴方が憎いんです、止まらないんです吉久さん、こんなにも貴方を求めているのに――魂は貴方を憎み、存在を許すなと叫んでいる」
「――――は、ぁ……、んっ、ぁ、は――――」
「ねぇ吉久君、何か言ってくださいよ、無様に喘いでないで、立って私の目を見て、前みたいに力付くで犯してくださいまし」
　返事を返せない吉久の襟首を掴み、初雪は無理矢理立たせると。
　青い目からぽろぽろと大粒の涙を流しながら、優しく制服の上をはだけさせ肩を出す。
「〜〜〜〜ッ、ぁ、〜〜〜〜〜〜ぃ、っっ……っ!!」
　鋭い痛みと共に、彼女の髪から甘い匂いが鼻孔を擽る。
　噛まれた、そう認識した瞬間に患部は灼熱で火傷したように熱を持つ。
「――は、ぁ……ねぇ、逃げないでください吉久君。貴方が逃げようとするだけで私は、私は、……自分を抑えられなくなるんです」
　囁かれた耳から、氷柱をぶち込まれたような感覚。
「愛してください、恋人の様に、妻のように、以前のように性奴隷としてでも良いんです、――貴方の温もりが私の生きている証拠なんです」
　脳が混乱する、悲鳴をあげる、男としては嬉しいのに一番聞きたく

ない言葉でぐちゃぐちゃになりそうだ。
「……何も、何も言ってくれないんですね。あの時の様に、あの時も、私に何も語らず捨てて、ええ、どれだけ私が悲しんだか、絶望したか、貴方には理解できますか？」
痛みを落ち着かせるように、呼吸を整える吉久に。
初雪は労るように、己が暴力を振るった部分を優しく触れる。
しかし次の瞬間、非常に強い力で抓り。
「〜〜〜〜〜っ〟ぁ〟!?」
「あはっ、あはははははっ、私はきっと壊れてしまったんです、貴方が、貴方の苦しむ顔がこんなにも嬉しい、貴方が傷ついている事が心から愉しいッ、――こんなにも悲しいのに、罪悪感で死にたくなってくるのに、どうして、どうしてこんなに愉しいんですか？」
涙混じりの震えた声には、吉久を労る暖かさと愉悦と怒りが同時に存在していて。
（――――嗚呼、そうか、これが……これが僕への罰なんだね）
この時、初めて。
吉久は己が一条寺初雪という存在を、壊してしまった事を自覚した。
（僕は……なんて愚かなコトを――ッ）
ホームルームの開始を知らせる鐘が鳴る、誰も通らない階段の踊り場で二人。
汚れる事を気にもとめず、向かい合ったまま座り。
吉久は今、罪悪感に打ちのめされていた。
（嗚呼、取り返しの付かないコトをしてしまった、――初雪さんを、壊してしまった）
気が狂いそうだった、今すぐ叫びだしたいくらい、許しを求めて土下座したいくらい、死にたくなるぐらい激しい後悔に襲われている。
（でも、そんなコト……絶対に出来ない）
「――――ぁ、よしひさ、くん……」
彼は歯を食いしばって、躊躇し震える手を必死に動かして初雪を強く抱きしめる。

今の彼女に、何と言えば良いのだろうか。
安易な謝罪は、何にもならない、彼女への侮辱にすらなりえる。
（責任を、取らなきゃいけないんだ）
彼女の言う、恋人や結婚という意味ではない。
一条寺初雪という存在に、その清らかな心を取り戻させる。
もしそれが叶わなくとも、今の様に矛盾して壊れた感情をどうにかして解消させなければならない。
（でも、どうすれば良いんだ？）
「嗚呼、……伝わってきます、吉久君の体温が、心臓の鼓動が。もっともっと、強く、抱きしめてください。そうすれば、何もかもを忘れられるんです」
「ッ！」
強くしがみつく初雪の肩は華奢で、これ以上の力を込めれば壊れてしまいそう。
心だけじゃなくて、体も壊してしまうのか。
（でも、そんなの手遅れだろう。僕は彼女の体だって快楽で壊してしまった）
そうだ、もう手遅れなのだ。
吉久が初雪にした事は、その全てが取り返しの付かない事で。
それに対し、何も持たない貧乏な少年が何が出来るのだろうか。
（僕はさ、……ねぇ初雪さん、君にとって僕は毒なんだよ、君がもっと壊れないうちに離れるべきなんだよ）
「離さないで……離さないでください吉久君。私には、貴方しか居ないんです――――」
初雪の声を聞く度に胃がキリキリと痛む、肌が触れ合う度に息苦しくなる。
「ん、……はぁ、ん……、んッ、……好き、好きです吉久君、信じてください」
吉久の顔にキスの雨がふる、その一滴が、一つ一つに悲しみを覚える。
（嗚呼、そうか……僕も壊れてたんだな）

その行為が何よりも嬉しいのに、心が悲鳴をあげている。
初雪以外いらない、初雪だけが側にいればいい。
そう思っているのに、今もその顔をぐちゃぐちゃにトロけさせて嬌声をあげさせたいと望んでいるのに。
「何もかも忘れて、セックスしましょう？　体が火照ってしかたないんです、貴方に抱かれないと授業だってまともに受けられないんです」
股間は痛いほど堅くなって、空き教室に連れ込んで邪魔な制服を剥ぎ取って犯せと訴えているのに。
心がどこまでも鈍化させる、そんな権利なんて無いと正論を突きつける。
（言わなくちゃ……、断らないと、駄目だ、駄目なんだよ初雪さん）
「……何も、言ってくれないのですね」
（どう言えば良い？　僕は君の求めを拒否する権利が、何かを言う権利すらあるのか？）
「でも、少し嬉しいです。……吉久君のその傷ついている顔が、私の事で悩んで頭がいっぱいになって何も言えないその表情が、私は少しでも満ち足りた気分にさせてくれるんです」
――もっと、私だけを考えてください。
そう熱に浮かされた様に囁く彼女は、とても辛そうな顔をしていて。
（僕はただ、初雪さんに、初雪さんを、僕は……嗚呼、僕は初雪さんをどうしたかったのかなぁ）
分からない、余りにも情けなさ過ぎて涙が出てくる。
自分に涙を流す権利なんてないのに、体は言うことを聞かなくて。
頬を伝う涙を、初雪は舌で舐めとった。
「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい吉久君……どうか全部忘れて、私に溺れてください。何もかも忘れて、私だけを求めてください、――ごめんなさい、貴方を通報する勇気が持てない弱い私で、貴方を憎みきって殺すことも出来ない私で、だから……少しでも哀れと感じるのなら、私を――」

「はつ、ゆき、さん……」
「哀れんでください、悲しんでください、怒りでもいいんです、憎んでくれても構わないんです、貴方の心が一つでも手に入るなら、私は他の男にだって喜んで抱かれに行きます、だから」
初雪は泣き笑いをしながら、冷たくなった唇を吉久の唇に押しつけた。
ただ触れ合わせるだけのキスが、吉久には何より残酷な行為に思えて。
（――――――いい加減さぁっ、覚悟をっ！　決めろってんだよ僕!!）
拳を一度、強く強く握りしめて開く。
そして、彼女の両肩を掴み体を離したのであった。

がぶがぶ／9　正しき狂信者

「僕と君が恋人として、そしてこれから一緒に暮らし続けると言うなら条件がある」
　吉久がそう言った瞬間、初雪の表情が急速に変化していった。
　縋るような視線は、粘着質なそれが混じり。
　触れる指先には、力が籠もる。
「……――貴方に、条件を出す権利があるとでも？」
「僕は卑怯者だから、これから言う条件を飲まないと君から死んでも逃げ出すよ」
「卑怯者と自ら言うなら、以前のように体で説得なされば宜しいのでは？　ええ、この体はもう貴方に堕ちているんですもの。――男の方ってお好きでしょう？　体は快楽で堕ちて、心では抵抗を続けるというシチュエーションが」
「今それをするなら僕は死を選ぶ」
　きっぱりと言い切った吉久に、初雪はスッと目を細めた。
　どうして、どうしてこの人は思い通りにならないのだろうか。
　別段、今まで思い通りに生きていた人生だった訳ではない。
「――吉久君は私を言いなりにして好き放題していたでしょう？　なのにどうして私は駄目なのですか？　卑怯者だから、その言葉以外でお聞かせ願えますか？」
「今の君を知り、そして理解したいから。そして同時に……今の僕も理解して欲しいから」
「憧れと恋愛と性欲を混ぜ合わせ拗らせた方は、言うことが違いますね」
「正論を言うなって？　でも必要だと思うんだ。――はっきり言おう、今のままじゃ僕らは破綻する未来しか見えない」
「それこそ望み通りと言ったら？　私を壊したのは貴方ではありませんか」
　怨念の籠もった吐息を吐きかけ、初雪は吉久の顔の皮を剥がすよう

に撫でる。
　それは正しい怒りであり憎しみだった、けれどそれこそが彼にとっての証拠。
「ほら、今だってさ……君はその爪で僕の顔に傷をつけるコトだって出来る、その権利があるっていうのに我慢しているだろう？」
「ええ、愛していますから」
「それだけじゃない、初雪さんは僕を傷つけるコトを嫌がる思いやりがある、理性がある、――壊れてるって言うけどさ、壊したって自覚はあるけどさ。まだ君の全てが壊れたワケじゃないって、そう思うんだ」
「それ、は……」
「完全に元通りになんて言えない、僕には言う資格が無い。怒りも憎しみも、それは初雪さん自身の大切な気持ちだ。無理に消そうなんて思わない」
　ああ、と初雪は声にならない叫びをあげた。
　どうして彼は理解を示すのだろう、欲しい言葉をくれるのだろう。
　同時に思う、どうしてそれを最初から示してくれなかったのか。
「残酷です……、この世の何よりも残酷ですよ吉久君……」
「ごめんね。でも……少しでも君の心を軽くしたいんだ」
　好きだから、愛してるから、そんな言葉は喉の奥底に押し込めて。
（もう二度と、僕は初雪さんに愛してるなんて言っちゃいけない）
　それは彼女にした卑劣な仕打ちから、逃げる行為だ。
　仮に彼女が許し、望んだとしても。
　何より吉久自身が許せない、望まない。
「どうかな？　僕の出す条件を、先ずは聞いてくれるだけでも良いんだ」
「……分かりました」
　小さなため息が一つ、どうしてこんな狡い男を愛してしまったのだろうか。
　愛する男の誠実な言葉に、望んでいた真摯な態度に、どうして否と言えようか。

（吉久君は理解しているのかしら、私が貴方の望みを拒否できないって事を）
　初雪は、どんな条件が飛び出すか緊張しながら言葉を待って。
「条件その1。君からの暴力には抵抗しない、けど顔や首とか見えるところは止めて欲しい。――言い訳出来ない事態になるのは避けたい、僕は君の評判を落としたくないんだ」
「……成程、続けてください」
「条件その2。セックスは節度を保って、前みたいに学園の中では空き教室みたいに誰も居ない場合でもしない」
「質問です、学外では？」
「最大限に譲歩してラブホ……って、どうしてそこで学外って言葉が出てくるワケ??」
「だって私を羞恥心で責めるのお好きでしょう？」
　平然とした口調の中に混じる艶と憤りに、吉久は思わず冷や汗を流す。
　そんな彼に構わず、彼女は続けて。
「何度もしたじゃありませんか、鬘をかぶってサングラスを掛けさせて痴女そのものの格好で、公園や電車の中でバイブやローターを付けて歩き回させるの。ふふッ――実は私、癖になっているんです」
「な、何をだい初雪さん？」
「快楽に屈する私の体へ、恥辱と屈辱を味合わせてくる貴方へ、被虐心と憎悪と、悦びと愛の炎を燃やすのが」
　困った、これは思った以上に手遅れなのではないだろうか。
　完全に性癖がねじ曲がってしまっている、だが吉久は断固たる決意で告げた。
「うん！　条件2は絶対遵守で!!」
「そんなッ!?　こんな体に調教しておいて、一度染み着いた快楽を忘れろとッ!?」
「バレたら評判が下がるどころか、人生終わるヤツそのものでは？」
「それをさせたのは吉久君でしょうがッ!!」
「あの時は僕も人生終わっていい覚悟と、絶対に命にかえても守るっ

て覚悟してたから」
「ッ!?　うう〜〜〜〜」
　しまった、ちょっと勝てないと初雪はたじろんだ。
　これが己を陵辱した男、単に色んな物を拗らせた訳ではなく。
　人生を賭けて、己の全てを愛し独占しようとしていたのだと。
（狡いです、そんなの嬉しいって思ってしまうではないですか……――はッ、ダメです、こんな言葉に流されてはいけませんッ!!　断固として屈しな……いえ、むしろそれが普通で、で、でも……）
　目をぐるぐる回し苦悩を始めた初雪に、吉久は真剣な顔で両肩を掴み。
「条件3、恋人っぽいセックスしかしないから。もう僕は自分の中の獣欲に負けない、過激な玩具とかプレイとか絶対にしないよ!!」
「くッ、妥協案！　妥協案を望みます!!」
「内容によるね」
「せめて籍を入れて妻になったら！　そうしたら解禁してください!!」
「……それってさ、十八歳になったら在学中でも結婚届を出すってコト？　僕、性欲でそういう大事なコトを決めるのってどうかと思う」
　手強い、だがそれで諦める初雪ではない。
　はっきり言おう、彼女の愛や執着の中には性欲も大きな割合で入っているのだ。
「――――――分かりました、ならば此方も妥協する内容を変えましょう」
「具体的には？」
「物理的な強要はしません、過去の事実を突きつけてプレイを要求しません、でも……私がそうする様に誘惑し、貴方がその誘惑に負けた場合のみに可能としてくださいまし」
「……なるほど、ここが妥協する所か」
　吉久は素直に引き下がった、彼女の誘惑に耐えればいいだけの話だ。

その自信がある、彼女の体を知り尽くした己が誘惑なんかに負ける可能性など絶対にない。
――話が纏まったならば、次の条件だ。
「じゃあ条件の４。……なるべくさ、普通の恋人っぽくしよう」
「それは私としても望むところでもありますが、理由を聞いても？嫌がっていたでしょうに」
訝しげな視線を送る彼女に、彼はどこか晴れやかな顔で、しかして自嘲するような声色で。
「初雪さん、君を知りたいんだ。色んな君を僕は知りたいと思う」
そして。
「君の力になりたい、君を幸せにしたい、今度こそちゃんと……君が僕にそうして欲しいって、望んでくれているから。――ああ、でも勘違いだったら忘れて欲しい。何も聞かなかったコトにしてよ」
「吉久君……」
彼の言葉は、初雪の心に染み渡った。
嬉しかった、だからこそ理解出来た。
竹清吉久という男の子が、何故に狂信者と周囲から呼ばれていたか。
（これがきっと、本当の貴方なんですね）
思わず目を伏せる、伝わってくる。
後悔に苛まれ、罪悪感で死にたい程に、自己評価が低くそれ故に捻れて、――独占欲。
押し殺して押し殺して、それでも抑えきれない独占欲。
何をしてでも初雪の全てを知りたいという、執着心。
（――なんだ、私達、お似合いなんじゃありませんか）
彼女の存在その者が、平凡な人生を送るはずの彼を狂わせたのだ。
心優しく、正しい道を歩めるヒトを誤らせたのだ。
（私の美貌が、体が、声が、心が、言葉の一つ、所作のひとつ、全て全てが吉久君を狂わせた）
だって今も尚、自分から手放しておいて彼は己に執着している。
確かに初雪を思いやっているのに、どうしても己の欲望を抑えきれ

ない。
その事実に、……彼は気づいているのだろうか。
（――あはッ、あはははははははッ!!）
愉しい、こんなに愉しい事が今までの人生に存在しただろうか。
愛情が止めどなく溢れていく、憎悪が限りなく噴出していく。
（あ、うん、これ提案して正解だったみたい）
吉久は暗い快楽に顔を歪ませて嗤う彼女を、冷静な目で見ていた。
その歪みは、生来の物だったかもしれない。
けれどそれは、吉久が呼び覚まさなかったら発露しなかった物で。
「ねぇ、初雪さん……僕は絶対に君を幸せにする。例え一生かかったとしても、命を喪う事になっても、君の心を軽くしてみせる」
「その時が来るのを楽しみにしているわ、でも忘れないでください――私は貴方を愛するのと同じ大きさで、殺したい程に憎んでいるという事を」
吉久は決意を灯した目で、初雪は激しい愛憎を宿した瞳で、挑発的に見つめ合う。
そして自然と顔は近づき、唇と唇があわさる寸前であった。
「あっ、そうだ授業!?」
「今日はもうサボりませんか？　私、今から貧血になりますので。吉久君は保健室で看護していた、という名目で恋人セックスをしましょう」
「嘘はよくないよ、それに学内ではしないって言ったばっかだよね??」
「――――吉久君が保険医役で、無垢なお嬢様とエッチな身体測定プレイが可能ですよ？　本当に良いんですか？」
「それ真面目な顔で言うコトかな??」
「違うと、リモコンローターで授業中に屈辱の羞恥プレイがしたいと、そう言うんですね」
「一言も言ってないよねそれ、普通に授業に出よう??　ほら、君の教室までお姫様抱っこするから……」
「くッ、なんて卑怯なのです吉久君ッ!?　そんなの、そんなの――――」

葛藤する初雪を無視して、吉久は無理矢理にお姫様抱っこを決行。
正直な話、そこまで腕力があるわけでは無いがそこは気合いでカバーだ。
「有無を言わさずですか、本当に卑劣なヒトですね吉久君は……あむッ」
「っ!? 甘噛みするなら前もって言ってよ。それから条件に追加ね、噛み痕やキスマークは見えるところに残さないコト」
「分かりました、んちゅ～～」
「言ってる側から首筋にキスマーク付けないでよッ!?」
「これは虫除けですから、私の所有物という証なのでカウントに入りません」
「くっ、こんなコトならお姫様抱っこなんてしないで放置すれば良かった……」
(放置しても吉久君は戻ってきて同じ事をすると思いますけどね)
初雪はくすくすと鈴の音の様に軽やかに笑いながら、教室までお姫様気分を味わったのだった。

そして、次の日の放課後である。
「何時来てもココは静かだよなぁ……まぁ相談するには好都合だけど」
吉久は初雪には内緒で、親友・根古紗楽の所属している部活。
旧校舎にある、写真部の部室の前まで来ていたのであった。

がぶがぶ／１０　放課後写真倶楽部

戦前から続く伝統ある私立アングレカム学園、その写真部もまた伝統ある部活……という訳でもなかった。
設立は一年前、幽霊部員の確保によりどうにか部室と最低限の予算は確保出来てはいるが。
その活動内容は、文化祭の展示のみ。
そんな中で、数少ないまともに活動している者。
それこそが吉久の親友であり悪友でもある、写真部部長・根古紗楽。
彼女の恋人であり後輩でもある、藤原兼嗣の二人であった。
「うーっす、邪魔するねーー？」
「は？　邪魔するなら帰ってくれませんか先輩？」
「おっけー、さよならだ」
「なんでキミ達は、毎回その茶番をするのだい？　ボクには理解できないよ」
彼氏と親友の行動に、呆れた様なため息を吐き出す紗楽。
男二人は顔を見合わせて。
「紗楽さん、俺は真面目に言ってるぞ。実力は認めるが、こんなクソ男の象徴の様な先輩とは縁を切った方が良い」
「流石に恋人達の甘い空間に割り込むワケだからね、引けと言われたら引く心遣いなんだよ」
「そうか、なら帰れよ。どうせまた変な事をやらかすつもりだろう」
「本当に邪魔なら帰るけどね、相談があるんだよ聞いて貰えないかな」
「やっぱ面倒事じゃねぇかよ!!　帰れ!!」
一年下の後輩、兼嗣はうんざりした顔でドアを指さした。
彼と吉久は、単に親友の彼氏、恋人の親友という間柄ではなく。
兼嗣が道を誤った時に救って貰った恩人という関係ではあったが。
「まぁまぁカネくん、折角よっしーが頼ってきてくれたんだ。お茶でも煎れるから話を聞こうじゃないか」
「とっとと席につけクソ男先輩、紗楽さんに感謝しろよ」

「うーん、相変わらず掌がくるっくるに回転してるね。僕、君のそういう所って好きだなぁ」
「……俺はクソ男先輩のそういう素直な所を尊敬しますが、紗楽さんとキャラ被ってるのが嫌いです」
　にこにこと笑う吉久に、ぶすっと告げる兼嗣。
　紗楽は苦笑しながら、指先で恋人の頬を押して。
「珈琲かい？　それとも緑茶？　お菓子はいらないよ、目の前で甘い光景を見せられてるからね。よっ、ベストカップル！」
「ふふん、キミは煽てるのが得意だね親友。今日は甘ったるいココアだよ、甘い幸せをキミにも分けてあげよう」
「とほほ、幸せのお裾分けとは嬉しいねぇ……あ、美味しい」
　ずずず、とココアを堪能する吉久に。
　兼嗣は紗楽を膝の上に乗せながら、訝しげな顔で問いかけた。
「つーか聞いたぞ竹清先輩、あの聖女様と恋人で同棲を始めたって話じゃねぇか」
「そうなんだよ、今朝もよっしーに会いにウチのクラスまで来てさぁ。ビックリして心臓が飛び出そうだっったんだ」
「うん、まぁ、その事に関係してるんだけどね……」
「歯切れが悪いな先輩、何を相談しようってんだ？　没落しかけてるとはいえ、この学園を経営してるんだ。一乗寺家を頼った方が良いんじゃないか？」
　もっともな指摘に、吉久は頬をぽりぽりかきながら。
　曖昧な表情で、苦笑をひとつ。
「恥を晒すみたいで恥ずかしいんだけどさ、実は借金があるんだ」
「キミのお父さんのかい？」
「いや僕の、初雪さんへの借金」
「……クソ男先輩？　それなら返済期限を待って貰うとかすれば良いんじゃねぇか？」
「まぁ、向こうは借金って認識してない可能性が高いし僕の自己満足みたいなもんだけど。ちょっと問題が発生してね」
　昨晩、彼女から唐突に告げられた言葉。

それを裏付けるように、彼のアルバイト先から電話があって。
「初雪さんがさぁ、僕ともっと一緒にいたいからってバイト先に手を回してクビにしちゃって」
「は!?　え?　あの人ってそんな事すんのか!?　先輩のフカしじゃなくて!?　本当に!?」
「嫉妬深い所があるのかなって、今朝は薄々思ったけど……本当の本当かい?　困った人を助けずにはいられないような優しい人が、キミのバイト先に圧力をかけたと??」
信じられない、と顔を見合わせる恋人達に。
やはり吉久は曖昧な顔しか出来ない、なにせ全ては自業自得だ。
「このままじゃ僕さ、ヒモ確定だから。婿入りすら決まってるかもしれないし。自由に出来るお金、とまで言わないけど借金返済の為に家庭教師のバイトでも斡旋してくれないかなって」
「ああ、それでカネくんに頼みに来たんだね。何せカネくんの実家はその手の派遣会社のまとめ役だもの」
「というワケで、ダメかな兼嗣。ホントお願いっ、多分、五万ぐらい稼げればいい筈だから!!」
手を合わせて拝む吉久に、彼は難しい顔をする。
実の所、今までも生活費の名目で家庭教師のバイトを斡旋した事がある。
だが。
「――断る」
「そこを何とかっ!!」
「断るッ!　つーかテメェ、俺の斡旋した先で何回もやらかしてるじゃねぇかよ!!　これ以上やらかされてたまるか!!」
「えー、でも家庭教師の評判は良いよね僕って。相手の子に今でも勉強の質問とかされるし」
「そういう事じゃねぇよ!!　アンタ、前回は何をやらかしたか覚えてるのか!?」
「うーん、教えるついでにその子のお兄さんのプライベートな悩みを解決した」

「あってるけどッ、あってるけどさァ!!　それで何で先輩は、男の娘オンリーの風俗店の起業に絡んでるんだよッ!!　どう考えてもおかしいだろッ!?」
「ああ……、確かその前はコスプレ衣装の制作者と某アパレルのコラボに一役買っていたっけ」
「アンタはトラブルを引き寄せるんだよッ、アルバイトと関係ない所でやらかすんだよッ、しかも利益でて誰も損してないから腹立たしいッ、俺なんか親父に誉められたんだぞ、良い人材を紹介したなって」
「怒ってるのか感謝してるのか、どっちだい??」
　吉久としては、良かれとやった事だし。
　偶然、その悩みを解決できる者を紹介しただけで、解決の場に居合わせただけで。
　主観としては、勉強を教えたついでにお悩み相談wしただけだ。
「初雪さんの真似して、誰かの悩みを解決したかっただけなんだけどなぁ……」
「くそう……狂信者は言う事が違うッ、俺はどうすれば良いんだッ、利益は出るッ、恩義もあるッ、だが不安でしょうがないッ!!」
「よしよし、可愛そうなカネくん……。ボクが付いてるよ、それならいっその事、このままよっしーの悩みを聖女様に横流ししたらどうだい？」
「それだッ!!　天才だよ紗楽さん!!　愛してる!!」
「それだ！　じゃないよっ!?　マジで止めて、本当に止めてっ、初雪さんに知られたら僕、どうなるか分からないなよっ!?」
「いやいや先輩……、聖女様ですよ？　精々が可愛い嫉妬じゃないですか？」
「そうだよ、よっしー。借金の事は聖女様とイチャイチャしながら話し合うのが一番だと思うんだ。あ、それからもう連絡しておいたから」
「何てコトをしてくれたんだいシャラっ!?　僕を殺す気かっ!?」
　残ったココアを慌てて飲み干し、立ち上がる吉久。
　少し口内を火傷したが、そんな些細なことに構ってはいられない。

（不味い不味い不味いっ、何が不味いって今の初雪さんがどうでるか分からないってコトが一番不味いんだよ!!）
困ったヒト、とアルバイトを許してくれるなんてココアより甘い都合の良い夢でしかない。
暴力は振るわれないだろう、だが行動に制限がかけられるかもしれない。
もしかすると、精神的苦痛を理由に借金が増額されるかもしれない。
（それだけじゃない、借金して買った物が、買いに行かせた内容も問題なんだよっ、ああ、初雪さんがどんな顔で何を言ってくるか今から不安だっ！）
逃げなければ、少しでも時間を稼いで言い訳を作らなければならない。
なにせ、吉久が言う借金とは。
過去、陵辱調教していた時に、羞恥プレイの一環で痴女そのものの布面積が極端に少ない服で。
アダルトトイやコンドームを、大声で買わせたプレイの時の代金である。
（――――やべっ、それだけじゃなかった。他にも借金してた……っ!!）
裸エプロンで料理をさせた時の材料代とエプロン代、彼女の精神を消耗させる為に彼女の財布から万札を取り出させてトイレットペーパーの代わりをさせた事もある。
（はははははっ、もう笑うしかないや。何で僕はそんなに暴走してたんですかねぇっ!?）
立ち上がるなり、青い顔で震え始めた吉久に。
紗楽と兼嗣は、不思議そうに顔を見合わせて。
その視線に気づいた彼は、はっと我に返った。
「用事を思い出したから、申し訳ないけど今日は帰らせて貰うよ」
「――――なら、私とご一緒に帰りましょう吉久君？」
「……う、うーん、幻覚が聞こえたみたいだ。すまないけどソ

ファーに横になっていいかい？」
「あら、お疲れですか？　なら私が膝枕をしてさしあげますッ」
「……」
「……」
「――――――なんでもう居るのさ畜生っ!!」
「浮気？　浮気ですか吉久君？　私に内緒で意味不明な借金の返済？　私への借金とは？　もしや私から逃げるおつもりです？　何の責任も取らずに??」
　頭を抱えて座り直す吉久、初雪は逃がすまいと腕を絡め取りながら顔を近づけて言い放つ。
　笑顔の筈の聖女が放つ冷え冷えとした怒気に、二人は大口を開けて驚愕し。
　吉久は己の胃が、キュウキュウキリキリと痛むのを自覚した。
「取りあえずさ、説明させてくれるかい？　出来れば家で、ほら、あの時の話だから」
「へぇ、どんな言い訳を聞かせてくれるか今から楽しみで仕方ありませんわ私の愛しい最低男さん？」
「ってワケだから、今度こそ本当に帰るね。じゃっ、また明日……」
「ふふっ、ご機嫌ようお二方。また明日、元気な姿でお会いできると嬉しいです」
「その元気な姿に、僕は入っているのかな？」
「あら、それは帰ってから次第ですよ最愛の無責任さん？」
　仲良く腕を組み、と言うには背後にドナドナと聞こえてきそうな退場を。
　二人は静かに見送って、ドアが閉まった所でぷはぁと盛大に呼吸を再開。
「……なぁ紗楽さん、アレどうなってるの？」
「聞かないで、ボクにも分かんないんだ。初雪嬢がよっしーにゾッコンラブな事は確かみたいなんだけど……あ、そういえば忘れてた」

そう言うと彼女は彼の膝から降りて、テーブルの上にあった封筒を手に取り走り出す。
「よっしー達に渡すものがあったんだ、少し行ってくるよ!!」
「オッケー、ならコップ片づけながら待ってるぜ」
部室を出た彼女は、楽々と廊下の途中で追いつくと。
「はい、これ」
「なんだいコレ?」
「実はさ、君たちの登校風景を撮っていたんだ。二人とも良い表情してるからさ、あげようと思って」
「なるほど?」
「……ふふっ、流石は写真部の部長ですね。嬉しい、吉久君との初めての一緒の写真です」
渡された写真を、大事そうに持ち微笑む初雪。
その光景に、罪悪感を覚えた吉久は彼女に聞こえない様に紗楽に小声で問いかける。
「初雪嬢から離れて内緒話かい?」
「ちょっと聞いてみたいコトを急に思い出したから。――ねぇ、加害者は被害者に何が出来るのかな?」
「そんなコトかい? 加害者が出来るコトなんて被害者の復讐を受け止めて死ぬコトだけだろう。傷ついた心は、相手に同じ傷をつけても恨みは晴れないってものさ」
「……成程、興味深い回答ありがと」
実の所、相談の一つはそれであった。
吉久が初雪の為に出来る事、それは何かを探して。
(過激な意見だけど、そんなものだよなぁ……)
「――吉久君? 私をのけ者にして内緒話ですか?」
「いや、シャラにカメラを返してなかったのを思い出してね。ほら、アレに使ったやつ」
「はァッ!? あ、あれ紗楽さんのだったのですか!? ごめんなさい、明日ちゃんと持ってきますね。――吉久君、そういう事は前もって言ってください、破棄してしまう所だったでしょう!!」

「あ、ああ。急がなくていいよ、あのカメラは罪にたいする罰としてよっしーに預けてたものだからね。むしろ返さなくていいぐらいなんだ」
「……紗楽さんがそう言うなら。けど吉久君、この件についても説明して貰いますからね」
「はいはい、僕は生きて明日を迎えられるかなぁ……じゃあ今度こそバイバイまた明日ね」
そう告げて帰って行く二人の背中を、紗楽は難しい顔で見ながら。
(何があったか知らないけどさ、手遅れになる前に相談してくれよ親友……)
己も恋人と帰るため、部室に戻るのだった。

――結論から言おう、吉久はその日の夜を無傷で乗り切った。
反面、精力と体力は大きく消耗し上った朝日が黄色く見えたが、生命の無事に比べたらとても些細な問題である。
それよりも。
「ねぇ初雪さん、今なんて言った?」
「ですから、今日から一緒に登校しましょうと」
「その前」
「アルバイトは許可しませんが、代わりに恋人っぽい事をする度にお金を払うという所ですか?」
「そうだよっ、なんでそんなヒモと同じような事になるんだよおおおおおおおおおおおおおっ!?」
登校直前、玄関にて吉久は膝から崩れ落ちたのだった。

がぶがぶ／11　登校デート（有料）

その日、私立アングレカム学園の生徒達は噂が本当であった事を目の当たりにした。
平凡な見た目ではあるが、顔の広さと人当たりの良さと狂信者っぷりで有名な竹清吉久と。
学園随一の美人であり、理事長の一人娘であり、聖女と名高い心優しき女生徒の一条寺初雪。
「うわ、あの話って本当だったんだ……」「見ろよお似合い……なのか？」「少なくとも幸せそうだし良いんじゃね？」「これで狂信者が大人しく――なると思うか」「聖女様が抑えてくれるだろ」
等々。
仲良く腕を組み登校する姿に、生徒達は少し遠巻きに眺めながら歩き。
そして当の本人達と言えば、表面上は笑顔を浮かべ。
「ご不満ですか？　まるでヒモのような扱いに」
「普通は不満だと思うんだけど？」
「あら、私は嬉しかったですよ？　セックスした後の笑顔でお礼を言わされながらお金を渡すのが。ええ、とーっても屈辱的で心が震えました」
「な、なるほど??」
「他にも色々とありますが、思い出しましょうか？　貴方に教えられた愛の日々を……」
戦況は極めて不利、どう考えても過去の悪行への意趣返しであり。
同時に、吉久の牙を抜く策略である。
だが、言葉だけで引き下がる彼ではない。
「ちなみに、料金体系はどうなってるワケ？」
「腕を組み歩く、それだけで一万円差し上げましょう」
「他には？」
「キスをして頂けたら二万、胸を揉んでいただけるのなら五万、セック

スなら――……時価」
「時価ときたかぁ……、つまり下手くそだとゼロ円もあり得ると」
金銭感覚を麻痺させ、経済的に依存させ、そしてセックスに値段をつけて心を折りにくるつもりだ。
「君がそう来るならさ、僕にも対抗策があるよ」
「聞きましょう、同い年の高校生から巨額の金銭を貢がれる最低最悪のヒモ男さん」
「初雪さんに対する行動に金銭が発生するなら、――今後、全ての行動を事務的にする」
「……つまり？」
「僕はね、君の従者或いは執事として振るまおう。セックスも事務的に、愛の欠片などないってね」
これに耐えられるかい？　という挑発的な視線に、初雪は彼の腕を胸でぱふぱふと挟み誘惑しながら。
「――――つまり、事務ックスが楽しめると」
「無敵だね初雪さんっ??　どうしてソッチ方面に行くわけ??　普通さ、こんなに尽くしてるのに冷たくされて悲しい、もうこんな酷い男なんて知らないってなるじゃない??」
「どこまでも自分勝手で偏執的で狂気すら感じられる愛を半年も休まず念入りに、この体の隅から隅まで、貴方の肛門の皺の数を数える事すら喜ぶように躾られた私に、他ならぬ吉久君が何かを言う権利があると御思いですか？」
どこまでも笑顔で、どこまでも冷ややかな言葉。
吉久の腕は幸福な感覚に包まれているのに、背中に氷柱を差し込まれたような恐怖を感じる。
（な、何か解決策を見つけるんだっ!!）
こんなのは間違っている、倫理的にとてもよろしくないし。
第一、彼女が幾らお金持ちだとしても資産は有限だ。
（――初雪さんは、僕に貢ぐコトで破滅しようとしているのか？）
（ふふっ、もっと、もっと私の事で悩んでください吉久君……貴方が私の事だけを考えていると思うと、嗚呼、体の奥が疼いてしかたありま

せん……ッ）
悩む吉久に、初雪は口元を小さく歪め嗤う。
彼が想像している通りに、金銭的に依存させ身動きとれなくする。
この一点は正解である。
しかし。
（そんなもの、あわよくばの副産物なんですよ吉久君）
彼はこの状況に対して、どんな答えを出すのだろうか。
知りたい、その気持ちが、思考経路の一つ一つが。
（嬉しい、……少しでも貴方の気持ちが私に向いている事が、とても嬉しいんです）
もし初雪が普通の女の子なら、もっと素直に一喜一憂できたのだろうか。
もし出会い方が違えば、彼の存在に気づいていれば、何かが違っていただろうか。
（貴方は私の心を少しでも軽くと言った。それはきっとあの日の望みを、普通の幸せを私に与えてくれるという事……）
でも、初雪は気づいている。
確かに心からの発言、決意だろう。
けれど彼女の一番欲しい望みを、彼は叶えようとしていない。
贖罪の為に側にいるのに、それをしてくれない。
（恨めしい、本当に酷いヒトです吉久君。――貴方は）
どうして、一緒に普通の幸せを掴もうと言ってくれないのか。
どうして、初雪の幸福に己の存在を認めないのか。
ドロリと心が溢れそうになる、彼の首筋に今すぐ噛みつきたくなる。
（――首に殺気っ!?　不味い、思考に時間をかけ過ぎたか!?）
解決策の模索に没頭していた吉久は、敏感に危険を察知して。
されどまだ答えは出ていない、あらゆる可能性を考えても何を目的としているか判別できない。
（分からないなら、……そうだね、この手しかない）
（どう出るのですか？　また快楽で私を征服しますか？　それとも、

散財して私が愛想を尽かすのを狙いますか？）
（あの頃と同じコトは絶対にしない、そして無闇にお金を使うこともしない）
（どんな答えを出すとしても、――貴方は私なしでは生きていけなくなる道を進むんです）
二人の間にしか分からない、緊迫した空気が流れる。
初雪が追撃の言葉を出そうか迷った瞬間、吉久はおもむろに口を開いて。
「分かった、今回の提案を受けよう」
「――――そうですか、それは何よりです」
「けど初雪さんは理解してるのかい？　僕に自由となるお金を渡す、その意味がさ」
「……どういう事ですか」
また卑猥な玩具を購入して一晩中責め立てられるのか、それとも商売女を買うとでも言うのか。
はたまた、商売を始めるとでも言うのか。
――吉久の言葉は、初雪の想像を越えていた。
「僕はね、これといった趣味が無いんだ。貧乏育ちってコトもあるけどさ、勉強しかしてこなかったから」
「ええ、存じております。つまり……、得たお金を新たな趣味に使うと？」
「いいや、既存の趣味さ。僕の唯一の趣味と言っても過言じゃない」
「そんなモノございましたか？　あの小説やマンガが一冊も無い部屋で？　ノートパソコンやスマホも、ニュースサイトの閲覧か情報検索にしか使っていないでしょう」
嫌な予感がする、何を見落としていたのだろうか。
彼の事は足の爪先から、髪の毛一本に至るまで知り尽くしているというのに。
動揺する初雪に向かって、吉久は心からの笑顔を向けた。
「――全部、君の為に使うよ。だって君が僕の為にくれたお金だもの」
「ぐ、具体的には？」

「まず、そうだねぇ……デートの資金は確定かな？　それから初雪さんに似合う服もプレゼントしたい、ああ、そうだね料理だって作ってあげたいし……、おっと忘れてた、お揃いのさ、ペアルックの服を買って部屋着にするとかどうかな？」
「な、なななななッ、なるほどォ!?」
　ボッと火を噴くように、初雪の顔は真っ赤になった。
　視界がぐるぐるして、思考が定まらない。
　胸が甘く痛む、口元がにやける。
（こんッ、こんな安い女じゃなかった筈です私はッ、え、ええッ、こんな手口、本当にヒモのそれじゃないですか！　貢いだお金で愛を返す、ええ、最低のヒモ男です!!）
「それだけじゃないよ、お金は僕に自由な時間を与える……それはつまり、君に尽くす時間が増えるってコトさ」
「つ、尽くすッ!?　何をするつもりですかッ!?」
「朝はご飯を作りながら君の目覚めを待って、勿論、あーんして食べさせる」
「あーんがッ!?　唾液や精液しか飲ませてくれなかった吉久君がッ!?」
「登校する前は君の着替えを手伝うよ、下着を選んで丁寧に着させてさ、髪も時間をかけてとかそう」
「〜〜〜〜ッ!?」
「お昼は僕の手作り弁当さ、そして一緒に帰って、ああ、帰る前に教室で二人っきりで勉強とかもいいね」
　ぷしゅうと煙が出る勢いで茹で上がった初雪は、朱に染まった顔を俯かせる。
　目も合わせられないぐらい、恥ずかしい。
　そんな生活、想像しただけで鼻血が出そうだ。
（なぁッ!?　うううううッ、ひ、卑怯です吉久君!?）
「晩ご飯だって僕が、それからお風呂も一緒に体だって綺麗に磨いてあげる、夜は――うん、どうなると思う？」
「……お、王子様みたいに優しく？」

「いや？　普通に寝るだけだよ、セックスは時価だし夜更かしは美容に悪いからね」
「そこは私をメロメロにする所でしょうッ!?　ケダモノの様な貴方は何処に行ったのですッ!?」
「今の僕は――賢者タイムが継続してるみたいなものだからね」
　きっと己は、あの悪夢の様な幸福な半年間に全ての欲望を解放してしまったのだ。
　今の彼女に欲情しないと、勃起しないと言ったら嘘になる。
　だが、今の吉久は紳士として行動できる。
「どう？　お金を払うっていうなら僕はこれだけのコトをし続けるよ」
「……ちょ、ちょっと考えさせて頂けますか？」
「ちなみに、これを実行した場合は君は僕にお金を払って尽くされるだけの存在になるからね。よーく考えてくれよ？」
「――――――――――あ」
　その言葉で、すっと初雪の熱が冷めていく。
　何が違うのだろうか、吉久に愛される前の生活と。
　何が違うのだろうか、吉久に解放された後の生活と。
（本当に、本当に残酷なヒトですね吉久君……）
　一方的な愛など、愛ではない。
　だから吉久は初雪を解放したのだと、彼女も理解している。
　あの時、彼女は彼を愛しながらも心から愛を伝えなかったのだから。
　諦観に、快楽に溺れ、一方的な愛を良しとしてしまったのだから。
「――――それでも、私は撤回しません」
「僕はやると言ったらやる男だよ」
「ええ、理解していますとも。身を持って体験致しましたもの。……だから、その上で新たな提案です」
　このままではダメだと、初雪は一歩を踏み出す。
「私は貴方に一方的に愛される事を望みません、けれどお金で縛り付けたい事も事実です」

「じゃあどうするの？」
「ふふッ、――勝負をしましょう。私と吉久君で、この件を成否をかけて」
「内容は？」
「今晩、どちらの作った料理が美味しいか」
「――――分かったよ、僕は勝負を受ける!!」
見せつけるのだ、彼から離れていた三ヶ月間でやってきたのは実家の掌握だけではない。
（――花嫁修業の成果、料理特訓の成果を今こそ発揮する時ですッ!!）
もう、カップ麺を作るのに失敗していた頃の自分はいない。
愛する者を虜にする料理を作れる、良妻賢母の力をもった存在になったのだから。
そして。
（ええ、私が妻として相応しいと思ったなら……、吉久君も私をベッドに連れ込みたくてたまらなくなる筈ですッ!!）
（絶対に勝ちに行くぞっ、くそっ、油断したよまったくさぁ!!　お金の話はこの勝負の布石っ!!　負ければ――嗚呼、どんな事を命令されるか分かったもんじゃないっ!!　絶対に……絶対に負けられない）
燃え上がる二人の意識は早くも放課後へ、学園についても授業中でも、勝負の事しか頭になく。
そして放課後である、吉久と初雪は家の近くのスーパーに足を踏み入れ。
「いざ尋常に――」
「――勝負といきましょうッ!!」
真剣勝負が始まった。

がぶがぶ／１２　満腹になった後は??

吉久に見せつけなければいけない、一条寺初雪が彼のお嫁さんに唯一無二の存在であると。

（ええ、貴方に犯された日からずっと、ずっと吉久君の事だけを考えて、観察していたのです。――食の好みなんて把握していない訳がないのですよ？）

勝てる、そして彼は言うだろう。

『美味しいよ初雪さんっ！　僕が間違ってた……どうか僕のお嫁さんになってください』

（なんて、ええ、そんな事になったらどうしましょうか。ふふッ、これは気合いを入れて食材から選ばないと……）

上機嫌であるが視線は鋭く、獲物を狙う肉食動物のように先ずはと野菜から選び始める。

一方で吉久といえば、厳しい顔つき。

（どうする、初雪さんの好きな食べ物なんて知らないよっ!?　何を作る、いや、何を目的として作るか、そしてそれに対抗できる料理……）

初雪の事は何でも知っている、と断言するには最近になって急速に自信が揺らいでいるからだ。

聖女と呼ばれるだけあって、個人情報もそれなりに知られている彼女ではあるが。

（初雪さんって好き嫌いしないし。かといって、スイーツや果物が特に好きという情報もないからなぁ……、甘党とか辛党って話も聞かないし）

勿論、彼女にも多少の好みはある。

だが、今まで生きていく上で食事とは栄養補給と同義だった。

食事の大切さを知ったのは、良くも悪くも吉久と出逢ってからであり。

（発端はお金の問題だった、そして料理勝負という事は僕が初雪さんの料理を不味いと言えば少なくとも負けることは無くなる）

しかし、それで良いのだろうか。
どう考えても、彼女の心を傷つける行為だ。
そして何より。
（……いや、美味しいんだよね初雪さんの料理って。そりゃあ最初はカップ麺を触るのすら初めての箱入りだったけどさぁ）
解放する前には、毎朝のように吉久好みの朝食を用意し。
お昼にはお弁当。
夜もまた……な、通い妻状態。
（そうだ、僕は初雪さんを良妻賢母に育ててしまったんだっ!!　勝てるのか？）
何を作り、何をどうすればその先にある彼女の企みを阻止出きるのだろうか。
（――――逆に考えよう、負けてしまっても良いと。そしてこうも考えよう、僕の好物を知って貰えば良いんだ、と。後の事は、その先にどんな罠が待ち受けたとしても……その時の僕に任せた!!）
ならば動くのみ、付け合わせの野菜から確保に動いた吉久であったが。
「あ」「えッ」
「……」「……」
奇しくも同じタイミングで、じゃがいもを手に取る。
買い物カゴを見てみれば、タマネギに人参、ブロッコリー。
（食材が被ったっ!?　い、いやスタンダードな食材だから。うん、まだ分からない、……同じ物を作るとかね、まさかそんな筈は……）
（カレー、の可能性もあります。まだそうと決まった訳では……しかしカレーの場合、私が吉久君の好みを読み間違えた事にッ!?）
メニューを変更するなら、まだ手遅れじゃない。
今の内に、全く別のを考えればいい。
だが。
（うーん、ここは初志貫徹。どうせ資金は初雪さん持ちだし僕は食べたい物を作る!!）
（――――敢えて、メニューを被らせてくる可能性はあるでしょうか

……、あり得ますね吉久君は意地悪ですから、ええ、私の精神を折る事にあんなに苦心してましたものね？）

初雪は逡巡し、メニューの変更する選択肢を捨てた。

仮に同じだったとしても。

（理解するでしょう、このジャンルにおいて貴方は私に絶対に勝てないとッ!!）

闘志を燃やしつつ、初雪は精肉コーナーへ。

そしてまた吉久も、同じく精肉コーナー。

（合い挽き肉を手に取ったっ!?　え、同じ？　同じなのかい初雪さん??）

（くっ、これも同じですか！　まさか同じメニューで私を打倒する策があるとでも!?）

次の場所へ向かう二人、パン粉、卵、そして初雪は調理道具が置いてある雑貨コーナーへ。

吉久は、調味料のコーナーへ。

（最後の最後で分かれた……、まだ同じだと確定したワケじゃない）

（カレー……このスーパーの調味料の所にはカレールゥも置いていた筈、ならばやはりカレー……ッ、ま、まさか私に激辛カレーを食べさせ水を取り上げたり、腹痛を起こした私の前でトイレを封鎖する、そんな卑劣な手段を使うというのですか!!）

やはり性根は鬼畜の屑、初雪を諦めさせる為に食事を利用し屈辱を与えるつもりか。

（ええ、覚えていますとも。初めて朝食を作ったあの日、貴方は嬉しいような悲しそうな顔で憤慨して、せっかく作った朝食に精液をぶっかけ私に食べさせて感謝のお礼まで全裸土下座で言わせましたものね、ええ――あの屈辱は忘れません、カレーはスカトロの暗示、貴方があまり望まなかったプレイですが……、今度は排泄を直接見せるプレイだけでなく、もっと過激なプレイを――――）

過去の陵辱を思いだし、ふつふつと怒りと快楽が沸き上がってくる初雪。

負けられない、彼の妻になろうとしている身だ。

もう決して、決して食事は汚させないし、美味しいと言わせてみせる。
（うう……ッ、あの味を思い出したら涎が……、く、癖になってません、ええ、あのどん底に落ちた感覚が癖になってるとか、性的な事と食事の快楽が一緒になる背徳的感覚とか癖になってませんからねッ!!）
誰に言い訳しているのか、初雪は綺麗に澄ました顔の下で悶えて。
そしてレジに並ぶ前、他の客の邪魔にならない所で二人はカゴを確認しあう。
「これで全部かい？」
「ええ、吉久君も買い忘れはありませんね？」
「勿論さ、ところで僕はデミグラスソースのハンバーグを作るつもりだけど。……君は？」
「あら奇遇ですね、私もハンバーグです。目玉焼きを花形の型に入れて焼き、ハンバーグに乗せた花丸ハンバーグです」
被った、これで勝負はハンバーグ対決になってしまった。
（……これで最悪のカレーの屈辱の線は消えました、けれど――まだ油断できません）
（うーん、これって勝負する意味あるのかな？）
（ならば勝負は、やはり味ッ!!　主婦を目指す身としてッ、可愛いお嫁さんにして貰う為にッ!!）
（というかさ、食材も無駄だよね。味付けは違うけど他は一緒なんだもん）
最大限に警戒する初雪に、吉久は提案した。
「じゃあさ、一緒に作らないかい？　同じハンバーグなんだし」
「……――、意図を、教えて頂けますか？」
「え？　だって同じのを作るんだったら食材は半分で良いでしょ。それにさ……僕はちょっと嬉しいんだ」
「うれ……し、い??」
不可解すぎると首を傾げる彼女に、吉久は素直に告げた。
確かに彼女とそういう関係になるのを、今は厭っている。
けれど。

「君がさ、僕の好みを理解してくれていたのが嬉しいんだ。――自惚れじゃなければ、僕の為に僕が好きな物を作ろうとしているんでしょ？」
「そ、それは、そう……ですが……」
「だからさ、今日は一緒に作ろうよ。実は僕さ、彼女が出来たら一緒に料理とか作れたらなって思ってたんだ」
「――ッ!?　は、はいッ！　一緒に作りましょう吉久君っ!!」
　先程の疑いを速攻で消し去り、初雪は心の底から喜んだ。
（一緒にお料理……うふふッ、前に見た少女マンガみたいに、私と一緒に、私が、吉久君と――）
　嬉しい、こんな日が来るとは思っていなかった。
　けれど同時に思ってしまう、喜びが大きければ大きい程、膨れ上がってしまう。
（どうして）
　どうして、素直に喜べないのだろう。
　どうして、こんな関係を最初から築けなかったのか築いてくれなかったのか。
（こんなに優しくしてくれるなら、期待をさせるなら――）
　どうして、彼は関係を拒むのか。
（酷い、ヒト）
　どろりと、凶暴な何かが這い上がってきそうだ。
　笑顔で無言になった彼女の変化を、吉久は敏感に察して。
（だからさ、僕は君と離れようとしたんだよ。僕と君は最初のボタンを掛け違った、いや……僕が放棄したんだ）
　でも。
（君が望むなら、僕は心の底から嫌とは言えないよ）
　だからきっと、この同棲生活は破滅が待っている。
　次の関係に進む前に、彼女の心が軽くなる前に、どちらかが壊れる。
（もしくは、僕ら二人とも）
　それが罪への罰というなら、今この時だけでも彼女に幸せを感じて欲しくて。

吉久はそっと手を伸ばし、初雪の手に添えた。
「さ、食材の半分は戻してレジに行こうか！　折角だからデミグラスソースの、はなまるハンバーグってのはどうかな？」
「――ッ、え、ええ、良いアイディアです。そうしましょう！」
暗い感情から今は目を反らして、二人は仲良く買い物を終える。
スーパーからの帰り道、わざとらしく二人で一緒にエコバックを持って。
帰宅後は、提案通りに一緒にハンバーグを作って。
――そして、夕食後。
（あー、美味しかったし楽しかったなぁ……）
この後はどうするか、今は二人の部屋だが元は吉久だけの部屋。
当然と言うべきか、娯楽は少なく皆無と言っていい。
（こんなコトなら、ゲーム機の一つぐらい無理して買っても……いや、今更か）
ならば選択肢は、映画を借りて見るか勉強するか、だ。
下手な行動は出来ない、吉久が思っていた以上に初雪の体は快楽に墜ちている。
無論、心までは快楽に墜ちてはいない。
だが、恋に墜ちているのなら話は別だ。
（……セックスしたいって言うよなぁ、ストレートに断ったらどうなるコトやら）
鼻歌交じりで食器を洗う初雪の後ろ姿を、正確には動きに合わせて揺れる腰と臀部を眺めながら。
吉久は悩んだ、性欲と理性、罪悪感と贖罪、彼女を抱くのが本当に正解なのか。
（今だけ切り取ったら、文句なしに幸せな光景なんだけどね）
（嗚呼、なんて穏やかな時間なのでしょうか。……私は、きっと……こんな幸せな時間を望んでいたのです）
恋人との同棲生活。
裏にある過去を、泥沼の感情を考えなければ。
どんなに、どんなに良かっただろうか。

――後悔の念は、彼の思考を鈍らせ。
「隣、良いですか？」
「好きに座ってよ、もう君の部屋でもあるんだから」
座布団を持った初雪は、彼の右に座りもたれ掛かる。
吉久は、本日最後の戦いが始まった事を悟った。

がぶがぶ／１３　体を重ねて、心は繋がらない

テレビの無い部屋は、会話がないと非常に静かで。
無言。
座布団に座る吉久は、隣に座った初雪の体温と呼吸の音だけを感じていた。
（ううっ、気まずい……でも心地良いってのに精神を削られていく気がするよ……）
（落ち着きます、嗚呼、今日はとても良い日です。嬉しく、とても嬉しくて――体が疼いてしまいます）
（けどまぁ、流石に食後直ぐってワケにはいかないよね多分、胃の消化に悪いしさ）
（多分、吉久君は自分から手を出してこない。でも……やり方を教えたのは貴方なんですよ？）
初雪はそっと、左手を彼の右手の上に置く。
「っ!?」
「手、繋いでも良いですか？」
「……もう少ししたら明日の予習するから、その時までね」
言質は取った、彼女はほくそ笑むと彼の指を重ねた指先でなぞる。
形を確かめる様に、愛撫するように。
（手でさえ、触り方によっては感じる場所になる。そう教えてくれましたね）
弱いところを探すように、ゆっくりと時間をかけて指と指を触れ合わせる。
手の甲、指の股、手首、初雪は反応を見ながら手を動かす。
（……これ、暇だから僕の手で遊んでるだけだよね？　そうだよね？　そうだって誰か言って欲しいなぁ）
不味い、これは不味い、思ったより雰囲気が出てきてるのではないか。
吉久は右手のくすぐったい感触と共に、焦りを覚えた。

だが、決定的な動きも言動も彼女はしていない。
（この手を振り払えますか？　ええ、出来ないでしょう吉久君……）
（心なしか初雪さんの目が怪しく輝いているというか、やっぱ誘ってる？　それとも挑発してる？）
ちらりと彼女を見ると、嬉しそうに微笑んで。
そのまま吉久の肩に顔を乗せて、腕を絡ませながら恋人繋ぎをした。
がっちり組み合わさった手は、逃げることを許さず。
（この重みが嬉しいって、そう思えてくるのがまた……）
（知っているんです、調べましたもの。こんな感じでイチャイチャするのが好きなんですよね？　以前、一年生の男の子とそんな話をしていましたものね）
このまま、これで終わるとは到底思えない。
緊張と警戒で体を堅くする吉久を前に、初雪は彼の太股を右手で撫で始め。
「……それで、誘ってるつもりかい？」
「いいえ、貴方の体に触れていたいのです。でも――貴方が求めるというなら、私は絶対に拒否など致しません」
「それを聞いて安心したよ、今日は静かに寝たい気分だったからね」
「吉久君がそう言うなら私も受け入れます、けれど……もう少し貴方に触れていたい。それはダメですか？」
少し寂しそうに、初雪は慎ましく要求した。
（これ、イエスって言うしか無いよねぇ……ノーって言ってみる？　勉強するからって、もう切り上げる？）
吉久は己が詰んでいる可能性が高い事を感じながら、必死になって考えた。
仮に、勉強すると言うとする。
ならば。
（良くて保健体育の勉強、悪くて忍耐力をつける為とか理由をつけて過激な挑発とか直接手を出してくる）
容易に想像が付くのは、彼が彼女にそうしたからだ。

保健体育の復習だと全裸にさせ、体の部分部分を残さず説明させた挙げ句。
オナニーさせ感じる場所を言わせ、子作りの予習までした。
（課題を一緒にしようって無理矢理誘って、乳首責めしたり電マでイかせながら、挿れて欲しいって言うまで言葉責めもしたっけ……）
やり返されるのか、素直に受け入れるか或いは布団で簀巻きにすべきか。
それとも、言葉通り満足するまで触れさせて終わりにすべきか。
判断に迷う吉久を、初雪は鋭い視線で観察する。
（仕返しをする、なんて事はしません。だって貴方から求められる事にこそ意味があるのですから）
その為の方法は分かっている、今の彼には弱点がある。
そして、初雪のブレーキはもう壊れてしまっているのだから。
「酷いヒト……答えてすらくれないなんて」
「あっ、い、いやっ、ごめんちょっと考え込んでてっ！」
「私に触れられるのがそんなにお嫌ですか？　……私の体に、もう飽きてしまったのですか？」
「そんなコトは絶対にないよっ！　この世で一番美しい初雪さんに触れられて僕は拒めないし、飽きることなんて絶対にな、――――あ」
「嬉しい、じゃあこういうのはどうです？　……ん」
「っ!?　そ、それは、い、いやそれで君の気が済むなら……」
吉久は思わず悶えようになった、初雪が彼の指を甘噛みしたからだ。
がぶがぶ、かみかみ、少しだけ痕を残すように。
時にしゃぶる様に、丁寧に丁寧に、一本一本を掃除するようになめ回し始める。
「上目遣いでそれはズルいって思わない？」
「――――は、ぁ……そうですか？　貴方が教えた事でしょう？　こうやってオネダリするんだって」
彼女が指から口を離すと、銀色の細い橋が延びる。
ぬらぬらと唾液にまみれた指は、外気に触れた途端、彼女の温もり

を探すようにピクリと動いて。
（――――が、我慢するんだ、これで抱いたら今までと同じじゃないかっ!!）
（あと一押し、そうですよね吉久君？）
ぐらりと音をたてて彼の理性が揺れ動く、あまりにも濃密だったのだ初雪を好き放題陵辱した半年間は。
今すぐ深いキスで彼女の舌に吸いつきたい、そのまま服の上からその巨乳を乱暴に揉みしだいて。
「……ダメだ、僕は君の魅力に負けないってそう決めたんだ」
「卑怯な言い草ですね、私は貴方の魅力に負け続けているというのに」
「流されないよ、どんな言葉でも僕は流されない。――いや違う、違うんだよ初雪さん。これは言い訳だ、卑怯な言い訳なんだ」
「聞かせてください吉久君、貴方の全てが知りたいんです……」
苦悩する男に、女は下腹を愉悦の熱で犯されながら囁いた。
自分が堕ちた様に、堕ちて欲しい。
自分が苦しんだ様に、苦しんで欲しい。
でも。
「愛しています吉久君、だから……貴方が私の心を軽くしたいと願うように、私も貴方の心を少しでも救いたいんです」
その言葉は果たして本当だったのだろうか、本当に吉久を救いたいと思っているのだろうか。
只の復讐、性欲の発露、憎しみ。
その苦しむ姿をもっと見たいと、だから言葉にして欲しいと思っているのではないか。
（――そんなの、どちらでも良いのです）
初雪にとっては、そのどれもが正解。
「ね、……教えてください吉久君……私を哀れに思うなら、少しでも救いたいと思っているなら、貴方の気持ちを聞かせてください」
静かに囁かれる声は、彼の脳髄を犯す。
弱音を吐けば楽になる、けれどそれをしない事こそが贖罪なのではないか。

（本当に？　それが初雪さんへの贖罪なのか？）
自分が楽になりたいだけの、罪によっているだけではないのか。
苦悩は尽きない、耳が甘く噛まれ痺れるような感覚が襲う。
触れたい、今すぐ触れて、避妊する事など考えずに滅茶苦茶に犯したい。
「――――僕はさ、前みたいな僕に戻るのが怖いんだ。君を壊したくて汚したくてたまらないのに、絶対に壊したくないし汚したくない」
「だから、私を拒否するのですか？」
「自分の意志で君を抱いてしまうと……もう普通に戻れなくなる気がするんだ、僕は初雪さんを、もう傷つけたくないのにっ、ダメなんだ、君は綺麗だから、僕なんかが汚しちゃいけないんだよ!!」
「でも、誰にも渡したくない。そうなんですよね？」
「当たり前だっ!!　君は僕の運命の人だっ！　こんな言い方って気持ち悪いしどこまでも自分勝手だって理解してるっ、理解しているんだよ!!」
理性と欲望の天秤が狂ってしまったから、吉久は初雪を犯した。
（嗚呼、嗚呼……嬉しいッ、あはッ、あはははははッ、嬉しいです吉久君ッ）
本当に、本当に。
「――気持ち悪い」
「ひっ!?」
「本当に気持ち悪いです吉久君、憧れも恋心も独占欲も、全部混ぜて……余りにも自分勝手な言い草で、ふふッ、貴方のその心の天秤はどうして傾いてしまったんですか？」
「ごめん、ごめん……っ」
「貴方は許されない事をしたんです、もし仮に法が許しても――絶対に私は許さない、ええ、法にだって裁かせるものですか、貴方は未来永劫、一生をかけて私が裁きます、その罪を問い続けます、でも……良いんですよ？　私を抱いても、貴方は凶暴な吉久君に戻らない、そう信じていますから」
顔へのキスを繰り返しながら、愉悦と憎しみと愛情で歪んだ顔で初

雪は笑った。
その表情を直視して怯える吉久の手を誘導し、己の胸へ押しつける。
大きな胸に彼の手が沈み、なお余る。
「で、でも……僕は僕を許せない、信じられない」
「ふふッ、可愛いです吉久君。でも本当に理解していますか？　――貴方に拒否権なんて存在しないんです、私が望むとおりに野獣になり、私が望むとおりに王子様になる、貴方にはそれしか選択肢が残されていない」
「～～～～っ!!」
吉久は声にならない悲鳴をあげた、どうすればいい。
こんなものは罠だと分かっている、初雪は吉久をあの時の吉久に戻そうとしているのだ。
けれど、それで良い筈がない、ないと言うのに。
（どう、してっ、僕は抵抗できないっ）
本能がこの女を犯せと叫ぶ、組み伏せて嬌声をあげさせて、屈服させろと訴えている。
「ダメ、だよ。絶対にダメなんだ。僕はね、君の誘惑に負けちゃいけないんだ、それは間違った方向にダメになるだけだから」
「……――――――あ」
吉久は唇を強く噛み、血を流しながら初雪の胸から手を退けた。
その手が完全に流れた瞬間、彼女の心はぽっかりと穴が開いたような寂しさが訪れて。
いてもたってもいられず、初雪は彼に抱きついた。
「嗚呼、お願いです、私にもっと触れてください、捨てないで、貴方が触れてくれないと私ッ、私はッ!!」
「ごめん」
「狡い、狡いです吉久君……あ、そうです裸になります、今すぐ全裸になりますから、もっと吉久君が興奮出来るようにしますから、オナニーします、貴方の名前を叫んで、いえ、土下座しながらご主人様の足を舐めて腰をヘコヘコさせながらオナニーします、しますから、ね

？　私に触れて、その独占欲と愛情をぶつけてください、何でもします、するんです、だから、……お願いです吉久君、私に、私に温もりをください――――」

大粒の涙を流しながら無理して笑顔をつくり、明るく振る舞いながら声を震わせて懇願する。

そんな姿を見たくないのに、そんな事をさせたくないのに。

（僕はまた、また間違えた）

愛を求める哀れな姿に欲情の炎が灯る、抱きしめて優しく愛を囁けと理性が言う。

何もかも忘れるように、激しくセックスしろと性欲が告げる。

「～～～～～～っ」

吉久は初雪を抱きしめようと腕を伸ばし、途中で止めた。

引っ込めようとしたその腕は、彼女によって絡め取られ。

「偽りでも良いんです、愛してるって言って、私を抱いてください……お願いです、夢を、貴方に愛されてるって夢を見させてください」

くらくらする、深呼吸が上手くいかない。

真空の中で酸素を求めるように、ただ口だけが動く。

我慢できない、彼女が泣くなんてあってはいけない、悲しむなんて以ての外だ。

だから、今、吉久が出来る事は――。

「――今夜だけは、何もかも忘れさせてあげるよ初雪」

「吉久君……、ぁ、ん――――」

その柔らかい体を強く抱きしめながら、彼女の艶やかな唇を乱暴に奪った。

彼女は抵抗せずに体を預け、うっすらと開いた瞼の隙間からは、トロンとした淫蕩な光を瞳に宿す。

初雪は産まれて初めて、優しくも激しい愛しさに溢れた夜を過ごした。

――心地よい疲労感に満たされながら、眠りに落ちて。

（これで、本当に良かったのかな……）

傍らで気絶するように眠った初雪の寝顔を、吉久は静かに見つめ

て。
安心しきった寝顔は、まるで無邪気な子供の様で。
「どうしたらさ、君を少しでも幸せに出来るんだろうね」
起こさないように小声で呟く、優しく銀髪を手で梳く。
こんなにも愛おしいのに、今のままでは破滅しか待っていない。
「愛してる、好きだ、君を幸せにしたいんだ……」
寝ていて聞こえていないからこそ、素直に言える。
彼女に言わないと心の中で誓った、愛を告げられる。
（――――でも、君と、じゃないんですね吉久君）
しかし初雪は眠っていなかった、彼は気づかなかったが。
ただ眠ったように目を閉じて、彼の体温を感じていただけだったのだ。
だからこそ、聞いてしまった。
（卑怯なヒト、セックスの時は一言も好きだとか愛してるとか言ってくれない癖に、こんな時だけ……）
嬉しいのに、憎い、吉久は幸せにすると言うのに初雪を幸せにしてくれない。
愛おしいのに、嫌いだ、愛していると言って欲しい時に言ってくれない。
（心が、ぐちゃぐちゃになりそうなんです吉久君――）
愛しさと憎しみの温度差で、気が狂いそうになる、涙が出そうになる。
愛されて、抱かれて、満たされているのに。
（寒いです、こんなにも私は寒いって思うのに、愛してるの一言で許してしまいそうになる、暖かくなるんです）
この気持ちを、どうすれば良いのだろうか。
誰かに相談すべきなのだろうか、吉久に心から愛される為に、出来ることは何だろうか。
（――やっぱり僕は、君のコトが諦めきれないよ。一緒にいると破滅が待っているのに、君と離れられないんだ）
吉久もまた、苦悩していた。

心の奥底から際限なく愛おしさが溢れてくる、けれど罪悪感が蓋をしようとする。
「僕は君に何をしてあげられるのかな、何が出来るのかな、……君から離れた方が良いのに、離れられないんだ」
震える声で自嘲しながら、吉久は両手で己の顔を覆う。
泣いてなんかいない、自分に泣く権利なんて無いのだから。
だからこれは、涙では、決してない。
（初雪さん……）
声を殺して咽び泣きなく、その声を彼女は聞こえないフリをして。
（――あはッ、あはははははははッ!!）
けれど暖めるように、縋りついた。
彼もまた、温もりを求めるように彼女を抱き寄せて。
暖かな体温と共に微かな震えが、初雪の心を震わせる。
（嗚呼、嗚呼、嗚呼――神様、私は、私はなんて罪深いのでしょうかッ!!）
吉久が己の為に泣いているのが嬉しい、背筋がゾクゾクとする。
彼が苦悩している姿が愛おしい、もっと、もっと苦しむ姿を見ていたい。
（今なら、嗚呼、今なら理解できます吉久君ッ！　壊したいけど壊したくない、そう……これがその感情ッ!!）
自分勝手な愛をぶつける吉久を、愛している。
初雪の為と言って、離れようとする吉久は憎たらしい。
苦悩し、心が壊れそうになっている吉久の姿が……何より嬉しい。
（もっと、もっと私の事だけを考えて、私だけを愛して、私の為だけに苦しんで、でも壊れないでください、正気のまま私を愛して、苦しんでください）
まだ彼の精神は壊れきっていない、まだ追いつめられる。
（その先に、吉久君は何を選択して何を思うのでしょうか……私はそれが知りたいのです）
目が冴えていく初雪とは反対に、吉久はすぅすぅと寝息をたてはじめ。

その寝顔を、彼女は青い瞳を暗く輝かせながら見つめた。
（罪悪感を刺激すれば、吉久君は逃げ出すことすら出来なくなる……、なら私が知るべきはその罪悪感の全て）
知らないことがある、本来は真面目な彼がどうして己を陵辱したか。
その切っ掛けが、絶対に何処かに存在している。
（手がかりは、――カメラ。紗楽さんのカメラです）
彼女が何か間違った事をして、その罰として没収したと言っていた。
そしてそのカメラは、初雪の恥辱を撮影し。
結果、逃げも隠れも出来ずに陵辱され続ける事になった。
（聞かなければなりませんね、紗楽さんに……）
初雪は静かに熱い息を吐き、吉久の寝顔を愛おしそうに見つめた。
（待っててください吉久君、貴方の心を壊さないように壊して、ふふッ、今から楽しみです。ケダモノの貴方に戻るのか、それでもなお、踏みとどまる今の強さを見せてくれるのか）
くつくつと静かに笑いながら、初雪は己の体を吉久に絡ませた。
密着した二人の体は、体温を分け合って同じ暖かさになる。
とくん、とくん、心臓の音が重なる。
――二人は、いつの間にか眠っていた。

□

あの夜から数日後の事である、普通の放課後の現在。
吉久は初雪の態度に、疑問を感じて落ち着かない。
（絶対に何かあるよね、だって変だもん。お金がどうとか言わないし、セックスだって求めてこない）
登下校の際に手を繋ぐとか、二人っきりになると妻のように寄り添うだけで。
過激なことも、不可解な言動も、愛を請い縋りつくような事もしない。

（まるでさ、普通の女の子になったみたいだ）
しかし吉久は騙されない、これは嵐の前の静けさだ。
だが、問いただそうとする素振りを見せただけで。
恥ずかしそうに頬を赤らめ、おもむろにスカートを持ち上げて。
『乙女の秘密です、でも吉久君がどうしてもと言うなら……貴方好みに躾られたこの体に聞いても良いんですよ？　簡単な事でしょう、乳首を抓られただけで甘く絶頂し、その逞しいモノを挿れられただけで言いなりになってしまうのですから』
そんな事を言われれば、無理に聞き出す事なんて出来ない。
となれば、吉久に出来るのは待つことだけで。
（今日は確か、シャラと一緒に遊んで帰るって言ってたっけ……）
という事は珍しく一人であり、そして絶好の機会でもある。
「……相談、するかなぁ」
もしかしたら、兼嗣の耳に何か情報が入っているかもしれない。
そして、彼女への愛しさをどうすれば良いのか。
解決策の提示までは求めていないが、せめて全ては言えなくとも誰かに聞いて欲しい気持ちもあり。
（行くとするか……シャラが居なくても部室にいるよね、きっと）
吉久は教室を出て、写真部へと歩き出した。

がぶがぶ／１４　カメラとリング

「――――あの、クソ男先輩？　もう一回言って貰って良いっすか??」
「ごめん、説明不足だったかな。でも友達から頼まれた話だからある程度は秘密にしておきたくってさぁ」
「あっ、はい、そうっすね、友達の話ですもんね」
兼嗣は今、非常に困惑していた。
恋人の親友であり、恩人である先輩、己との関係も友人と言っていいだろう。
ともすれば、親友という括りにすら入っている気もする。
（だからさ、恋愛相談だって乗るぜ？　そりゃあ吉久先輩からってのは珍しいけどさ）
彼が紗楽と付き合う前は、随分と恋愛相談に乗って貰った身だ。
出来ることなら力になりたい、何せ憧れの女の子相手に間違いすぎた努力をし、全力で尽くした挙げ句の果てに。
結ばれなくても満足し、卒業していく勢いだった人物だ。
（幸せになれるのなら、なって欲しいけどさぁ……）
その聞かされた内容が内容である、どうしたら目の前の上級生は。
「ええっと、先ずはお腹に入れても不自然じゃない厚みのある雑誌は何かって話でしたっけ？」
「そうなんだよ、万が一、いや……ちょっと間違えば包丁でグサっとね、そういう可能性があるっちゃあるんだ」
「あくまで友達の話なんですよね」
「そうだね、あくまで友達の話だ」
（いや聖女様に命狙われてるとかッ!?　いったい先輩何をしたんだよッ!?）
友達の話だなんて、嘘に決まっている。
第一、表情が隠せていない。
本人は平静を装っているが、視線は何処か落ち着かないし。
（いやいやいや？　これってマジなのか？　マジの話なのか？　先輩

がマジで焦るって相当じゃねぇのか!?）
思わず兼嗣も緊張してくる、この人は何をやらかしたのだろうか。
冷静に情報を整理する為にも、深呼吸を一つ。
「――先輩、もう一度最初からお願いします。出来ればその友達と恋人さんの出会いの所から」
「うん、あくまで、そう、あくまで友達の話なんだけど」
「なるほど、先輩の話と」
「その友達はさ、ちょっと、いや、それこそ殺されても不思議じゃなぐらい恋人に酷い事をしてさ」
「それは刺されるのも当然ですね、というか聖女様と先輩は恋人になっているというか、アンタ……聖女様に何したんだ??」
「まぁ、あくまで友達の話だから詳しくは言えないけど、愛してるんだけど一緒にいると破滅しかなさそうなんだけど、……一緒に居ると殺される可能性があるのに、一緒に居ないとその恋人さんが壊れるかもしれないっていうか」
「相談って言うなら具体的に言えよ先輩？　というかクズ男って見抜かれてるなら、そのまま刺されても良いんじゃねぇか??」
「そこを何とか!!　その恋人さんには罪を犯して貰いたくないんだ!!」
手を合わせて懇願する吉久に、兼嗣はうーんと唸りながら思案する。
単に凶行を防ぐだけなら、防刃ベストを手配すればいい。
だがそれは、一時凌ぎにしかならず。
「聖女様は恋人でいるつもりみたいだし、もうセックスでメロメロにするとか、愛を囁いてメロメロにして満足させるしか無いと思うぜ吉久先輩」
「ああ、ごめん言い忘れてた。その友達の言うには、愛の言葉は言えないし、セックスはそもそもしたくないって」
「はいッ!?　それ本当に恋人なんです先輩ッ??　どうしてそんなに捻れた恋愛してるんだッ??　あの超優しい聖女様に殺されるような恋愛って、何してるんだよ先輩ッ!?　あの人って他校の女子が強引なナ

ンパにあってるのを止めに入って、ナンパ男を改心させる様な人だぞ??　そんな立派で心優しい人を!?　休日は地域の奉仕活動や、後輩の勉強の面倒を見てるような人が??　マジで何してるんですか先輩ッ!?」

　信じられない、と矢継ぎ早に出された言葉に吉久としては視線を反らすしかない。

「ノーコメントで、その友達曰く、詳しく言うと恋人さんの評判に関わるから。そんなの僕は絶対に許さないから、どんな手を使ってでも阻止するから」

「何処の誰が友達だよッ!?　アンタがそう言うって事は、アンタ自身と一条寺先輩しかいねぇだろうがッ!!」

「――――――頼む、シャラには卒業後の進路が君との結婚に決まってて外堀も既に埋まってる事を、絶対に喋らないから」

　兼嗣は絶句した、躊躇無く脅してきたと、弱点を突いてきたと。

「脅迫してんじゃねぇか!!　そういう所だぞ?　そういう所が――――――……、ま、まさか吉久先輩?　一条寺先輩に変な脅迫とかしてないですよね」

「あくまで友達の話だよ、そうそう個人的に防弾チョッキみたいなの欲しいんだけどお金貸してくれる?」

「防刃ベストぐらいタダであげますよッ!!　ホントにアンタ何したんです!?」

「あくまで友達の話なんだけどさぁ……警察に捕まると思ったら泥沼に沈んでる最中、みたいな??」

「もおおおおおおおおおおおおッ、アンタって、アンタってヒトはッ!!」

　頭を抱えて叫ぶ後輩に、吉久は思わず苦笑する。

　申し訳ないとは思うが、優先順位としては初雪の方が上だ。

　使える物なら、全てを使う。

「まぁまぁ落ち着いて、どうせその時になったらシャラの説得のアシストを僕に頼むつもりだったんでしょ?」

「そうだけどッ、そうだけどもッ!!」

「ならこうしよう、――我に秘策アリ、在学中に結婚に踏み切らせる策があると言ったら？」
「何でも言ってくれよ先輩、俺は先輩を信じてるぜ!!　あくまで友達の話って事で!!　あ、愛の言葉やセックス無しで、相手をメロメロにする方法あるけど聞きますかこの世で一番頼りになってこの世で一番誠実な吉久先輩!!」
　掌をぐるんと回転させた後輩、しかして吉久は顔を盛大にしかめて胸のあたりを抑える。
　頼りになる、誠実、今の言葉がもし初雪から出ていたなら、その場で崩れ落ちていたかもしれない。
「うぐっ、――――――む、胸が痛む……止めてくれ、今の僕にはその言葉が良く効くんだ」
「どんな犯罪したんです先輩??　いざとなったら『あの先輩ならいつかヤると思ってました』って証言しますよ俺」
「その時は、適当に余罪とか冤罪をぶちまけておいて欲しい……」
「メンタル大丈夫かよ先輩？　気晴らしにフリーの可愛い女の子と合コンをセッティングしますよ？」
「僕を殺す気かい??」
　何かを想像して青い顔で震え始めた吉久に、兼嗣は重症だとため息を一つ。
「さっきの話ですけどね」
「合コン？　その単語を初雪さんの前で言ったらシャラに有ること無いこと言うからね」
「違いますよ物騒だな……、言葉もセックスも必要ない想いを伝える手段です」
「聞こうじゃないか頼れる後輩よっ!!」
「言いますから、そんなに強く手を握らんでくださいよッ!?」
　血走った目で逃がすまいと迫る吉久の手を振るい払い、ドン引きした兼嗣は気を取り直して言った。
「ズバリ、プレゼントです」
「ほう、プレゼント。ちなみにエッチな物だったら殺すから」

「違いますよ、まぁプレゼントっていうか指輪です指輪」
「あー、……結婚指輪的な？」
「結婚指輪も婚約指輪も買う金ないでしょうが先輩……、まだ恋人なんですからペアリングぐらいでしょ。俺も紗楽先輩とペアリングしてるんですよ」
「そういえば、シャラって指輪してたなぁ……そうか、そういう手もあるのか……」
　有意義な話を聞いた、相談した甲斐があったと言うものだ。
（これで贖罪になるとは思えないけど、うん、少しでも喜んでくれるなら）
　指輪というのは女性にとって特別な存在だ、そしてそれは初雪にとっても同じ。
　否、今の彼女には吉久との確かな繋がりの証として、精神安定に一役買ってくれるに違いない。
（……僕は君に指輪をはめる権利なんて無い、けど、愛してるって伝われば少しは君も――――）
　希望が見えるかもしれない、都合の良い妄想で終わるかもしれない。
　でも、決して悪い事にはならないと想うのだ。
「ありがとう兼嗣、君に相談して良かったよ」
「どうも、んじゃあ今か買いに行きますか？　それとも後日、紗楽先輩と一条寺先輩も呼んでダブルデートって感じで買いに行きます？」
「いや、こういうのはサプライズの方が良いと思うんだ。だから君とシャラと一緒に後日って事で」
「了解しました先輩、――じゃあそろそろ帰りますか、久々にゲーセンでも寄ります？　奢りますよ？」
「奢りならマック食べたいな、初雪さんにそんなの食べさせられないから暫く食べてなくて」
「……先輩と一緒なら、一条寺先輩は喜びそうですけどねぇ」
　男二人は、仲良く部室から出て行き。
　一方、時は少しだけ遡る。

吉久が兼嗣に会いに行く少し前、学園内の教会の中には初雪と紗楽の姿があった。
他には誰も居ない、本来ならば神父とシスターが常駐しているが他の教会との交流で生憎と不在。
「うーん、誰も居ない教会ってのも雰囲気あるね。こうロマンチックな感じがするよ」
「藤原君との放課後を邪魔してしまって申し訳ありません紗楽さん、どうしても相談……というか聞きたいことがありまして」
「カネくんとは毎日一緒だから大丈夫だよ、それに聞きたいことってよっしーのコトだろう？　何でも聞いてくれよボクの新しい親友よっ！」
無理矢理に明るく振る舞ってはいるが、内心で紗楽はビクビクしていた。
放課後に部室へ行く途中、呼び止められたと思えば。
そこには笑顔ではあるが、鋭すぎるナイフのような空気を醸し出す初雪の姿があって。
（美人が怒ると迫力が違うって聞くけど、本当だねぇ……、いやはや、よっしーは何をしでかしたんだい？）
「此処の合い鍵の管理を任されているので、一人っきりになりたい時はこっそり使わせて貰っているんです、――秘密ですよ？」
「次に使う時は邪魔しないから一枚だけでも撮らせてくれないかな？　初雪嬢みたいに聖女そのものの美少女が祈ってる姿なんて幻想的で美しいと思うんだよボクは」
「ふふッ、一枚だけですよ？　……そうそう、話とは他でもありません」
来たぞ、と紗楽は身構えた。
短いつきあいではあるが、彼女とは親友だと、親友に相応しい仲になれると思っている。
しかしそれが故に理解してしまう、一条寺初雪という存在は皆が言うような聖女ではなく。
「カメラ、――貴方が没収されたカメラの話が聞きたいのです」

「正確には、没収した時の話だろう？」
「ええ、何があって紗楽さんはカメラを吉久君にカメラを没収されたか」
「……あの時の話かぁ」
彼女は噂通りの心優しい人物だろう、それは紗楽も目撃したし。
些細なことではあるが、助けて貰った事もある。
だが心優しい人物と、危険な人物というのは両立する。
（まったく、類は友を呼ぶというかよっしーと似たいタイプだったのかな初雪嬢は）
絶対に聞き出す、強硬手段すら厭わない。
そんな気配すらする彼女に、紗楽は冷や汗を一筋。
吉久も人の良さと、ブレーキの壊れた危険さを併せ持つが。
「――――やれやれ、只の優しい女の子かと思ったら案外とよっしーとお似合いじゃあないか」
「ふふッ、嬉しい言葉ですね」
「もし話さなかったらボクはどうなるのかい？」
「さぁ、でも紗楽さんは藤原さんとご婚約されていると聞きました、卒業後はすぐに結婚式をあげるとも。……そして貴方はそれを知らないフリをしながら、どうにか大学卒業まで引き延ばそうと画策している事も」
「そのやり口、よっしーに似てるね」
「ええ、吉久君にされた事は何でも覚えていますから」
「成程ねぇ、愛の為せる業――――ん？」
その瞬間、紗楽は可愛く小首を傾げた。
今のは確かに脅迫だった筈だ、だが。
（された事は何でも覚えてるって……よっしー??）
親友は彼女に何をしたのだろうか、二人は熱愛中の恋人関係だと思っていた。
けれど、それは本当にそうなのだろうか。
確かな愛はあるかもしれない、しかし同時に、執着という言葉が紗楽の頭によぎる。

「この場から逃げ出したら、ボクは卒業を待たずに結婚かい？」
「まだ分かりません、でも……私なら大学卒業まで引き延ばせる、と言ったら？」
「残念だけど、その言葉には乗らないよ。ボクはカネくんとの駆け引きを楽しみにしているのだからね」
「――――そうですか」
「でも、ボクはキミを親友だと思っている。屈託なく親友と呼べ仲になれると思ってる。だから……その親友の恋人の過去を話すのに躊躇いは無いと思わないかい？」
余裕を崩さずそう言い切った彼女に、初雪は内心で舌を巻いた。
上流階級の娘として、跡取り娘として、相応の教育を受けている初雪にとってすれば。
その美貌も相まって、相手を威圧し交渉を上手く運ぶ事など容易い事だ。
（類は友を呼ぶ、とはこの事ですね。ええ、吉久君の親友らしい心の強さです）
だから、言わなければならない。
「申し訳ありません紗楽さん、私は貴方を心の何処かで見くびっていた様です。こんな私で良ければ、貴方の親友にならせて頂けますか？」
「ああ！　勿論大歓迎さ！　いやぁ、こういうの青春って感じがするよね！　うん、ボクとキミは今、青春を第一歩を踏み出したのだっ!!」
「ふふッ、ええ、私達の第一歩です」
「では初雪嬢、キミのお願い通りにカメラを没収された時の事を教えてしんぜよう！」
そして紗楽は、少し困った顔をして語り出した。
「これはボクの恥にも繋がる話なんだけどね、……半年より少し前ぐらいかな、うん、それぐらいの時だ」
「成程、私と吉久君が繋がりを持つ少し前なのですね」
「おっと、そんなに前からよっしーと？　もうその頃から恋人だったのかい？」

「ええ、吉久君はそれはそれは熱烈に私を口説いて来て、つい根負けしてしまいまして」
「ははぁ……あの狂信者のよっしーがねぇ」
あ、これ詳しく聞いたらヤバい事になるやつだ、と紗楽は直感した。
彼の知る吉久は、自分から初雪を口説くような男ではない。
何かある、踏み込んだらいけない何かがある。
「っと、話がそれる所だった。……実はあの頃のボクって高いカメラを買ってお金に困っててさ。その、なんだ？　怒らないで聞いてくれるかい？」
「ええ、私の耳に何も届いていないという事は未遂に終わったか些細な事だったのでしょう？　実害が無いのなら怒ることはしません」
「なら安心だ、――所でキミは自分の人気を知っているかい？」
「恥ずかしながら、聖女と呼ばれ皆の憧れになっている、という事は」
「ボクはね、キミを隠し撮りして売りさばこうとしたんだよ。ああ、勿論ヘンな写真じゃない、登校中や休み時間の姿を隠し撮りしてさ、男子をターゲットにして一儲けってね」
これだ、と初雪は直感した。
恐らくこれこそが、吉久を凶行に走らせた大きなきっかけ。
先日より興奮状態の脳は、素早く回転し答えを導き出す。
「――もしかして、吉久君に知られてしまいましたか？」
「もっと悪い、あの頃から狂信者っぷりで有名だったからね。真っ先に声をかけてさ、そりゃあもう盛大にお説教だし、金に困ってるなら写真を全部買い取る代わりに二度とするなってね、もし他の男に売ったら処女膜とおさらばする事になるとまで言われたよ」
「……素朴な疑問ですが、男のヒトって好きではない女の子にも勃起するのですか？」
「また直接的に言うね、ちなみにボクも同じ事を聞いたよ。そしたらさ、何て言ったと思う？」
呆れたような紗楽の表情に、初雪は若干の嫉妬を感じながら思案した。
吉久は己以外を抱くとは思えない、だから。

「ディルドーやバイブを使うと？」
「聖女様の口からそんな言葉が出るなんて、ボクはちょっと興奮してしまうよ」
「紗楽さん？」
「ははっ、ごめんごめん。正解は『君を縛り上げて紙袋を顔に被せる、そしてその紙袋には君の写真の初雪さんの顔を拡大して張る』だってさ、怖くない？」
「私は嫉妬していいのか、喜んでいいのかどちらでっしょうか？」
予想外の方法に困惑半分、喜び半分。
それはそれとして、彼が他の女を抱く可能性があった。
その事実だけで、腸が煮えくり返ってくる。
「既に怒ってるよね??　帰ってからよっしーを一発殴ったらどうだい？　ボクには無けど、キミなら浮気者って殴っても許されるさきっと、メイビー、多分……」
「ふふッ、それも良いかもしれませんね。――今日は良いお話を聞かせて貰って本当にありがとうございます。私はこれで……次の段階へ進めそうです」
「詳しくは聞かないけど、あれでよっしーはロマンチストだからお手柔らかにね」
「ふふッ、少しだけ考えておきます。……では外に出ましょうか、紗楽さんは部室に行きますか？」
初雪の質問に彼女はううむと唸り、ぽん、と態とらしく手を叩いた。
「どうだろう、これから親交を深める意味でもマックに行くのは。よっしーは連れて行かなさそうだしさ」
「ああ……、吉久君はそういう所がありますよね。私に過剰な幻想を抱いていると言いますか」
「その分だと、色々と不満もありそうだね。親友のよしみで少しぐらいは聞いてあげよう」
「そうと決まれば行きましょうか、実は私、友達と一緒に寄り道するのは初めてなのです」
朗らかに笑う初雪に、紗楽も笑い返して。

二人は仲良く手を繋ぎ、連れだって歩いていく。
（あはッ、あはははははッ、そう、そうですかッ、やっぱり――――嗚呼、吉久君、貴方は私を……ッ!!）
あの半年間、初雪が犯されている姿を撮っていたのは紗楽のカメラだった。
そのカメラで紗楽は当初、隠し撮りをして男子に売ろうとしていた。
（繋がりました、ええ、繋がりましたね吉久君。――貴方は私の排泄姿を盗撮した、この発想は紗楽さんから着想を得たのですね）
それだけではない。
（ふふッ、貴方が狂ったのはそこから。……嫉妬、そう、吉久君は嫉妬した、いいえ自覚してしまった、――私を誰にも渡したくないと、けれど身分が、家柄が違う、そして私には政略結婚の可能性だってあった。……他の男に私が抱かれる可能性に、耐えきれなかった）
つまりは、そういう事だったのだ。
奪われる前に、奪ってしまえばいい。
誰かに傷つけられるかもしれないなら、消えない傷をつけてしまえばいい。
（でも、貴方はそれに耐えきれなかった。私が傷つく事を、汚される事を、例えその相手が自分であっても許せなくなった）
それが。
（――――、貴方の、愛し方）
だから。
（私が傷つくのが嫌と言うなら、――私が私を傷つければいい）
その時、吉久はどんな顔をするだろうか。
想像しただけで、身震いする程の快楽が襲う。
「楽しみですね」
「そんなにマックが楽しみかい？」
「ええ、本当に――愉しみです」
初雪は大輪の毒華の様に笑い、うっかりそれを見てしまった紗楽は恐怖し。

見なかった事にして、マックへ急いだのだった。

がぶがぶ／15　ブラッド・プレイ

楽しい時間は瞬く間に過ぎ去った、マックにて吉久と兼嗣、そして初雪と紗楽は遭遇して相席。
箱入りのお嬢様の初雪が、ファーストフードを食べる姿は中々に味があって。
興が乗った四人はそのままゲーセンで遊び、夕食は初雪の強い希望により牛角へ。
――流石に、その後は解散となったが。
「今日は楽しかったねぇ、久々に心から楽しんだ気がするよ」
「ふふッ、お友達と遊ぶのはこんなに楽しい事だったんですね」
「これからもさ、こうして遊ぼうよ」
「そしてこうやって、二人で同じ部屋に帰る……こんな風な体験が出来るなんて、思いもしていませんでした」
夜道を歩く二人、家へ近づく程に人通りは少なくなっていく。
初雪は嬉しそうに吉久の左腕をぎゅっと強く抱きしめて、彼としては少し歩きづらかったが。
（これはこれでさ、良い雰囲気だよね）
こうやって平和に過ごせれば、なんと幸せな事か。
はしゃぐ彼女も、ありふれた笑顔を浮かべ楽しんでいた。
その価値を、吉久は知っている。
（――僕はさ、初雪さんとこうなりたかったんだ）
だからこそ、それを汚し壊してしまった事を後悔している。
もし過去に戻れるのなら、もし最初からやり直せるなら。
（……救いようがないな、僕ってヤツはさ）
ああ、と吉久は小さく溜息を出した。
己はきっと、何度繰り返しても同じ事をするだろう。
同じ罪を犯し、同じ後悔をする。
（恵まれているんだ、今だって）
隣で初雪が笑っている、それだけで満たされているのだから。

（だから、……これ以上は罰があたる）
望んではいけない、己からは絶対に、どうして罪にまみれた体で尊い彼女に触れられようか。
どうして自分から、キスをして愛を囁く事ができるのだろうか。
その権利を、全て手放してしまったというのに。
（――――楽しかったです、ええ、本当に。だから……吉久君も、もっと求めてくださっても）
熱情を吐息に含ませながら、全神経を彼に集中させている初雪は。
その心情の変化を敏感に捉えていた、全てが理解できている訳ではない。
だが、彼が欲望に抗おうとしている事は分かる。
だから。
（このまま、そう、このまま私は、吉久君が望むように普通の女の子みたいにすれば――）
そうしたら、彼は素直に愛してくれるだろうか。
あの時の様にとはならなくとも、普通の男の子の様に。
初雪を愛して、求めてくれるだろうか。
でも、それは。
（あり得ないのですよ吉久君……）
過去の自分は彼に壊されてしまった、確かにそれもある。
愛を知らずに育ったから、暖かい愛ある家庭を、普通の家庭を望んでいるのも確かだ。
けれど、それ以上に。
（たった一人、貴方が隣で手を握ってくれているだけで私は幸せなんです）
どんなに歪んでいて、独りよがりでも吉久の愛は正しく愛だった。
温もりをくれた、側にいてくれた、初雪だけを見てくれていた。
強引にでも手を伸ばし、手を掴んでくれた。
（だから、違うんです。私は貴方の押しつける〝理想〟の普通の生活を、女の子を望んでいる訳じゃないんですよ）
なんて愚かなヒト、と口元がうっすらと歪んだ。

己を汚さない、自分から愛を押しつけない、彼はそんな覚悟を決めているようだが。
（ふふッ、どんなに罪悪感を得ても性根は変わりませんね吉久君、私はそんな貴方が大好きなんです。大好きで大好きで、愛してる）
それと同じくらい憎たらしい、涙を流し足に縋りつかせながら懇願させたい、もっと惨めな姿を見たい。
だってそうだろう、吉久は今。
（気づいていますか？　貴方は歪んだ愛を押しつけた時と同じように……私に〝普通〟を押しつけているのを）
嬉しいのに、腹立たしい。愛してるのに、憎たらしい。
愛想を尽かせてしまえば楽になるだろう、だが、彼にどんな酷いことをされても。
そんな気持ちなど、露ほどにも沸いてこないのだ。
（だから、――あはッ、今晩は覚悟してくださいね吉久君）
歩く、歩く、歩く、二人の部屋はもう少し。
初雪の胸は高まる、吉久は苦悩している。
（ふふッ、不器用ですね私達……どんなに普通の幸せを望んでいても、受け入れられない）
きっと最初からこうなる運命だったのだ、もし同じ学園に通っていなくても。
何処かで絶対に出逢って、初雪は吉久に陵辱される。
（私と貴方は比翼連理、――だから、貴方だけ押しつけるのではなくて。私の愛も、苦しみも、痛みも、悲しみも……全部、全部――）
マンションの玄関をくぐる、エレベーターに乗る、部屋の前にたどり着き鍵を取り出す、中に入る寸前で初雪は吉久の腕を離して。
戦前の大和撫子のように、三歩後ろの距離を保った。
「はー、楽しかったけど疲れたね。……ただいま&おかえり初雪さん」
「うふふッ、ただいまです吉久君。でも次は私が先に入ってただいまって言わせてください」
「お、良いねそれ。帰ったら君が居る……なんて素敵な日常なんだっ

!!　――――ところで聞いて良い？」
「貴方に閉ざす口は持ち合わせていません、何でも聞いてください」
　平然とした顔を崩さない初雪に、その行為に。
　吉久は部屋に入る前まで良い雰囲気だったじゃないかと、激しい疑問を浮かべながら。
「後ろ手で鍵を閉めたのは良いとしてさ、いや、すっごい不自然だけども戸締まりは重要だし」
「私達の愛の巣に、万が一でも余人を入れたくありませんから」
「じゃあさ、――なんで玄関で制服脱いでるワケ??」
「……??　ああ、申し訳ありません。手洗いうがいが先でしたね」
「それもそうだけどっ!!　確かにそうなんだけどっ!!」
　絶対にワザとやってるだろっ!!　と吉久は盛大に頭を抱えた。
　初雪は別に家では全裸で過ごすという趣味や主義はない、そして吉久とてそこまで彼女を性奴隷として扱っていない。
（――――いや待て、んん？　待って、本当に待って、そういえば心当たりがあるような……）
「では、お先に洗面所を使わせて頂きますね」
（いや、自分すら騙せないあやふやな言い方はダメだ。あった、あったよねぇ……玄関で服を脱いでとか、そういう躾した事がさぁ……）
　初雪が手洗いうがいをする為に、通り越していった事すら気づかず。
　吉久は天を仰ぎながら、両手で顔を覆う。
　した、してしまった、見て見ぬフリをしてしまったが。
（可愛がって欲しければ、玄関で全裸になって四つん這いになって犬の真似しながら僕の足を舐めて媚びろって命令したというか、脅したというか、拒否したら絶頂寸止め調教したって言うか）
　何という事だろうか、聖女とも呼ばれる箱入りお嬢様は。
　恥じらいという言葉を、何処かに置き忘れてしまったのではないか。
　拾わなければ、吉久が捨てさせてしまった恥じらいを探さなけれ

ば。
「――――今後はそれも課題にしよう」
「吉久君？　洗面所が空きましたよ」
「あっ、はい、んじゃあ僕も……ってそうじゃないよ初雪さん!!」
「ああ、もしかしてうがいの為の水を口移しで、手を胸の谷間に挟んで洗えと、そう言いたいのですね？」
「違うっ!!　どうしてそうなるんだよっ!?　恥じらいって言葉を忘れたのかい!?　というかさぁ！　手に持ってるカッターナイフで何を……んんっ??　何でカッター持ってるの??」
今の初雪の格好は、レースで透けている深紅のアダルトな下着。
それと学園指定の靴下、右手には刃を出したカッターナイフ。
嫌な予感しかしない、とんでもない言葉が飛び出てくる気がする。
「……ちょっと待ってて今すぐ手洗いうがいしてくるから」
「ええ、ご存分に」
そして、玄関に続く廊下へ戻ってくると。
「何で包帯とか傷薬とか用意してるワケ??　本当に何をするつもり??」
「うふふッ、あはッ、――ハァ、ねぇ吉久君……私、考えたのです」
「……聞きたくないけど、続きをどうぞ」
「貴方は私が傷つくのが嫌だと言うけれど、ええ、でも不公平でしょう？　私の心が傷ついたのなら、貴方の心も傷つかないと」
「それで、初雪さんは僕に君を傷つけさせる。或いは自分自身で傷つける……そんな所かい？」
「ええ、話が早くて助かります。――覚悟してくださいまし吉久君……」
妖しげに笑いながら近づく初雪、白い肌に映える赤い下着は彼女の魅力を際だたせて。
エロスの権化とでも言うべきか、気を抜くとくらくらと目眩がしそうだ。
今すぐブラを力任せに剥ぎ取り、乳首を噛みながら揉みしだきたい。

――だがその前に、言わなければいけない事がある。
「残念だよ初雪さん……実に残念だ、――僕がそんなに甘く見られてるなんてね」
「と言いますと？　スラックスの上から見て分かるぐらい勃起していますのに」
「はいそこ頬擦りしないように、臭いも嗅がない」
「私の事は気にしないで本題に入ってください、どうせ今宵は血に染まるんです、ああ、万が一の時が不安ですか？　大丈夫です医師を一人、隣の隣に住まわせているので」
「聞いてないことまで話さないでくれるっ!?　情報量でぶん殴るのっていけないと思うんだよ僕はっ!!　誘惑するか脅すか金持ちアピールするか一つに絞ってマジでっ!?」
　全力で吉久の精神を削りにきている、その事実に叫びたいぐらいの恐怖を覚えた。
（ど、どうすれば良いってんだよぉ!!）
　今ここで引いてしまったら、それこそ初雪の思う壺だ。
　ここは断固として、拒否せねばならない。
　だが、――本当にそれが出来るのか。
　どんな理由で、どんな言葉で、どんな権利で、彼女を止められるのか。
「さぁ、楽になってください……私の体、好きなのでしょう？　存分に溺れてください、溺れて、溺れて、呼吸が出来なくなるまで沈んで。――その沈んだ分だけ吉久君は私の血を見る事になるんです、痛みを知るんです、憎しみを感じるんです」
「っ、ぁ――な、なんでそんな……」
　初雪は手際よくベルトを外し、口でジッパーを下ろし吉久のパンツを露出させた。
　とても堅くなっているソレを愛おしそうに撫でながら、蠱惑的な笑みで息を吹きかけ。
「――――だって、私が傷つけば傷つく程、貴方は悲しむ。それは私にとっても辛い事で、……でも、貴方の心がまた一つ手に入るとい

う事でしょう？」
「それ、は……っ」
吉久は言い返せなかった、覚えがある。
それはあの頃の彼が、初雪に向けて懇願するように何度も囁いた言葉だ。
だから、やってしまったのなら、やり返されて当然の報いであり。
「〜〜〜〜っ、でも、でもっ!! それでも僕はっ!!」
「私に〝普通〟の女の子であって欲しいと？ うふふッ、本当に可愛らしいヒトですね。気づいていますか？ 貴方は今、あの頃の貴方と何も変わっていないと言う事を」
「違うっ、僕は君のっ、君をっ!!」
「半年前は〝愛〟を押しつけて、今は〝普通〟を押しつける、――そんな事で、どうして私の心が軽くなるのでしょう」
「〜〜〜〜〜〜っ、ぁ――――――!!」
ガツンと頭をハンマーで殴られたような衝撃が佳久を襲った、己はなんて勘違いをしていたのだろうか。
またも自分の理想を押しつけて、彼女の願いを聞こうとせずに。
（僕に初雪さんを救う資格なんて、罪を償う資格すらさ、最初から存在しなかったんだ）
あまりの情けなさに涙が出てくる、無く権利だってないのに。
力が入らない、崩れ落ちる体は彼女の腕の中に収まって。
その柔らかな感触が、優しい体温が、吉久の心をガリガリと削っていく。
「嗚呼、――甘くて美味しいです貴方の涙、もっと、もっと味あわせてくださいまし……」
ちゅ、ちゅ、と啄むように涙が吸われていく。
吉久は歯を食いしばって体に力を込めても、その動きは酷く緩慢で。
初雪の体を押し返す事すら出来ない、逆に手首を掴まれ甘噛みされる始末だ。
「――――はァ、嗚呼、嬉しい、嬉しいです吉久君……伝わってきます

貴方の悲しみが、絶望が、無力感が、なんて愛おしいんでしょう――、私はきっと、ずっとずっとその顔が見たかったんです」

「ごめん、ごめん、ごめん、ごめん――――」

譫言のように謝罪を繰り返す彼を、初雪は押し倒して。

二人を隔てる邪魔な布はもう必要ない、カッターナイフで高笑いしながら切り裂く。

そのまま騎乗位で挿入すると、本能の赴くまま腰を振り。

（――――狡い、狡いです吉久君……、気持ちいいのに、こんなにも気持ちいいのに）

どうして、こんなに満足できないのだろうか。

愛おしくて憎たらしい、答えなど分かり切っている。

初雪という女はもう、吉久の愛という名の蹂躙を受けないと満足できない体になっているのだ。

……そして、それ以上に。

（悲しい……悲しいんです、胸が張り裂けそうなんです）

吉久を傷つけている自分が嫌いだ、愛しているのに、無理強いする事しか愛する方法を知らない自分が嫌いだ。

彼は今、こんなにも悲しんでいるのに、辛い思いをしているのに。

（嗚呼、――今すぐ貴方を抱きしめられたらいいのに）

出来ない、伸ばした手は憎しみが彼の喉へ誘導する。

出来ない、彼の絶望の表情をもっと見たい。

出来ない、快楽に溺れきれなかった自分が、あの時、最後まで彼の所有物に堕ちきれなかった自分が。

（どうして、抱きしめられるのですか？　貴方を愛する私が嫌いな私が、どうして貴方を愛で包み込む事が出来るのです……）

嗚呼、だからこそ自分たちはお似合いなのだと、初雪は嬌声をあげながら嗤った。

彼が今、己自身に絶望しているなら。

彼女もまた、己自身に絶望しているのだから。

「だから、――もっと壊れましょう、破滅するまで、一緒に堕ちましょう吉久君……!!」

ケタケタと笑いながら、初雪は己の掌を薄く切る。
流れ出した血で、吉久の胸板に自分の名前を書いた。
その隣に自分の名前を書き、相合い傘を作ってみる。
――まだ、血は流れていて。
「舐めてください、血が止まるまでずっと、でないと……今度は反対側を切りましょう、その次は胸、お腹、ふふッ、どうしますか？」
「……」
壊れた様に涙を流す吉久は、ノロノロとした動きで初雪の掌を、その傷を、その血を、まるで子猫のように舐める。
がぶがぶ、がぶがぶ、初雪が衝動的に彼の肩を噛むと、彼はまるで幼子の様にイヤイヤと首を振って震え。
愛する者の嗜虐心を唆る姿に背筋を激しく震わせた彼女は、一際甲高い声を出し絶頂して果てた。
――気が付くと、吉久は全裸で目を覚まして。
「ぁ――――ぁぁ、っ、は、ぁ、ァ～～～～～～ッ!!」
否、ずっと起きていたのだ。
感情に頭が追いつかなかっただけで、初雪が泣きながら絶頂した時も、自傷を始めた時も、その傷を舐め取っているいる時も、吉久は起きていたのだ。
（僕は……僕は初雪さんに何が出来る？　このまま一緒に堕ちていくコトしか出来ないのか？）
唇を噛みしめる事で必死になって正気を保つ、気が狂ってしまいそうだ。
何かを考え続けていないと、行動していないと、絶望と無力感に苛まれ動けなくなり。
その先に待っているのは破滅だ、吉久だけではない、初雪と共に破滅してしまうのだ。
「――――せめて、初雪さんだけでも」
この気持ちは彼女の言うとおり、あの時と同じく押しつけ以外の何物でもないだろう。
だが、例え彼女に言われても吉久は諦める事が出来ない。

「まだ、まだ道はある筈なんだ、初雪さんだって分かってる、愛、愛だ、少しでも僕の愛が、今の僕の愛が伝われば……」
熱に浮かされた病人の様に弱々しく呟きながら、吉久は彼女の左手の傷を治療する。
その時であった。
「――――ゆび、わ」
今日、己は何を決意したか。
彼女の為に、何を用意しようとしていたか。
それを思い出した吉久は、流れ続けていた己の涙を乱暴に手でこすって拭うと。
「……今はゆっくりお休み、初雪さん」
起こさないように初雪をベッドへ運び、その足で全裸のまま巻き尺を探し始めた。

がぶがぶ／16　ロード・オブ・ザ・ペアリング

それは蜘蛛の糸のように、細く頼りない希望であった。
多くを望みすぎると、途端に切れてしまうような。
こちらの善性を試している、一筋の光明。
「きっと、初雪さんも、僕が、伝えて、でも、僕は……」
意味を為さない言葉の羅列、思考が文章を結ばない。
ふらふらと揺れる視界の中、吉久は目当ての物を捜し当ててヨタヨタと初雪の眠る寝所へ戻る。
その傍らに膝をつくと、震える手つきで彼女の左手を取り。
（――そういえば、指輪って長さを計っただけで良いんだっけ？）
霞がかった思考が、ふと冷静さを取り戻す。
サプライズで喜ばすならば、初雪が眠っている今こそ絶好の機会だ。
万全を期す為にも、しっかりとサイズを確認しておきたい所。
「調べるか、こういう時のスマホってね」
己の精神が紙一重で保たれているのが分かる、眠らないと回復しないだろう。
もっとも、眠った所で劇的に何かが変わる訳ではなく。
すり減った耐久性の上限はすり減ったまま、つまりはジリ貧。
「……そうだ、その為のペアリングなんだ。僕は信じてる、一緒の指輪を付けたら初雪さんは落ち着いてくれるって、元に戻らなくて良い……でも、少しでも落ち着いて、――僕の想いが伝わるのなら」
（……――吉久君をペアリングッ!?）
「あれ？　今……いや僕も疲れてるんだな、こんなにも安らかに眠ってるのに……いや、こんなに笑顔で眠ってたかな？　うん、夢の中だけでもさ、良い夢を……っと、見とれてないでサイズを計らないと」
（うッ、顔に出ていましたか……それにしてもペアリングとは、ええ、吉久君のアイディアではなさそうですが――ふふッ、楽しみで

す）
寝たふりをしていた初雪は、心の中で小躍りした。
実の所、ベッドに運ばれた時点で起きていたのだ。
腕枕してもらおうと、タイミングを伺っていた所にペアリングという単語。
（寝たふりという選択は間違っていませんでしたね、ああ、どんな指輪を選んでくれるのでしょう、どんな渡し方をしてくれるのでしょうか、ふふッ、今から楽しみで仕方ありません）
奇しくも明日は休日は、もしかして、もしかするならば、デートに誘ってくれてその最中に。
等と、初雪は妄想が止まらない。
何を着ていこうか、どんな下着を、ディナーの予約は必要だろうか。
「――――よし、ちゃんとメモも取った。何を買うかは……うん、今は眠いし後で、指輪って何処で買えるのかなぁ……あー……、実際に送って拒否されたら……僕、立ち直れないなぁ……何か保険、保険をかけておくべきか」
再び鈍りだした思考の中、目に入ったのは裸でシーツにくるまった初雪の姿。
美しい彼女の事後の姿など、エロいとしか言いようがない。
同時に、このままだと風邪を引く可能性がある。
「ちゃんと掛け布団……おっぱい」
（……かなり精神に来てますね、明日は優しくしてあげないと）
「このおっぱいが僕の前から失われる可能性……」
（絶対にあり得ませんから、安心して腕枕を早くプリーズ、吉久君の愛しい恋人が添い寝を待ってますよ）
セックスの時は暴走してしまったが、性欲が発散されたのなら多少は冷静にもなる。
そしてペアリングだ。
大きな疲労感もあって、恋愛脳に陥りつつある初雪。
――それを、今の吉久が気づけるはずが無く。
（……今の内に全てのサイズを計って等身大の初雪

さん人形を作る準備をしておいた方が良いのでは？）
謎の使命感が沸き上がる、その勢いのまま再び巻き尺の出番だ。
「――――先ずは乳輪のサイズからだ、それから乳首の大きさ、バストポイント……そうかお尻の穴の皺の数は知ってるけど、皺の大きさと形とかは計ったコトなかったな、今の内にやっておくか??」
「何をしようとしているんですか貴方はッ!?　ち、ちちちち、乳首の大きさとかッ、お尻の穴の皺の大きさとか!!　そのデータで何をしようとしているのですッ!!」
「あっちゃぁ……ごめん、起こしちゃったね。ところで何時から起きてた？」
「今はそんな話をしていませんッ!!　さぁ吐きなさい私のデータで何を企んでいるんですッ!!」
「ちょっともしもの時に備えて、等身大の人形を作っておこうかと」
「は??　浮気？　浮気ですか??　生身の私が寝ているというのに乳輪の大きさを計ったばかりか、人形を性欲の対象にする??　セックスした恋人を放置して腕枕もせず？　事後の姿に欲情して襲うこともせず??　――――ぶっ殺しますよ??」
ハードなセックスの疲れがなんだ、この大馬鹿者を一発殴らないと。
全裸で拳を握りしめる初雪を前に、疲れ切っている吉久は己の言葉の意味を自覚せず、そして欲望丸出しで告げた。
「いやもう今日はクタクタで疲れたから、君のおっぱい吸いながら寝させてくれない？　今なら君のコトを初雪ママって呼べると思う」
「――――さぁ、此方にいらっしゃい吉久坊や、ママのおっぱいチューチューしながら寝ましょうねぇ、貴方の愛しいママの腕枕は此方ですよぉ」
「初雪ママーー!!　おっぱい、おっぱい、おっぱ……ｚｚｚ」
有言実行とはこの事か、吉久は速攻で準備を整えた彼女の隣に寝ころぶと。
赤子の様に乳首を吸って十五秒、完全に寝落ちして。
残るは、母性と性欲と優越感の狭間にいる初雪だけだ。

「よちよち、よちよち、……ゆっくり寝てくださいね吉久君。――――これからは、こういうプレイも取り入れた方が良いのでしょうか……、うっかり乗ってしましたが恐らくは過度の疲弊による錯乱、で、でもですよ？」

これはこれで、安全にかつ確実に吉久を籠絡できる方法なのかもしれない。

もし彼が起きたときに、この赤ちゃんプレイを否定しても。

強引に持ち込んで、その光景を録画出来れば。

「――――悪く、ありませんね」

これで彼の枷がまた一つ、そして今までとは少し意味合いの違う証拠だ。

彼自身の痴態であるならば、気軽な脅迫に使える筈。

けれど。

（計画の算段よりも、今は一緒に眠りましょう……）

長い夜が終わり、部屋には二人分の寝息があった。

そして次の日である、二人は何事もなかったかの様に起き出し。

吉久は昨日のセックスの後始末、初雪はシャワーを浴びた後で朝食の支度を。

その後、いつデートに誘われるかとソワソワしている初雪であったが。

「じゃあ僕は今からちょっと出かけてくるよ、安心して相手は男っていうか兼嗣だから、晩ご飯までには帰ってくると思うからさ。――ああ、そういえば君も出かけるんだよね、そのお洒落的にさ。時間が合うなら一緒に帰る？　後で連絡して良い？　じゃあ改めて行ってきます!!」

ぱたん、と閉じる玄関の扉。

「――――え？　は？　デート……、デートは??」

置いていかれた、恋人なのに、彼女なのに、お嫁さんなのに。

てっきりペアリングを一緒に買うのだと思っていた、なのに、後輩と遊ぶ。
こんな事が許されて良いのか、そもそも本当に後輩と遊ぶのだろうか。
「……サプライズの可能性はどうでしょうか、ですがペアリングとは二人で一緒に付ける物、私も選びたいです」
とはいえ。
「吉久君が選んだ物ですもの、変なデザインは選ばないでしょうし」
以前、彼が初雪の為に手に入れたウェディングドレスのデザインを見れば。
彼のセンスが、そこまで悪くない事は見て取れる。
勿論、手に入るドレスのデザインの幅が無かった可能性もあるが。
（――――吉久君が、私に似合わない物を選ぶ筈がありません）
故に、信じていいと思うのだが。
「でも……一緒に居たいです吉久君、デートしたいです、何で、何で側に居てくれないんですか？」
寂しい、さっきまで目の前に居たのに。
もっともっと側に居てほしいのに、お揃いの指輪を買うなら一緒に買いたいのに。
心の中の不満が、どろりと流れ始める。
（私から逃げる算段を、いえ、――今まさに逃亡しようとしていませんよね、吉久君??）
昨晩、彼は己が寝たフリをしていた事を見透かしていた可能性がある。
もしかして、あえて「ペアリング」と言ったのではないか、彼への向ける執着を少しでも軽減する為に誘導されたのではないか。
（あはッ、そうなんですか吉久君？　指輪一つで全てを帳消しにすると？　それすらもフェイクにして私を捨てようとしているのですか？）
本当にペアリングを買いに行っている可能性だって、勿論ある。
初雪の愛は、その可能性が高いと告げている。

だが憎悪の部分は、謀られていると、この期に及んで弄ぶつもりだと。
「……何で、最初からそうして想いを告げてくれなかったんですか？」
何で、どうして、何故、彼は普通に想いを伝えられた筈だ。
彼と己は、普通の恋人として、何の蟠りもなく愛を育めた道があった筈だ。
それなのに、――彼はそれを放棄し初雪を陵辱し、苦しいからと勝手に解放して、辛いからと指輪と送り誤魔化そうとしている。
「許しません、私は……貴方を許しません吉久君」
行かなければ、追わなければ、もし、もし、本当に彼が初雪を謀っているのなら。
「――――包丁、持って行きましょうか」
澱みきって逆に澄み渡った様に見える青瞳で、初雪は出かける準備をする。
（幸せなんです、貴方と一緒に暮らせて。でも辛いんです。一緒に暮らす貴方を疑うのが。憎しみを向けてしまうのが。こんなに、……こんなに、愛しているのに）
そして。
（貴方はそんな私を見て、苦しんで……昨日なんてママと呼んで私のおっぱいを……――――んん??）
あれ？　と玄関ドアを開けようとしていた手が止まる。
昨日、吉久は追いつめられた果てに妙な醜態を晒していなかったか。
（……そ、そうですよね、普通なら、以前の吉久君でも私の事をママなんて呼ばなかったですし）
もしや自分は彼を追いつめすぎて、精神と性癖を歪ませてしまったのでは。
その瞬間、パチンとスイッチが切り替わる様に初雪の気持ちが切り替わった。
（――――吉久君を救わなくては）

何て愚かな行為をしていたのだろうか己は、憧れと愛と性欲と理性で一時は壊れかけた彼を。

初雪という愚かな女は、己の望みを押しつけ壊そうとしていた。

壊れて、そのまま己だけの狂う男にしようとさえしていた。

「私は決して、貴方を苦しませるだけ為に側にいるのでは無いのですから――――」

可哀想な吉久、自分に出来ることがあるなら。

何でも叶えてあげたいと、初雪は静かに笑みを浮かべ行動し始めた。

がぶがぶ／17　シチュエーション・プレイ

ペアリングは、何とか無事に買う事が出来た。
何時間も付き合わせた上に、代金を貸してくれた兼嗣と紗楽には足を向けて寝られない。
（これでさ、初雪さんも）
彼女の笑顔を想像し、吉久は浮かれながら帰宅し。
晴れやかな顔で玄関を開け、リビングに到着すると。
「――――お帰りなさい、吉久君――――」
「いや、何で??」
「私は気づいたのです、貴方を救わなければならない、と……」
「キメ顔でポーズ取ってるけどさ、その……え、何これ？　僕、どんな顔をすれば良いの??」
吉久は困惑した、初雪が裸エプロンなのは一歩譲ってアリとしよう。
だが、問題は右手と左手に持っている物。
「なんで、おしゃぶりとオムツを持ってるワケ??」
「――――言わねば、理解できませんか？――――」
「どうして喋る度に雰囲気作ってるの??　それに……なんで君の周囲にロボットの武器やパーツを揃えてみました的に色んなグッズが飾られてるワケ??」
そう、床には初雪を中心にバイブやローターを筆頭とした各種アダルトトイ、そして学生服を始めとするコスプレ衣装の数々。
見慣れた物から見慣れる物まで、そして彼女の背後には。
（ウェディングドレスうううううううっ!?　え？　あれって僕がビリビリに破いたやつだよね？　すっごく綺麗に修復されてるけど、あの時のヤツだよね??）
意図が分からない、吉久へのプレッシャーかそれとも復讐の始まりか。
しかし、彼女の表情はまるで以前の彼女の様に。

――まるで、聖女のように穏やかで澄んだ笑顔。
（ふおおおおおおおおおっ!? なんだか良く分かんないけどっ!!
復活!! 聖女な初雪さん復活――――なのか? ホントに?? え、怖っ!? なんか怖いんだけどっ!? 僕、昨日に引き続き何されるのっ!?）
（嗚呼、怯えているのですね吉久君。……気づけて良かった、まだ間に合います。私は――貴方の心を救う）
（決意を秘めた感じの目になった!? い、今までに一度も無かったパターンだよコレっ!?）
（怯えなくて良いのです、今、貴方を抱きしめて……）
一歩踏み出す初雪、思わず下がる吉久。
また一歩、そして一歩。
進んで、下がって、もしリビングから玄関まで無限の距離があるならば。
この攻防は永遠に続いたであろう、だが現実は有限どころか一分もかからず吉久の背は玄関ドアに密着。
「〜〜っ!? ドアが開かないっ!?」
「残念ですが施錠させて頂きました、――貴方の惨めな姿を衆目に晒す可能性は一つでも減らしたいので」
「マジで何されるの!? 怖すぎるんですけどっ!? 早く教えて――い、いや、君の言葉には騙されないぞ!! 僕には分かるんだ!! 外見のインパクトで思考停止させておいて、本命は周囲に配置されたエログッズだね!! ……ぼ、僕のケツ穴が目的か、僕を女の子になるまで責め立てて、似合わない女装させた上でペンチで睾丸を潰して、オス奴隷として永遠に倒錯的なプレイをさせて飼い殺しにするんだね!! くっ、これも因果応報かっ、せめて他の男に僕のケツ穴を使わせないでくれ!!」
「被害妄想が逞しすぎませんか?? それに簡単に覚悟を決めないでくれますか??」
ぷるぷる震えながら真っ青な顔で歯を食いしばる吉久に、初雪としては大きく首を傾げるしかない。

だが、これで判明した。
彼女は彼をふわりと抱きしめると、優しく頭を撫でて。
「安心してください、この部屋には貴方を傷つける者は誰もいません、貴方を責める物も、だから――安心して私に甘えてくれて良いんです、昨日のように〝ママ〟と呼んで、今だけは全てを忘れて癒されてください……」
「どういうコト??」
「ごめんなさい吉久君、ママが間違ってました。貴方がそうした様に思いをぶつけるだけぶつけて、――先日貴方は言ったのに、同棲するなら酷いセックスはしないと……」
「……覚えててくれたのは嬉しい、でも謝罪は必要ないんだ、だって僕が悪いんだから」
「でも、――貴方の心は傷ついた。私はそれを思い知りました。だから……貴方が私に言う様に、私も吉久君の心を少しでも少しでも軽くしたいのです」
「いやでも、何でそれでママになるワケ??」
「だって昨日、あんなに喜んでおっぱい吸いながら安心しきった顔で寝てたじゃないですか。だから吉久君には母性という癒しが必要なんですッ!!」
よしよしと撫でられ、すりすりと頬擦りされるがままの吉久としては。
腑に落ちた一方で、困惑するしかない。
己はそんなに、疲弊し追いつめられていた様に見えていたのだろうか。
それに。
「じゃあさ、床に飾ってあるのとか直したっぽいウェディングドレスとかは？」
「吉久君が望むなら、〝ママ〟だけじゃなくて〝お姉ちゃん〟や〝妹〟にもなろうかと。勿論、ウェディングドレスで初夜をやり直すのも断然オッケーです。――貴方が望むなら、また破いて獣欲のままに振る舞っても……今度こそ私は逃げ出さずに貴方を愛で包み込みます」

「――――っ!?」
初雪の覚悟に吉久は絶句した、あの時の出来事は彼女にとってトラウマとも言うべき物だった筈だ。
それを、もう一度されても今度は折れないと。
しかも吉久のその行為を受け入れた上で、愛すると言っているのだ。
(違う、〜〜〜〜っ、違うっ、違う違う違うっ!!)
こんな事を言わせたかった訳じゃない、こんな、彼女は全てを我慢してでも吉久を癒し、甘やかそうというのか。
(お金で縛り付けられた方がまだマシだっ!!)
犠牲になるのは初雪の心だ、吉久だって痛い程に理解している。
彼女は手遅れなほど彼を愛している、それと同時に、手遅れなほど彼を憎んでいる。
その片方を犠牲にしようと言うのだ、初雪を陵辱したのは吉久だというのに。
(僕は、君になんて言えば)
覚悟を決めた彼女に、吉久の言葉は届くのだろうか。
己の心を押し殺そうとしている彼女に、吉久は何ができるのだろうか。
だがこのまま静観など、ましてや言葉通りに甘えるなんて出来ない。
(――――……そうだ)
その時、吉久は思い出した。
己は今日、何のために出かけていたのだ。
彼女にプレゼントした物があったからではないのか。
「……ねぇ初雪さん、君の気持ちは凄く嬉しい。でもさ、僕はそれを望まないよ」
「私に甘やかされたくない、と?」
「それは違う、甘やかされたいし好き放題した。けどさ、……それで君が君自身を犠牲にするなら僕は心から甘やかされるコトなんで出来ないし、心は軽くならない」

「それでも、私は貴方を救いたいのです」
「それでも、僕は望まない」
話は、静かに平行線へ陥った。
しかし険悪さは無く、けれど緊張感はあって。
吉久は笑いかけると、肩掛け鞄から四角い箱を取り出した。
「――これを君に、一緒に付けてくれると嬉しいな。ペアリングなんだ」
箱を開き、その一つを取り出し彼は初雪の左手を手に取った。
しかし。
「……いいえ、これはまだ受け取れません」
「まだ？」
彼女は優しく彼の手を押しとどめた、どこか悲しそうな表情で、しかして愛おしそうに。
同時に、憧れの眼差しを初雪はペアリングに送る。
そして。
「私は、貴方の何なのでしょうか」
その言葉に、吉久は再び絶句した。
彼女との関係、それは恋人同士だ、もしかしたら、否、確実に将来の夫となるだろう。
同棲相手であり、愛する女性、彼女も愛してくれている筈だ。
「聞かせてください吉久君、貴方の口から、はっきりと声に出して欲しいのです。――私は、貴方の何なのでしょうか」
「そ、それは恋人にきまって――」
「――私が無理強いしているのに？」
「僕はっ、僕は君の事を！」
「愛してる、あの時から私は一度も聞いていません」
初雪は嘘をついた、本当は昨晩のセックスの後に聞いている。
だがそれは、彼女が眠って聞いていない事を前提に出された言葉で。
同棲を初めて、性奴隷から解放されてから一度も正面から聞いていない。

「言葉にしない想いは、存在しないのと同じなんです。……父が母を愛し、そして私の事も愛しているのかもしれません。でも、一度も言われたことがない事をどうして信じられましょうか」
「僕は……っ」
「私は貴方にとって何なのでしょうか？　もう性奴隷ではありません、恋人も同棲相手も、私が強要した事。――貴方は何も聞かせてくれません、いいえ違う、私は聞かなかったのです……いつか、すぐに言ってくれると信じて」
でも。
初雪は目尻に涙を浮かべて、それは嬉しいのか悲しいのか彼女自身も理解できず。
「貴方とお揃いの指輪は嬉しいです、だからこそ……口に出して欲しい。吉久君にとって、私は何なのか、どう想っているのか。――――嗚呼、違う、違う、……好きです、愛しています吉久君、ずっと、ずっとお側に居させてください」
言葉にしない想いは、存在しないのと同じだ。
だから初雪は愛を口にする、今だけでも、愛を口にする。
口にしなければ、――いずれ憎しみも消えると信じて。
「貴方が負担に思うなら、貴方からの愛はもう請いません。だから今この瞬間だけでもお聞かせくださいまし吉久君、愛しています、貴方は……私をどう想っているのですか？」
涙をこぼしながら必死に笑顔を作り、震える手で縋りつく初雪の姿に。
吉久は歯を食いしばって、大声で叫び出すのを耐えた。
想いを伝える権利なんて無いと思っていた、だから伝えなかったのに。
（僕はまた間違えたっ!!）
伝えなかったからこそ、彼女の心の負担になっている。
伝えなかったからこそ、彼女は心を犠牲にしてでも吉久を甘やかし癒そうとしている。
そんな事、決してあってはならないと言うのに。

（言葉にしない想いは、存在しないのと同じ？　ねぇ初雪さん、君はそうやって僕への憎しみを押し殺してさ、僕の手の届かない所で壊れるつもりなのかい？）
　間違っていた、吉久は間違っていた。
（嗚呼、嬉しいなぁ……、僕はさ、こんなにも初雪さんに愛されているんだ）
　天にも昇る気持ちだ、だってそうだろう。
　一度は全てを捨てる覚悟で犯し愛した女が、己を愛してくれているのだ。
（だからこそムカツクな、嗚呼、そうだ僕はムカついているんだ）
　そんな女が自分を犠牲にしてでも愛そうとしているのが、彼女にそんな愛し方をさせる己が。
　腹立たしい、愚かすぎる、どうしてこれで彼女を愛しているなどと、恋人であると言えようか。
（だからさ、初雪さん……）
　吉久は決意した、間違っていたのだ何もかも。
「ごめんね初雪さん、――――僕が間違っていたよ」
　だから彼は、踏みにじる覚悟を決めた。

がぶがぶ／１８　リターンズ／それでも……

「吉久、君……？」
「ククククク、ははっ、あっはっはっはっはっ!!　ああ、――なんて、なんて僕はバカだったんだろうっ!!」
「……何がそんなに可笑しいのですか」
「分からない？　ああ、そうだよね君には分からないだろう、うん、ごめんね。ククっ、愛してるよ僕のお嫁さん」
「ッ!?　よ、吉久君ッ!?」
　ぶるりと初雪の背筋が震える、見覚えがある声色。
　思わず涙が止まる、同時に期待が膨らんだ。
（ま、まさか――――ッ）
　きっと濃密な時間を過ごしてきた彼女だけが知る、彼の声のトーン。
　何度囁かれただろう、どれだけの屈辱を味わっただろう。
「ねぇ初雪さん、ああ……まどろっこしい。これからは初雪って呼び捨てにしよう。だってそうだろう？　君は僕の女なんだ」
「――――貴方は、また、……同じ過ちを繰り返すと言うのですか」
「マゾっ気がある君には、体で言うこと聞かせた方が効果的かな？　でもダメだ、それじゃあ前と同じだ」
「では？　前と同じような口調をするだけで、私をコントロール出来るとお思いですか？」
　吉久は口元を歪めると、初雪の手首を強引に握る。
「君が嫌と言ってもさ、ああ、そうだね君が悪いんだ。欲望のままに傷つけるよりはって思ったのに、心からそう思ってたんだよ？　――でもさ、何なんだい？　勝手に押し掛けて来たと思えば勝手に傷ついてさ」
「ッ!?　あ、貴方がそれを言うんですかッ!!　ふざけないでください!!　また、また私の意志を無視して好き勝手にするおつもりですか!!」
　ギッと睨みつける初雪の銀髪を、吉久は愛おしそうに撫でながら。

実に澄ました顔で、けれど瞳をギラつかせて言った。
「五月蠅い、僕なしでは、僕の愛がなければ生きていけない女がどの口で文句を言うのかな？　――ほら、これはプレゼントだ、嬉しいだろうお揃いの指輪」
吉久は耳元で囁きながら、強引に指輪をはめた。
それを初雪は歯ぎしりしながら睨んで、しかして抵抗しない、出来ないのだ。
体に染み着いた性奴隷としての服従心が、抵抗を許さない。
――屈辱と憎悪が、被虐の悦びと期待に混じり合って。
「貴方って……貴方ってヒトはッ!!　私を騙していたのですか？　あの謝罪も、償うという気持ちも！　全部全部嘘だったのですかッ!!」
「嘘じゃないさ、――だってさ、君はこういう僕を望んでいたんだろう？」
「ッ、ぁ……、ち、ちがッ、私は、私はッ!!」
「違わないだろう、だってそんなに嬉しそうな顔をしているんだから」
ぁ、とか細い声が漏れた、初雪は己の口元が暗い悦びで歪み。
己の体が彼に媚びてすり寄ろうとしているのを、自覚してしまったからだ。
（私は吉久君を壊して、……壊したかった訳じゃない、でも壊したかった、だなんて――――）
認められない、己の心も体も簡単に歓喜の声をあげている事実を。
認められない、これから起こる獣のような蹂躙を期待している事など。
「……卑怯者、私の心を弄んでさぞや楽しかったでしょうね」
「心外だなぁ、僕は君に真摯に向き合おうとした。僕は君に相応しくないから。でも君が悪いんだ、……言葉にしない思いは存在しないのと同じ？　いいよ、君がそれで自壊しようとしてるならさ、僕はそれを許さない、何度だって愛してるって言うし、好きだって抱きしめる、君が望むなら婚約指輪だって結婚指輪だって用意する、だから――――初雪、君を力尽くでも僕のお嫁さんにする」
「――――――――ぁ」

戻ってきた、あのどこまでも自分本位に愛を押しつけてきた吉久が。
帰ってきた、卑怯で卑劣で、初雪だけを求めるケダモノの様な王子様が。
ぽろぽろと涙が流れる、嬉しいのか悲しいのか分からない。
「ずる、い……ずるい、ズルい、狡いです吉久君、どうして、どうして今……なら最初から……」
「仕方ないだろう、だって僕は僕が嫌いなんだ。君を前にすると愛をぶつける事しか出来なくなる自分が大嫌いなんだ。――――でも、そんな僕を肯定したのは他ならぬ君だ。……責任、とって貰うからね」
「ッ!? い、嫌ッ、触らないで、また私を犯す気でしょう!! 貴方を愛していると言うまで責め立てて快楽で縛り付ける気でしょう!! 卑怯者ッ!! 私の体は快楽に堕ちようとも、心までは快楽に支配されないと今一度思い知れば良いのですッ!!」
「いやしないよ?? なんで今更君を犯すのさ、そんな事をする意味ってある??」
「……はい??」
真顔で実に不思議そうにする吉久に、初雪は半分落胆しながら首を傾げた。
「えっと……、ここは吉久君が私をあの頃の様にグチャドロに犯す流れだったのでは?」
「だから、しないよ?? それじゃあ前と同じだよね、そりゃあ聖女のように心清らかで銀髪巨乳美少女を好き放題犯すのって男のロマンだよ」
「そんなロマンは捨ててください まし」
「でもさ、……今それをやると君って今度こそ性奴隷に堕ちるよね?
しかもいつ何時、隠した憎悪が肥大化して爆発するか分からないまま可哀想な性奴隷に酔いしれるよね??」
「性奴隷は可哀想な存在なのでは?」
「だから、――元の僕に戻って欲しい君の願望は無視する事に決めた

んだ」
晴れやかに言われた言葉に、初雪は目を丸くして。
意味が分からない、ならば彼はどうすると言うのか。
あの頃のような強引さを以て、何をしようと言うのか。
「つまり？」
「君に遠慮しない事にしたんだ、差し当たっては……裸エプロンじゃなくて普通に服を着ようか」
「……拒否すると言ったら」
「そうだねぇ……眠くなるまで君を抱きしめて、耳元で愛を囁いてさ、そんでもって一緒に寝る、勿論セックスはしない。――ああ、誤解しないで欲しい。逆バニーの格好をして、発情期のウサギは旦那様の大きな人参が恋しくてしかたないぴょんって、媚び媚びでオネダリしてくれるなら考える」
「～～～～～～～ッ!!　最低です吉久君ッ!?」
どうして、どうして彼はいつも予想外の行動に出るのだろうか。
憎い、こんな事で喜んでどちらが特か考えてしまう自分が憎い。
屈辱だ、今すぐ彼を殺したいほどの屈辱、こんなの、こんなもの。
「……私に、性奴隷ではなく恋奴隷になれと？　嗚呼、貴方らしい要求です、どんなに罪悪感を覚えようとも、口でどんなに謝罪しても、私に一方的に愛をぶつけて支配しようとする所は変わらない」
「じゃあこうしよう、少し待ってて」
そう言うと吉久は台所へ、しかし目当ての物が見つからなかったのか初雪へと質問が投げかけられる。
「ねぇ初雪？　包丁って何処にやったっけ？」
「あッ、それなら私の鞄に、……通学鞄ではなく外出用の……、そう、それです」
「なんでこんな所に入ってるワケ??」
「ついうっかり」
「ついうっかり??　うーん、深く聞くべきか悩むなぁ……まぁ良いか」
問いただしたら無駄に闇が広がる気がする、そう判断した吉久はそれ以上は問わずに。

初雪の所に戻ってくると、その包丁を握らせた。
「……刺して良いのですか？」
「君が僕を本気で拒否するならね、何時でも刺して良い。でも刺さないのなら――僕は好きなように君を愛するよ」
「……」
「どうする？　今すぐ刺してみるかい？　それとも普段着に着替えて映画でも見る？」
（狡い……嗚呼、なんて、なんて狡いヒト……）
そんな事を言われたら、刺し殺す事なんて出来ない。
命を引き替えにしても愛する、そんな事を行動で示されて。
今の初雪に、拒めるはずがない。
（くらくら、します、ううッ、頭が茹だって、くッ、こんなこんな屈辱～～～～ッ、で、でもッ、そうしたいって思ってしまったのなら仕方ないでしょうッ!!）
はァはァと熱情の籠もった吐息が出てしまう、目が潤んで媚びるように見つめてしまう。
必死になって睨むが、胸には甘い痛みとドロドロと渦巻く激情が心を痺れさす。
「どうしたの、ほら僕は抵抗しないよ」
「ッ!!　さ、刺しませんッ!!　ええ、刺しませんともッ、運が良かったですね、ええ、今日の所は見逃して差し上げますッ!!」
「嬉しいね、まだ君の隣に居られるんだ。――じゃあ次はどうする？　せっかくペアリングをあげた記念の日なんだ、僕はイチャイチャして過ごしたいんだけど……」
「少し待っててください!!　良いですか、そのまま寝室に行って目を閉じて待っててくださいねッ、絶対ですよッ、私が許可を出すまで絶対に目を開けない事ッ!!　～～～～～ああもうッ、こんなの特別なんですからねッ!!」
吉久はワクワクしながら寝室のベッドに腰掛けて、素直に目を閉じて待つ。
何分経っただろうか、カチャ、と静かにドアは開き静かな足音が。

どうにも入ってきた人物の呼吸が、荒く聞こえる。
「い、良いですよッ……」
「……」
「黙ってないで何か言ったらどうですかッ、ほらッ、吉久君のお望み通りの格好ですッ!!」
目を開けるとそこには、ウサギさんが居た。
雪のように白い肌を赤く染め上げ、限界ギリギリの恥ずかしさで身悶え苛立つ初雪。
(逆……逆バニーさんだよコレぇっ!?)
こんな幸運が本当にあって良いのだろうか、恐らく持っていないだろうと踏んであえて逆バニーと言ったのに。
目の前の光景が、あの伝説の逆バニー。
通常のバニー衣装と真逆の、本来見えてはいけない所だけを露出させた破廉恥きわまりない格好。
「そう、か――僕はとうとうニップレスを剥がせる男になったんだね……」
「なに感慨に耽ってるんですかッ、がぶッ、がぶがぶがぶッ!!」
「うひゃあっ!? いきなり噛まないでよっ!? ああもう、腕に歯形が……」
「そんな事よりッ!!」
すぅはぁと初雪は深呼吸を一つ、屈辱という憎悪を被虐という快楽に変えながら。
涙目で睨んで、たどたどしく。
「は、発情期のウサギはッ、だ、だだ、だ旦那様の、おッ、おお、大きな人参が恋しくて、し、しかたないぴょんッ～～～～!!」
「……」
「うぅ……、な、何か言ってください、恥ずかしくて死んでしまいそうなんです、卑怯です吉久君、私を性奴隷に堕とさずに素面で言わせるなんて……」
「……――今夜は寝かせないぜベイビー!!」
「――あ」

そして、吉久は愛の野獣となった。
更に付け加えれば、宣言通り朝になるまで甘くそして甘く、愛して愛しまくった。
その後、性も根も尽き果てて安らかな寝顔。
（……久々に、太陽が黄色く見えますね）
今回は受け身であった分、吉久より少しだけ体力を残した彼女は。
カーテンの隙間から覗く朝日に照らされる、彼の幸せそうな寝顔に見とれて。
「幸せです、嗚呼、こんなに幸せな日が来るなんて……」
望んでいたのだ、こうやって愛される日を。
幸せに目尻が下がる、同時に沸き上がる憎しみで口元が歪む。
どうして、どうして、どうして最初から。
（ふふッ、許しません、許すものですか、強姦された痛みを忘れません、陵辱された屈辱を忘れません、用済みと言わんばかりに捨てられた怒りを忘れません、――私は、決して憎悪を忘れない）
嬉しいから、愛してるから、憎い。
涙がこぼれそうなぐらい幸せで、痛みで心が壊れそうだ。
「絶対に、誰にも渡しません――――」
彼の心も、体も、その視線の先すら初雪だけのモノだ。
くつくつと嗤いながら、彼女は吉久を独占する方法を考え。
いつの間にか、幸せそうな寝息をたてて眠った。

がぶがぶ／１９　アイズ・オン・ミー

一度開き直ってしまえば、泥沼の同棲生活も平穏そのものだった。
吉久と初雪は、普通の同棲カップルのように家でも学園でもイチャイチャしながら生活し早三日。
変わった事をあげるとするならば、それは昼休み。
「ふふッ、今日も手作りのお弁当ですよ吉久君！」
「初雪が作ってくれるようになって、近頃僕はお昼休みが楽しみなんだ。でも聞いて良い？」
「ええ、何でも聞いてください」
「……なんで僕はそっちのクラスに行っちゃいけないの？　何で毎日、僕の膝の上で君は食べてるの？　というかさ、休憩時間の度にウチのクラスに来てるよね？　それから妙に目隠ししてくるの多くない？　いったい何の意味があるの??」
「愛故に、です」
にこやかに告げた初雪の姿に、吉久は困惑するばかり。
しかし、外から見てみれば一目瞭然。
二人の隣でお弁当箱を広げている紗楽、そして訪問してきた兼嗣は苦笑しながら小声で。
「（初雪嬢って思った以上に嫉妬深い女性だったようだね、可愛らしいというべきか恐ろしいというべきか……）」
「（紗楽さん、それで済ませて良いんですか？　俺にはクソ男先輩が蜘蛛の糸に絡め取られてる様子に見えますが、まぁ吉久先輩なら大丈夫でしょうけど）」
「（それも愛だよ愛、しかし気づかないものかね。初雪嬢のクラスには学園でも評判の美少女が揃っているし）」
「（ああ……、目隠しする時ってクソ男先輩の視界に他の女の子が入った時ですもんね……重くありません??　いやホント、クソ男先輩よくスルーしてますね??）」
表面化した初雪の嫉妬深さに反応はそれぞれ、見守る者、驚き困惑する者、温かい目で見る者。

なお、吉久を心配する者が皆無なあたり妙な信頼感が伺える。
ともあれ、彼としては彼女の行動の原因など既にお見通しであり。
（うーん、一応聞いてみたけどさぁ、やっぱはぐらかすかぁ……。嫉妬だよなぁ、嫉妬で済ませていいのかなぁ？）
聖女らしくない初雪は解釈違いだから、と今更拒絶などしない。
吉久は己が変えてしまった彼女を、既に受け入れたのだ。
第一これぐらいの嫉妬など、可愛いものであるが。
（放置するとエスカレートする、いやもうしてるか、だって家でもトイレ行くと着いてくるし出るまで扉の向こうで待ってるし）
（――何か企んでいますね？　ええ分かりますとも吉久君、でも……貴方に何が出来ますか？　私の評判を気にして他人の前では行動を控える貴方が）
（対処……やり返して反省を促す……いやダメだな、恥辱で心を折る為に排泄行為を生で見たり間近で撮影して一緒に鑑賞して言葉責めした事だってあるのに、反省もクソもないよね??　責められるなら僕だよね??）
（とはいえ、何を企んでいるのでしょうか。今更私に何を――いえ、違います。足りない、吉久君の全てを独占するのに、きっとまだ何か足りないんですッ）
因果応報を噛みしめる吉久、独占欲を燃やす初雪。
そうこうしている内に、お弁当は食べ終わって。
そして彼はふと気づいた、大事なことを忘れていると。
「っ!?　しまった、失敗した……っ!!」
「ふぇッ!?　何か問題が発生したのですか吉久君!?」
「ああ、とても重要な問題だ――――。今日のお昼は初雪に『はい、あーん』をして貰ってないんだよっ!!」
「ッ!!　くッ、私とした事がなんて事を……ごめんなさい吉久君、もっと……もっとイチャイチャする事に専念するべきでしたッ!!」
「いやキミらね、今以上に恋人居ない組を殺す気かい??」
「そうですよ吉久先輩、まぁそのお陰で俺も毎回お昼に紗楽さんにお呼ばれ出来てるんで役得ですが。お二人のバカップルぶりで、独り身

が悔しがって悶絶する事態になっているんですからね？　少しは自覚してくださいよ……」
　親友達の呆れた口調に、吉久は少し考えると。
　初雪の肩を馴れ馴れしく抱いて、ニヤリと笑う。
「ごめんね、学園の聖女様を僕だけの聖女様にしちゃってさ」
「もう、吉久君ったら……皆さんの前でそんな大胆な発言……照れてしまいます」
「それは良いけど、なんでシャラ達の方を向いただけで僕は目隠しされたのかな??」
「え??　吉久君の視界に入る女の子は私だけで十分ではありませんか？　一歩譲って授業中は対象外にしているだけ温情ではありませんか？」
「なるほど……なるほどなぁ……??」
　この嫉妬はいったい何処まで行くのか、今すぐ対処しないと不味いのでは。
　同時に、他の女の子を見るのは何処までがセーフなのか。
　疑問を覚えた吉久は、兼嗣に問いかけた。
「所で兼嗣、先月貸したＡＶ返してくれる？　そう、シャラ似の女の子が出てるやつ」
「先輩ッ!?　クソ男先輩ッ!?　何で今言ったッ!?　何で今言ったッ!?
　これは男の約束だって言ったじゃないですか!!　絶対に紗楽さんにバラさないって言ったじゃないですかあああああああああああああああ!!」
「ふっ……、冷静になるんだ兼嗣。これは考えがあっての事なんだよ」
「ほ、ほう??　事の次第によっては遠慮なくブン殴りますよ??」
「初雪にＡＶとかグラビア写真集とか禁止にされそうだから、ウチのエロ本ＡＶの貸し借りネットワークを巻き添えにしようと思って、ああ、僕は記憶力が良いからね、全員分どころかＯＢその他まで暗記してるのさ!!」
「最低だッ!?　最低だよアンタッ!?　独り身の寂しい野郎共まで巻き添えを食うぞそれッ!?」

クラスの男子達もざわめき、恋人達から冷たい視線を送られる中。
吉久は胸を張って言った、彼にだって慈悲はある。
「安心して欲しい……、恋人が居ない人達は言わないよ!! だって可哀想じゃないか、せめてフィクションの中だけでも幸せを味わって貰おうよ」
「もっと外道だよクソ男先輩いいいいいいいい!! 追い打ちだよソレッ!! そもそも恋人居てもそういうの見ても良いじゃねぇかッ、アンタの事情を巻き込むんじゃねぇッ!! 知ってますか一条寺先輩ッ、吉久先輩は金髪ロリ系ばっかり集めてるんですよコイツはッ!!」
「はぁ〜〜?? それを言うなら兼嗣だって巨乳ロングばっかり集めてるじゃん、何を人の性癖バラしてくれてるの??」
ガタっと立ち上がる吉久と兼嗣、絶対に負けられない男の戦いが始まる。
教室の男子達も危機感を覚え、兼嗣に加勢すべく立ち上がったその時だった。
「吉久」「カネく〜〜ん?」
「……」
「……」
二人の肩が、ガシっと強い力で掴まれる。
「ねぇ兼嗣、ちょっと僕さ後ろを振り向けないんだけど、どんな顔してるか分かる?? ちなみにシャラは凄い顔してる」
「クソ男先輩は冗談が上手いなぁ……、シャラさんがそんな顔する訳ないじゃないか。ちなみに一条寺先輩はすっごい笑顔だぜ」
二人は冷や汗をダラダラと流す、だってそうだろう。
吉久は金髪ロリ、恋人である初雪は銀髪巨乳だ。
兼嗣は巨乳ロング、恋人であるシャラはショートカットのスレンダー。
お互いに、恋人と収集しているＡＶのジャンルが見事に正反対で。
――――実の所、恋人に似た人物で自慰をするのは気が引けるから反対方向に行ったという事実はあるのだが。
「誰も居ないところでお話しませんか? ええ、ちょっと長話になる

かもしれないので。もしかすると次の授業に出られないかもしれませんが」
「さぁさぁ、今から部室でイチャイチャしようかカネくん、そのＡＶの事を存分に聞きたい気分なんだボクは、――まさか断らないだろう？　可愛い恋人の頼みをさ」
この場に居合わせた全ての者が、処刑宣告に聞こえたという。
まず最初に、ウインクで誤魔化そうとした兼嗣が首根っこを掴まれドナドナと連行され。
それを見送った後、吉久は晴れやかな笑顔で。
「――――愛しっ、いだだだだだだだだだあああああああああああああああっ、ごめんって、謝るから謝るからちょっと頭割れちゃうんだけど!?　アイアンクローとか知ってたんだねえええええええええええっ、手加減っ、手加減お願いっ!!　そのまま引きずられると首がっ、僕の首がぁぁぁぁぁぁぁ～～～～～～～～～っ!?」
ドップラー効果を響かせながらドナドナと連れて行かれる吉久に。
女子は呆れと若干の軽蔑の視線、そして初雪には尊敬の念を。
男子は南無南無アイツ死んだな……、と合掌しながら見送る。
――かくして、尊くない犠牲のもと学園内エロ・ネットワークの秘密は守られた。
「……んでさ、そろそろ良いんじゃないかな初雪」
「ええ、他の生徒の皆さんも周囲には居ませんものね。――これで問いつめることが出来ます。さぞや素晴らしい言い訳が聞けるのですよね？」
普段は使われていない地理資料室の中、吉久は本棚を背にネクタイを初雪に掴まれ。
もっと怒らせたら、首を絞め殺されるのだろうか。
彼女の激高する姿を想像して、思わず笑ってしまう。
「何がおかしいんですか、いえ、笑うに値する状況なのでしょうね貴方にとってはッ!!　さぞや楽しいでしょうッ、私をわざと怒らせてッ!!
しかも正反対の女の子のＡＶを集めてッ!!　――まさか、私の体は本当は好みで無かったというのですか？　私を傷つける為にわざと

好きだと？　だから解放した後は同棲するまで抱いてくれなかったし、同棲してからも貴方から抱いてくれたのは数える程で……」
怒った顔のまま初雪の目から大粒の涙がこぼれた、吉久はそれを美しいと思いながら。
「嗚呼、ダメだな僕は……君を傷つけるつもりは無かったんだ。でも、意地悪をしたいと思ってね」
「そんなッ、そんな理由で!!　私がどれだけ貴方の事を愛しているか分かっているでしょう!!　止められないのにッ、貴方の全てを独占したいって、貴方の瞳の中に私一人だけ居ればいいって、ダメだって分かってるのに――――止められない、止められないんです」
どうして一条寺初雪という存在は、こんなにも美しいのか。
愛に喜び、愛に苦しみ、欲望に流され押し潰されそうになっている己を律し、葛藤し、どこまでも吉久への想いに一途に狂う。
彼はネクタイを握る彼女の手首を掴み、口元へと寄せる。
「ぁ――――ッ、っ、ァ……」
初雪は己の指の感触に身悶えた、がぶり、がぶりと強く噛まれていく。
吉久の歯形が、彼女の美しい指に甲に手首に残されていく。
心行くまで噛むと、彼は腰砕けになりながらも悔しそうに頬を赤らめて睨む彼女へ笑い。
「僕はね、君が君自身の葛藤で押し潰されるなんて嫌なんだ。だから理解しろ、一条寺初雪は僕のモノだし、僕は君以外は眼中に無い」
「ず、狡いです吉久君、こんな事をされてそんな事を言われたら……私、私は貴方を――」
「許さなくて良い、その憎悪を僕が踏みにじるから、君がどんなに嫉妬しても、憎悪を向けても、快楽と屈辱と愛を味わって貰う」
ねっとりと囁かれた言葉に、初雪は嗚呼と熱い吐息を漏らした。
本当にどうかしている、こんな自分勝手な台詞で心の芯から悦んでしまうなんて。
（酷い、なんて酷いヒト……、愛されてるって、また陵辱されるのかって、私の心をグチャグチャにして笑って――――）

光と闇を同時にかき回される感覚、悔しくて、悲しくて、嬉しくて、愛おしくて。

（肯定しないでください、私の嫉妬を、貴方だけは嫉妬しないでくださ い、ダメなんです、ダメ、ダメなの、こんなのは貴方が愛する私じゃないのに、そんな私すら愛するなんて）

心に罅が入って壊れていく、大事な何かが欠けていき。

激情とも呼べる何かが代わりに埋めていく、心のブレーキが無くなっていって。

「僕はさ、今の、ありのままの君を愛するよ。もう手放さないし逃がさない、それでも嫉妬や独占欲で不安になるなら……ほら、思う存分に初雪のモノだって僕に教えてくれ」

「ぁ、ッ、ぃ、ぃ～～～～～～～～～～～～～～～!!」

がぶり、がぶり、がぶり、泣いて嗤いながら初雪は吉久の手首に噛みついた。

噛み痕を舐めて、重ねて噛んで、彼女の手は自然と彼の制服を脱がし始める。

彼もまた、彼女の指を甘噛みしながら彼女の制服を脱がし始める。

これはセックスではない、ただ言葉の代わりに原始的なマーキングをするだけの睦言めいた情事。

夕方になるまで、地理資料室には男女の荒い吐息だけが。

そして二人の体のいたる所には、噛み痕やキスマークが散らばっていた。

――――行為の後、二人は無言のまま帰宅して。

腕を組んで歩いているだけなのに、何よりもお互いを感じる。

沈黙だって、不思議と嫌なものでは無く。

それはきっと、身も心もお互いの愛で満たされていたからだ。

二人はまるで熟練の夫婦のように、言葉もなく意志疎通をして笑いあって。

深夜になると、手を繋いで眠りについた。

朝になり、スマホのアラームで吉久は起床すると。

「…………何で僕は、両手首を鎖で繋がれてるのかなぁ??」

心当たりが有りすぎる事態に、冷や汗が流れ始めた。

がぶがぶ／２０　チェーン・デスマッチ

同棲中の一条寺初雪の朝は早い、隣で寝ている吉久の寝顔を十分間眺めた後。
朝食とお弁当作りを平行し、更に洗濯機を回す。
もはや主婦、甲斐甲斐しく尽くす妻、完璧な若奥様っぷりを見せる自分に酔いつつ、愛しい夫（予定）を起こしに行き……。
（――――そうでした、ええ、うっかり忘れる所でした）
本日は様子が違った、吉久を起こそうとした手が止まる。
思い出したのだ、昨日の愛の噛み合いの発端を。
（確かめないと……吉久君が本当に金髪の幼い少女の卑猥な本や動画を隠し持っていないか、探さないと――）
それは、何よりも優先される事柄だった。
（もし、ええ、もし本当に持っていたのなら、そして、そして……）
初雪の中にある恋する乙女の不安と、男を愛する女のプライドと、いまだ尽きぬ憎しみが渦を巻いて混じり合う。
形容しがたい熱情が、冷静な思考と行動力を彼女に与える。
（――邪魔されると厄介です、ならば吉久君には身動きを取れなくしましょう）
この二人の愛の巣に、持ってきていた筈である。
切なく愛おしく輝かしくも淫蕩で、屈辱と憎悪と諦観がせめぎ合っていたあの半年間。
彼からプレゼントされた、大切な物の一つ。
（懐かしい……と言って良いのでしょうか、でも、これがあれば）
物置代わりにしている和室の片隅にあるカラーボックス、その中に収まっている卑猥な品の数々。
初雪はプラスチックで作られた、玩具の手枷を取り出して。
大切そうに微笑んで抱きしめる、しかしその瞳は淫蕩に濡れつつも怒りに染まり。
（仕組みが分かれば簡単に自分で外せる、ええ、でも貴方は私を脅して

それを封じた、目の前で服を脱ぐように命じられ、付けてくださいと土下座で懇願させられた屈辱は、強引に支配される快楽は忘れられません、――――許すものですか、絶対に、ええ、吉久君からの〝愛〟は一つ残らず覚えていますから、屈する快楽を教え込まれた屈辱は、染められてしまった怒りは、愛してしまって、愛されている事に悦ぶ心になってしまった屈辱は、嗚呼、嗚呼、嗚呼、愛しています吉久君……）

くつくつと煮込むような笑いがおこる、体が芯から熱くなり身悶えてしまう。

みっともなく腰が揺れてしまって、なんと浅ましい事か。

「――嗚呼、思い出に浸っている場合ではありませんでしたね。探さなければ……」

のろり、ゆらりと初雪は嗤いながら家捜しを始めた。

彼の所持しているノートパソコンの中に無いのは、同棲前から把握している事だ。

だから物理的に所持している筈だと、ベッドの下や通学鞄の中、箪笥や靴箱、食器棚の奥など迅速かつ静かにチェックを続ける。

（こんな浅ましい事をしている姿を吉久君が見たら、ふふッ、貴方はどうしますか？）

お仕置きと称して淫らなことを強いるのだろうか、それとも慌てて止めに入るのか。

それとも、と考えて初雪はピタッと静止した。

（あったッ!!　まさか教科書と一緒に置いてあるなんて……盲点でした）

こんなに堂々と置かれていると、逆に気づかない。

だが今はそんな事より、中身の確認である。

彼女は焦りを感じつつも、まずは写真集を開いて。

（――開いて、どうするのですか私は？）

開こうとした寸前、その手が止まる。

中身を確認して、己はどうしたいのだろうか。

この中身は本当に、教室で聞いたとおりの金髪ロリータなのだろう

か。
（もし、もし中身が本当で、これこそが吉久君の性癖だったら？）
怖い、手が震える、中身を確認するのが怖い。
想像したくないのに、想像してしまう。
悪い妄想が止まらない、彼を信じたいのに信じられなくなっていく。
（もし、……もし、もしも、本当に私の体に飽きていたのだとしたら）
そんな屈辱があるだろうか。
あれだけ犯しておいて、責め立てておいて、愛を囁いておいて。
（或いは、まだ、そうです、まだ私の心を折り陵辱する事を諦めていないという事だったら？）
一度解放した事も、彼女が責任を迫る事も、今こうしている事すらも彼の計算の内で。
徹底的に一条寺初雪という存在の心を、思う存分に貪り食らい尽くす。
あの頃の陵辱が、まだ続いているとしたら？
（違う、違う違う違う違う違うッ!! そんな事ないッ、絶対に、そうッ、私はッ、こんなぁ！ 嗚呼、絶対に吉久君はそんな事――――ッ）
手から写真集が滑り落ちる、自分で自分が制御出来ない。
それどころか、心が少しずつ壊れていくような感覚。
（嗚呼、やっぱり、私……もう、壊れてるんですね）
はらはらと涙がこぼれる、なのに口元は悦楽で歪んで。
認めたくない、屈辱が気持ち良いなんて。
認めたくない、裏切られるのすら嬉しいだなんて。
認めたくない、強引に犯されたがっている事を。
認めたくない、彼を憎悪している事を。
認めたくない、彼を愛している事を、許したい事を。
（なんて――矛盾、きっと私は吉久君に出会わなくても……普通の幸せなんて得られなかった）
今だからこそ確信できる、彼に出会わず他の男と結婚したとして

も。
きっと己は最後まで相手に心を開かず、開いていない事すら気づかずに老いて死んでいくだろう。
（だからきっと、お似合いなんです、吉久君と私は、出会うべくして出会った、だからきっと、私が自己矛盾で壊れていくのだって絶対の運命だったんです）
ハァ、と悲痛な叫びが込められた吐息が漏れる。
どうすれば良い、こんな自分は彼に愛されて何になるのだろうか。
壊れていく自分に悲しむ彼の顔は見たくない、それと同じぐらい、その悲しむ顔を望んでしまう。
（元の吉久君に、でも違う吉久君になって、私を心から求めてくれて、嬉しいんです、確かに嬉しいんです、――――でもッ）
幸せを感じれば感じる程、不安は強くなる。
愛を感じれば感じる程に、憎悪は増していく。
初雪の心は崩れていく、だからせめて、確かな何かがあれば。
（せめて何か、証が、私と吉久君の間に何か証があれば――――）
初雪は己の薬指のペアリングに、怖々と口づけして。
その光景を、吉久は後ろから見ていた。
（そうやってさ、何も言わず……君は僕の目の前で諦める気かい？）
彼女が壊れていく姿は美しいと思う、けれど同時に、それは何よりも悔しい事でもあって。
（君が嫌だと言っても、僕は君を諦めない。君が望まなくても君が壊れるのを止めてみせる。――どんな手を使ってでもね）
吉久は己の愚かさ加減に自嘲しながら、鎖のついた手枷を音もなく外す。
初雪の反乱を想定して、あの頃から既に練習していたのだ。
彼は彼女の背後に忍び寄ると、すかさず彼女の両手を拘束して。
「――――？　ぁ……」
「おはよう初雪、気持ちの良い朝だね」
瞳を濁られた彼女は、ノロノロと手枷と吉久を見比べて。
やさぐれた様に、そして何かを諦めた様に視線を外す。

「――――これが、貴方の答えなのですね」
「うんちょっと待ってね、話が見えないんだけど？」
「最初からこうして、私を快楽で性奴隷に堕とす事が目的だったのでしょう？　心を折る為に解放して、ペアリング希望を持たせておいて、こうしてまた鎖を付ける……、ふふッ、とんだピエロです私は」
「いや今日は君が先に僕の手にそれ付けたんだし、エロ本捜し当てたと思えば勝手に壊れそうになってて、困惑しかないんだけど??」
「……」
「……」
「くッ、なんて酷いヒトなんでしょう！　今度は私にどんなえっちな事をするつもりですか変態ッ!!」
「ねぇ初雪、君ってば何だかんだで浮かれてるよね？　さっきだって指輪にキスしてたしさ、今だってノリノリで服を脱ごうとしてるし」
　彼女の動きがピタと止まる、そしておもむろに服を直して正座し。
　真面目な顔で咳払いを一つ、手枷を吉久に見せると。
「常識的に考えてください、ペアリングで喜んでいる時に恋人の卑猥な本の存在を、しかも自分と正反対の女の子を性的対象にしているならば。不安にもなるし体だけが目当てだと思うでしょう」
「うーん……？　本当にそうなるの??」
「加えて、過去の貴方の行動を振り返ってみてください。――それでも同じ事が言えますか？」
「そう言われると厳しいけどね、どうやら誤解があるみたいだ」
　きっぱりと言い切った吉久に、初雪は鋭い視線を送る。
　この愛するクソ男は、いったいどんな言い訳をするのだろうか。
「ではお聞きしますが、誤解とは？　事と次第によっては私にも考えがあります」
「ははっ、怖いなぁ。まずエロ本の事だけどね、それはフェイクなんだ」
「フェイク？　誰に対する何の為の？」
「君に手を出す前の僕が、万が一にでも君に存在を気づかれた時に、何かの言い訳に使うためのフェイク」

「ではお聞きしますが、――私を犯す前の自慰の時に使う品は？」
嘘偽りは許さない、そんな気迫を見せる初雪に。
吉久は胸を張って答えた、今にいたって性事情を隠すなどと無意味な事はしない。
「はっきり言おう……君と出会う前は貧乏で家は狭いし兄弟と同じ部屋だしで……オナニーなんか殆どしてないんだ」
「では私と出逢った後は」
「そりゃ学園に入ってからは一人暮らしだし、週に一回はしてたけどね。勉強優先だったし、まぁ強いて言うならスレンダー巨乳の子のＡＶを貸して貰ってたって感じ？」
「――――ほう」
少しだけ初雪の声が弾んだ、スレンダー巨乳とは正に己の体型と合致する。
リップサービス、ご機嫌取りの可能性は捨てきれないが。
（ええ、自分の事ながら度し難い程に惚れてしまっていますね）
にんまりと口が嬉しさで歪み、どろりと憎しみの泉の水位が上がる。
「――ではお聞きしますが、私を解放した後はどうしていたのです？」
「オナニーしてなかったよ。だって君の体じゃないとイけないし。そもそもあの半年間でヤりまくってたから、セックスはもう一生いいかなって思ってたぐらいだし」
「合格ですッ！　しかし喜ぶのはまだ早いですよ吉久君」
「クネクネしながら怖い目で喜んでるのは君の方じゃない??」
首を傾げる吉久を無視して初雪は続けた、先ほどの問いより重要で、一番不安な事。
それは。
「……本当に私の体だけが目的じゃありませんね？」
「君の笑顔と心に惚れたんだ、だから例え汚してでも誰かに盗られる前に手にしたかったし。汚してもなお折れない心が好きで怖い。――体も欲しいってのは否定しないけどね男として、君はその美貌もスタイルも世界一だから。……でも」

「でも？」
「今は少し違う、君を愛したいと同じぐらいに汚したい、……いいや、こんな曖昧な言葉じゃダメだね」
　吉久の声色が変わる、あの頃のように初雪をしゃぶり尽くそうとしている貪欲なソレに変わる。
　敏感に察してしまった彼女は、背筋を期待と怒りで震わせ。
「――――聞きましょう、吉久君は愛する大切な私に何をしたいのです？」
「今はそのまま土下座させて、足を舐めさせたいな。僕はね、僕に陵辱された憎悪と愛する心で板挟みになっている君をさ、……壊れないようにバランスを取ろうと思ってるんだ」
「ッ!?　～～～～～ぁ、ッ、あ、貴方というヒトはッ!!　どの口でそれを言うのですか!!　貴方が私を壊したのでしょう??　貴方が私に愛を教えたのでしょう!!　拒否したと思えば、普通の恋人の様にしたいと希望を抱かせながら今度はまた私の心を陵辱しようと言うのですかッ!!」
　嗚呼、と初雪は怒りとも嬉しさともつかない吐息を出した。
　だってそうだろう、理解されている、愛するものに己の心を分かってもらえている。
　けれどその上で、彼は欲望のままに愛する相手へ屈辱を味あわせようとしているのだ。
　理不尽極まりない、サイコパスの所業だ、どうしてこんな存在を愛してしまったのだろうか、どうして失望する事が出来ないのだろうか。
　何より。
「心より先に体が堕ちていた事を思い出したかい？　悔しいだろう？　口ではそう言ってもさ、――君は土下座をしているじゃないか」
「ッ!!　だれがそうして欲しいと頼みましたッ!!　貴方が勝手に私にそうしたのですッ!!　もう戻れない、普通の幸せを享受できない体にしておいてッ!!　まだ満足出来ないのですか？　どこまで私を陵辱すれば気が済むのですッ!!　体も心も家も全て差し出すと言ってい

るのに、差し出しているのにッ!!」
深く土下座しながら怒号ををあげる初雪に、吉久はうっすらと微笑みながら言い放った。
「本当に心も差し出して堕ちてるならさ、そうやって怒鳴らないものだよ初雪。――――嗚呼、だから僕は君が好きなんだ。どれだけ汚しても君の気高い精神は折れることを許さない、理不尽な痛みを忘れず許さず憎悪を燃やす、……君の心の全てが、痛みも喜びを全てが僕に向く……そんな幸せが他にあるかい？」
（嗚呼～～～～～～ッ!!）
初雪は何も言えなかった、理解出来てしまうからだ。
（悔しいッ、悔しいですッ、どうして、どうして――ッ）
「ほら、認めなよ。君は根っからのマゾヒストなんだ、僕は君の素質を呼び覚ましたに過ぎない」
（違うッ、そんなの違いますッ!!）
「黙りかい？　でも心当たりがあるだろう？　だって体が先に堕ちているじゃないか。……君に今必要なのはさ、認めるコトだよ。マゾヒストだって、そしてその扱いに対して怒りと憎悪を覚えているコトを、自分自身の言葉で認めるコトなんだ」
吉久は確信していた、彼女はまだ己の憎悪を言葉に出さない事で無いものとして扱おうとしている事を。
（理解してるのかな初雪さんはさ、無理に忘れようとするから、否定しようとするから、心が壊れそうになってるって）
でもそうしてしまったのは、他ならぬ吉久自身だ。
だからこそ、彼女を踏みにじってでも憎悪を口に出させる。
そう決めたのだ。
「君の怒りは正しい怒りだ、その憎悪は何よりも正当な憎悪だ、誰にも犯すことの出来ない君だけの想いだ。――さ、言葉にしてみてよ。」
（私はッ、わた、わたし、わたしは……ッ!!）
悔しくて悔しくて、殺したいほど悔しいのに。
それと同じぐらい嬉しい、愛を感じてしまっている。
何より、体は絶頂寸前まで上り詰めるぐらい快楽を感じていて。

「……」
吉久は右足を彼女の顔の前に出すと、そのまま無言で見下ろす。
その姿を感じ取って、初雪の心は暖かく、しかしどす黒く染まっていく。
長い長い躊躇いのあと、彼女は全身を震わせながら。
「殺してやるッ、いつか貴方を殺しますッ、この屈辱、怒り、絶対に絶対に許しませんッ!!　言えば良いんでしょう？　言いますよッ、私、一条寺初雪は吉久君の恋人であり救いようのないマゾヒストですッ、どうか、どうか貴方の足を舐めさせてくださいませ～～～～ッ!!」
「許可する、でも時間がかかった罰として今日はセックスをしないよ。精々、明日可愛がって貰えるように丁寧に愛情を籠めて舐めたらどうだい？」
「――～～～～……ッ、今から、舐めさせて頂きます」
ぴちゃぴちゃと水音がする、くすぐったい感触が足先から伝わる。
愛する女性が屈辱にまみれながら己の足を舐める、その行為に、光景に、吉久は実に満足そうに微笑んだ。
（これで、少しは壊れるのがマシになれば良いけどなぁ……）
（酷い……なんて酷いヒトなんでしょう吉久君……、ここまでさせておいて、セックスしないなんて）
（――ところでコレ、何時までさせておけば良いのかな??　そろそろお腹減って来たんだけど？　朝ご飯食べたいなぁ……）
（こんな体が疼いてセックス無しなんて……嗚呼、屈辱です子猫みたいに、母親の母乳を求める赤子の様に……赤子、……そうです、赤ちゃん）
その時、初雪の脳に稲妻が走った。
なんという名案、二人の絆の最たる物。
それは。
（――――赤ちゃん、欲しいです）
子を孕めば、産んでしまえば。
吉久はもう絶対に何処にもいかない、その心と体の全てを縛り付ける事が出来るはずだ。

優しくて暖かい家庭という夢を、叶えてくれる筈だ。
（赤ちゃん……ふふッ、うふふふふふふッ）
初雪は幸せな妄想をしながら屈辱を感じ、そして吉久は何故か悪寒を感じたのであった。

がぶがぶ／２１　たまごとひよこ

あれ数日、初雪の感情は安定している様に見えた。
だがそれは表面上に過ぎない事を、吉久は知っている。
だってそうだ、あの日の翌日から。
（……またかよっ!?　いやプレッシャーだよこれっ!?　直接言ってこない分、すっごい質が悪いよねこれっ!?）
彼は今、ある嫌がらせに悩んでおり。
（直接聞いても笑って誤魔化すだけだしさぁ……、その割には僕の机にも置いてあるし、というか一緒に登校してるのに何時仕込んでるのさコレっ!?）
教室の机の中に入っていた物、それは本。
エロ本ではない、しかし人生において家庭を持つならば一度は読むだろうそれ。
（たまごとひよこぉ!!　いやたまごは兎も角、ひよこは早いんじゃないの!?　たまごも早いと思うけどさぁ!!）
そう、リビングや玄関、ふとした所に置いてあるのだ。
まるで吉久に子供が欲しいと催促するように、否、催促しているのだろう。
だが貧乏学生という以上、現在の彼に出産費用も養育費も稼げるだけの何かは無く、また貯蓄もゼロに近い。
「どうしろって言うのさ……」
「はい？」「うん？」
被さった声に首を傾げ、思わず隣を見ると。
そこには、同じくたまごとひよこの雑誌を机から出している紗楽が。
吉久は非常にシンパシーを感じながら、自分も同じ本を出して。
「君もか紗楽……」
「お互い独占欲の強い恋人を持ってさ、大変だねよっしー……」
「少し前からさぁ、無言でプレッシャーかけてくるんだよ」

「ボクもさ、後ろから抱きしめられてお腹を撫でて来てさ、子供は何人欲しいって囁かれてる。しかも昨日の放課後デートでは赤ちゃん用品を一緒に見た、ボクはまだ妊娠すらしてないのに」
「それなら僕は、ニッコニコの笑顔でコンドームに穴を開けてる姿を見た。だからセックス拒否しといたけどさ」
「……」
　無言で見つめ合う二人、その表情はお互いへの同情心が溢れ出て。
　吉久と紗楽、友情全開で両手を広げ抱きしめあう。
「友よおおおおおおおおっ!!　苦労してるんだね君も!!　そうだよね僕達ってまだ学生だし何なら受験もあるし、なんで今、子供なんだよぉ!!」
「分かるっ、分かるよ友よ!!　ボクだって受験あるし、そもそも結婚だって大学卒業後が良いし！　いや子供が欲しい気持ちは分かるけど今じゃないと思うんだよっ!!」
「だよねだよねっ!!　しかも何か新居の相談とかしてくるんだよ？　子供部屋は幾つ必要でしょうかとかさぁ!!　いや必要だしいつかは考える事だろうけどぉ!!」
「分かるっ、分かるよっ、キミも苦労してるんだねよっしー!!」
　何時にもまして意気投合する二人の姿に、ちらほらと登校してきたクラスメイト達は。
　同情的な顔をするも、知らぬ顔。
　特に恋人持ちにとっては他人事ではなく、恋人が居ない者にとっても理解できる苦悩であったからだ。
「ああ、友情に浸りながらもっと語り合いたいけどさ……」
「そうだねよっしー、ボクらには優先しなきゃいけない事がある」
　即ち。
「「どう説得するか、だ」」
　意見は合致した、だが問題は正にどう説得するかだ。
　恋人が不安や独占欲に駆られて、確かな繋がりとして子供を欲しがっている事は理解できる。
　だが、あまりに説得材料は少ない。

「金銭的な事で攻めても、初雪はお嬢様だしなぁ……。お金も出産後のフォローや育児も、何とかなるんだよなぁ……」
「そうなんだよ、カネくんもさぁ。御曹司だからなぁ……、一般的な問題が問題じゃないんだよね」
「ああ、誰か僕ら以外に一緒に住んでくれる人が居たらなぁ……、第三者が居たら、少しぐらい自重してくれると思うんだけど」
「――――なるほど？　それならシェアハウスするかい？　ボクらとキミらでさ」
　おや？　と同時に目が点になった。
　深く考えずに出された言葉であったが、思った以上に効果的な案かもしれない。
「……もし一緒に住むなら、僕が兼嗣を押さえられる、同じ男としてね」
「ボクは初雪嬢を押さえてみせる、同じ女性としてね」
「提案する価値はある、か……」
「二人だけだと暴走するけど、もう一組の恋人達がいるなら反面教師にも手本にもなれる」
　そう上手く事が運ぶ保証は無い、だが賭けてみる価値はある。
（初雪のストレスが溜まって爆発する可能性だって勿論あるさ、でも……皆で共同生活するっていう〝普通〟以上とも言える青春がさ、心を癒してくれるかもしれない）
　きっと彼女は吉久との二人っきりでの生活を望むだろうし、強硬に反対するだろう。
　でも、それでは彼女の世界が狭まっていくだけだ。
　世界さえも変えてしまう様な何かが起きなければ、お互いに自滅していってしまう。
（分かってる……今の状態が一時凌ぎにしかなってない事をさ）
　初雪の心は愛と憎悪で破裂寸前だ、それを何とか口に出させて僅かな延命をしているだけだ。
　彼女は絶対に吉久から受けた陵辱の痛みを忘れない、そして同時に愛しているのに憎んでいる自分を受け入れる事が出来ない。

――少なくとも、今のままでは。
「どうしたんだい、いきなり黙り込んでさ。初雪嬢の事がそんなに恋しいかい？」
「そんな所だね、じゃあ細かい話を詰めようじゃないか。僕らが一緒に暮らす話をね」
そう吉久が笑った瞬間であった、
背後から冷え冷えと、そして刺々しい空気が流れてきたと思えば。
「へぇ、興味深い話っすねクソ男先輩？　俺の紗楽とどうするって？」
「是非、お聞かせ願えますかお二人とも。――親友二人で同棲？　その様に聞こえましたが……、裏切るおつもりです？」
「ふぁっ!?　は、初雪っ!?」
「カネくんっ!?　いったい何時から聞いていたんだいっ!?」
「どっからでしょうねぇ～～、今の俺に理解できる事は、クソ男先輩と紗楽が浮気してるんじゃないかって事ですかね？　ははッ、もしかして俺はとんだピエロでしたか？　……俺を捨てるなんて許さないですよ」
「ねぇ吉久君？　ちょっと二人っきりで、鍵のある部屋でじっくりお話がしたい気分なんです。――勿論、いつ出られるかは私次第ですが」
（なんか凄い誤解されてるうううううううううううううっ!?　ど、どうするっ!?　いや正直に言えば分かってくれる筈だっ、そ、そうだよな？　そうだよねっ）
ここは協力して、お互いの恋人を宥めるべきだ。
吉久は紗楽にアイコンタクトを送るが、返ってきたのは。
「（ここは一度撤退だよっしーっ!!　時間を置いて冷静になるのを待つんだ!!）」
「（分かったよ親友！　キミの提案に乗ろう！　僕も今の状態で説得出来るか不安だったんだ!!）」
「は？　目と目だけで分かり合ってるんですかねクソ男先輩？　かってに紗楽とそんな事をしないでくれます??」
「私を差し置いて……紗楽も、そして何より吉久君も……良い度

胸をしていますね」
　お互いの恋人は導火線に火がつくどころか、爆発寸前だ。
　紗楽と吉久は青い顔で頷きあうと、足に力を貯めて。
「うおおおおおおおおおっ！　自由への脱出だ!!　すまない初雪!!
また冷静になってから、具体的には夜にでも会おう!!　マジで誤解だから!!　本当に誤解だから!!」
「ちょっとカネくん、キミに冷静になる時間が必要だと思うんだ!!
だから今は逃げさせて貰う！　言っておくけど誤解だからな、本当に誤解だからな！」
「ッ!?　しまった紗楽っ!?」
「きゃッ、吉久君ッ!?」
　二人は脇目もふらず猛烈に走り出す、逃げるが勝ちという言葉がある。
　だからこれは敗北ではない、決して嫉妬や独占欲で嫉妬が怖いからではない。
「ぬおおおおおおおおおっ、とっ、所でシャラっ!?　僕ら何処へ逃げたら良いと思うっ!?」
「ボクに案がある――――よし今手配したっ、裏門にタクシーが五分後っ!!　それまで学園内を逃げ回る!!」
「そうと決まれば校舎の外だっ！　まずは表門に行くと見せかけて二手に分かれて教会で合流！　その後は散開と合流を繰り返しながらジワジワと裏門へ行くっ、僕も協力してくれそうな人に呼びかけるから――――」
　二人はその後、何とか時間を稼ぎタクシーに乗り込んで。
「待ってました!!　これで助かるよ!!　早く出してください!!」
「ああ運転手さん、事前に言った通りに駅へ行って欲しい」
　ドアが閉まり、ほっと一息をいきたい所であったが。
　吉久は致命的なある事に気づき、苦虫を噛み潰した顔で問いかけた。
「……いやちょっと待ってシャラ？　何でキミってばガスマスクしてるの??」

「違うねよっしー、良く見るんだ運転手さんもだろう？」
「あ、ホントだ。じゃあもう一つ聞いて良いかな？」
「何でも聞いてくれ親友」
「何かガスが出てきてるしさ、ドアが開かないし、車のエンジンは掛かってないし、外では初雪さんが満足そうに笑ってて、兼嗣がすまんって感じで手を合わせてるんだけど⁇」
「――――子供の名前の案は、ボクらも考えて初雪嬢へ出しておく」
「くっ、謀ったねシャラっ⁉　僕をこの年でパパにするつもりかっ⁉
そ、そんな――――がくっ……」
眠りに落ちた吉久に、紗楽は申し訳なさそうに両手を合わせて。
「すまない親友……、こうもしないとカネくんと卒業前に結婚決定で大学に行けなくなるんだよ……親友を売り飛ばしたボクを後で責めてくれ‼」
そう、全ては罠だったのだ。
次に彼が目を覚ました時、そこは見知らぬ和室の座敷牢の中で。
「目が覚めたかね婿殿？」
「――――……あ、え、っ⁉　り、理事長っ⁉」
「ようこそ婿殿、我が一族の屋敷へ」
牢の外では、彼女の父である一条寺吹雪が申し訳なさそうな顔で笑って立っていたのであった。

がぶがぶ／２２　セックスしても出れない部屋

――時は少し遡る。
吉久との子供が欲しいと、無理矢理にでも孕む事を決意した初雪であったが。
（仕込みは上々、ええ、不思議と心躍ってきた気がしますね）
拉致監禁を気取られぬ様に、たまごとひよこを目の付く所に置きアピール。
楽しい、今、実に楽しいのだ。
（私は……変わって、いえ違います。多分、これが本当の私に近いのでしょう）
過激さを取り戻した吉久に、屈辱の足舐めをさせられた時。
彼女は、己が以前の自分と違う事を自覚した。
今なら分かる、自分はマゾヒストだと。
抗い、その上で蹂躙されるのを悦びとする人種である、と。
（憎悪を口にするだけで――嗚呼、こんなにも愉しいだなんて）
理解できてしまった、一条寺初雪という人間は己を偽ることの出来ない不器用な人間であったと。
だってそうだ、吉久の事がこんなにも愛おしいのに。
気が狂いそうな程、憎んでいる。
（そう遠くない内に……私は狂うのでしょうね）
愛も、憎悪も偽れない。
そして同時に〝普通〟の幸せを求めている。
だから、愛する者に憎悪する自分自身を許せない。
だから、陵辱者を愛する自分自身を許せない。
（私の心は削れていく、愛する相手を憎むことで正気を削られていく、――でも、それがとても愉しい）
破滅を望んでいる訳じゃない、でも破滅しても良いと思っている。
正気を失って、自分はどうなるのだろうか。

愛を求めるだけの浅ましい生物になるのか、それとも憎しみに刃を向ける哀れな復讐鬼になるのか。
（信じています、吉久君……貴方なら、私に温もりと愛を与え、愛する事を教え、そして私の本質すら呼び覚ました卑怯で卑劣で鬼畜で外道で、世界の何よりも頼りになる私だけの強引な王子様）
今の初雪に、吉久への揺らぎは存在しない。
心の底から信じているからだ、吉久ならどう転ぼうとも何とかしてくると。
（嗚呼、壊れてしまった私を見て。貴方は何を想い、何をしてくれるのでしょうか……それとも思いも寄らぬ方法で私を助けてくれるのでしょうか。ふふッ、あはははははッ、愉しみですッ、楽しみなんですッ!!）
信じている、だから初雪は心の赴くままに行動するのだ。
（赤ちゃん……授かれるでしょうか。それとも、私を屈服させオアズケするのでしょうか……どちらでも良い、良いんですよ吉久君。もっと、もっと私に貴方の輝きを見せてくださいッ!!）
斯くして、拉致監禁は決行された。
それ故に、彼女の変化に気が付かなかった吉久は今。
困惑と危機感の中、彼女の父・一条寺吹雪と柵越しに対面し。
「えっと……今、我が屋敷とかそんな言葉を聞いた気がするんですけど??」
「安心しなさい婿殿、君の耳は正常だ」
「この状況は異常ですよね??　なんで拉致監禁……監禁ですよねコレ？」
「ああ、懐かしいなぁ……この座敷牢をまた見る事になるとは。あれはそう、結婚前の妻が押し掛けてきて家中の者を全員の心を掌握した挙げ句、絶対に孕むと逆レイプして来た時以来か……」
「ちょっと義父さんっ!?　娘さんの教育失敗してませんっ!?　少しでも罪悪感を覚えるならここから出してくださいよっ!!」
ここに留まったら目の前の義父の二の舞になる、危機感を募らせる吉久に。

彼はもっともらしく頷き、お茶目にウインクを一つ。
「すまない、教育の為の金を出した覚えはあるが育てた覚えはないんだよこれがね。父親失格と罵って良いが――君にその資格があるのかね？　我が娘が美しすぎるから強引に奪ったのだろう??」
「万が一、孫が出来ても抱っこさせませんよ?」
「何っ!?　それは卑怯だぞ婿殿っ!?　孫を理由に土下座して許して貰おうと思っているのにっ!!」
「残念ながら、現状のままでは無理ですねそれ。だって僕ですら憎まれてますから、同棲するまで知らなかったんですけど初雪って受けた屈辱や不義理とか忘れないタイプなんですよ」
「それは……妻の血だなぁ。うんうん、私に似た子に育たなくてなによりだ。――――所で物は相談なのだが、何とかならんかね？　いや、我ながら最低な父だと思ってるんだ。だがな……我が子が嫁に行くとなると、こうな？　思うところがあるだろう、後悔とか祝福の気持ちとかな?」
ここだ、と吉久は確信した。
義父を完全な味方にするなら、今しかない。
「この檻から出れて、無事に何とかなったら初雪と少しぐらいは関係を修繕できる冴えたやり方を教えます」
「ほう！　あるのかね!!」
「勿論ですよも義父さん!!」
なお、その方法とは愛を叫びながら土下座して許しを請うだけである。
単純明快、だが初雪が〝言葉にしない想いは存在しない〟という信条の持ち主である以上。
本当に少しぐらいは、関係が改善される筈だ。
「うーむ、しかし困ったなぁ……君を出してやりたいのは山々だが問題があるのだ」
「言ってください義父さん、協力しあいましょう!!」
「君を座敷牢から出せば、例の男の娘の風俗店に働きかけて腹上死させると言われてるんだ」

「じゃあ何で僕に会いに来たんですか??」
「それはな、――――生まれてくる子供の名前のリクエストを聞きに来たのだよっ!!」
「なんで義父さんが決めようとしてるんですか!!　というかそんなの考えてる暇があったら初雪と親子の会話でもして来てくださいよ!!」
役に立たない、という言葉を飲み込んで吉久は叫んだ。
駄目だ、義父を味方につけても状況は好転しない。
（考えろ、考えるんだ僕!!　なんで初雪は拉致監禁した？　子供が欲しいってどこまで本心なんだ？　幸い力では僕の方が――――あ）
やべ、と吉久は固まる。
思い出してしまった、彼女が護身術の有段者で体育の成績も優秀。
あの細身で細腕で、実は吉久より力が強い事を。
「ふむ、どうやら自分が詰んでいる事に気づいたかな婿殿よ。懐かしい……実に親近感が湧くんだ、まるで昔の私を見ているようだよ。嗚呼、君になら一条寺家も、初雪を任せられる。――では頼んだぞ婿殿!!　見つかったら怒られるから私は自室に戻るからな!!」
「うわ早っ!?　せ、せめてもしもの為にも医者の手配しといてくださいマジでっ!!　僕、まだ死にたくなーーーーーいっ!!」
義父は任せておけと言わんばかりにサムズアップして去っていく、ならば必然的に吉久は一人取り残され。
「くっ、どうするっ、どうにかして逃げなきゃ……いや逃げ出すのは悪手。初雪の真意が見えない以上、下手に動くのは危険だ。でも座敷牢は不味い、時間稼ぎも出来ない――――」
何かないのかと必死な顔でポケットを探っても、何も出てこない。
どうやら、スマホと財布は取り上げられている様だ。
（くそっ、せめてウチの制服がブレザーだったらネクタイがあるのに!!）
残念ながら、聖アングレカム学園の男子制服は学ランだ。
武器になりそうな物、時間稼ぎに使えそうな物は何も無く。
「――――いや、違う、そうだまだ僕には」
慌てて腰を確認すると、そこにはベルトがあった。

そう、ベルトだ。
紐状の物があるなら、道は見えてくる。
「上手くやれば牢の格子を壊せるかもしれない、なんかこう梃子の原理とかそんな感じのマンガとかで見るアレでっ!!」
だが今すぐ試すのか、いつ初雪が来るか分からない状況で。
「――――違う、そうじゃない、脱出に使うんじゃない」
追いつめられた吉久の脳が、一つの答えを導き出した。
「これを使って、先制パンチをする。……くくっ、僕に時間を与えた事を後悔すると良いよ初雪。あははははっ!! ――――嗚呼、そうだね、僕は、……君を信じてるっ!」
そうして吉久は準備をし、初雪の姿が見えた途端それを決行。
「起きていますか吉久く――――ッ!? な、何してるんですか貴方はッ!? い、今すぐ助けに～～～～ッ!!」
座敷牢の前、彼女が見た光景は。
ベルトで首吊りをした吉久の姿であった。

がぶがぶ／２３　狭間の歌

四つん這いになり咳込む吉久の前で、襦袢姿の初雪は仁王立ちをして怒鳴った。
「貴方はいったい何を考えているんですかッ!!　ふざけるなッ!!　当てつけですか?　さぞや楽しいのでしょうね私の目の前で死のうとするなんて!!」
「――――ごほっ、ごほっ、んぐ、んぐっ、あぐーー……、ふぅ、苦しかった。マジで死ぬかと想ったよ。で?　どう?　今どんな気持ち?　手に入ったと思った瞬間に指の隙間からこぼれ落ちそうになった気分はどうだい??」
「～～～～～～～ッ!!　この外道!!　畜生!!　鬼畜!!　信じられません!!」
慌てて吉久を救出し、そしてこの言い草である。
明確な煽りに、初雪はわなわなと肩を怒りで震わせて。
「貴方は私を煽る為だけに自殺紛いの事をしたのですかッ!?　本当に死んでしまったらどうするのですッ!!」
「君が絶対に助けてくれるって確信してた、もし間に合わなかったとしてもさ、――後を追ってくれるよね初雪?」
「それとこれとは話が違います、これから確実に孕むまで子作りセックスと思いましたがお説教の時間です」
「あ、正座するのね。よいしょっと……ちなみに聞くけど、孕んだらこの座敷牢から出られるの?」
「え?　冗談が上手いですね吉久君。そんなの出れないに決まっているでしょう」
本気の目をする初雪に、吉久はうーんと首を傾げた。
「まさか君、本当に子供を作る為だけに僕を拉致監禁してるの?」
「半分はそうですね」
「残りの半分は?」
すると初雪は口元をニィと釣り上げて、実に愉しそうに嗤う。

吉久の危険関知センサーが、敏感に反応して。
「――私、気づいてしまったんです」
「何を」
「どうしたって私の憎しみは消えない、晴れない、晴らすことなど出来ない、でも貴方をどうしようもなく愛している。……その板挟みで欲望が我慢できなくなっている事に」
「それで子供が欲しくなったの？」
「愛とは不思議な物ですね、幾ら貴方に愛してると言われ確信しても、貴方に愛が通じていると信じていても……不安が沸いてくるのです。もし貴方が私以上の人を見つけたら、私を捨てて、あの時みたいにその誰かを襲いに行くんじゃないかって」
「……僕との確かな繋がりが欲しかった」
こくり、彼女は静かに頷く。
はらはらと涙を流しながら、向かい合う彼の頬に両手を添えて。
銀色の髪が縁側から差し込む夕焼け色に染まる、とても絵になる光景であったが。
「悪いけどね、君の思い通りにはいかせないよ」
「ええ、むしろ望む所です。貴方はそうでなくてはいけません」
「はい??」
「吉久君は私に負ける吉久君じゃないんです、信じています貴方が私をどんな手を使ってでも陵辱し、敗北という屈辱を、快楽という屈辱を、愛という屈辱を与えてくれる人だって――――」
「ちょ、ちょっとっ!?」
「だから首を吊った貴方はとても腹立たしくて――――嗚呼、なんて嬉しかった事かッ!! だって貴方は全身全霊で私の愛でさえも蹂躙しようとしているッ!! 嗚呼、憎いッ、憎いんです吉久君!! そんな貴方が憎くて……とっても愛おしいッ!! もっと早く気づくべきでした、いいえいいえ、貴方が目覚めさせたんですッ!!」
「怖い怖い怖いっ、そんでもって顔近っ!?」
息のかかる距離まで詰め寄り、初雪は熱情をぶちまける。
「ありがとうございますッ、本当にありがとうございます吉久君ッ!!

嗚呼ッ、嗚呼ッ！　嗚呼ッ!!　壊れていくのが愉しいんですッ、それで苦しむ貴方が、私を助けようとしてくれる貴方がッ!!　なんで無様で哀れで、そして期待してしまうんです、――――吉久君なら、壊れた私でも大事にして手放さないって、……絶対に助けてくれるって」

「……なるほどねぇ」

ヤバい、これはヤバいと、もはや手遅れ最初のボタンを自ら掛け違った吉久には彼女を救う資格も手段も無い。

しかし同時に歓喜した、己は期待されている、助けを求められている。

どうしよもない存在でも、愛する誰かを救えるのかもと期待してしまう。

「嗚呼、――君の口からさ、初めて助けてって聞いた気がするよ」

「助けてください、愛してください、……苦しいんです、怖いんです、貴方に憎悪だけを向けてしまう未来が、愛という欲望のままに貴方を壊そうとしている今が、怖い、怖いのです吉久君。――――助けて」

嬉しかった、こんな日が来るなんて思いもしなかった。

一条寺初雪という存在は吉久にとって完璧で、完全で、決して折れず屈せず、輝かしい慈愛の心を持っている女神。

だから。

（ごめんね、僕が存在しなければ君は完璧で居られたのに……）

でも。

（本当に罪深い、僕はさ……壊れていく君が美しいって思うんだ、救いを求められ、縋られて、嬉しいし愉しいって思うんだよ）

だからこそ。

「――――ごめんね初雪、僕は君を絶対に救わないよ」

「は??」

にこやかに出された台詞に、思わず初雪の涙が止まった。

違う、これは違う。

なんというか求めてた物と違う、もっと、もっとこう。

「そこは、絶対に救うの間違いではありませんか？」

「いやあってる、僕は君を救わないし、子供だって絶対に作らない」
「あー……ちょっと耳が変になった様です。もう一度仰ってください ませんか？」
「君を救わないし、楽になんてさせないよ。――君がそうさせたんだよ？　僕を欲望に素直にさせたんだ」
「――――では、どうするおつもりですか？」
「そうだなぁ……折角だしさ、本格的にアナル調教しようか。前の穴なんて絶対に使わない、そうだ絶対に絶頂させないってのも追加しよう」
「吉久君ッ!!」
「だってこんな機会、もう二度と来ないと思わない？　壊れゆき正気を失いつつある聖女様、その助けを求める手を振り払って――正気のまま絶望に堕とすって。今度こそ僕はさ、君の心まで陵辱し尽くそうと思うんだ」
「ぁッ、はあああああああああ～～～～ッ!?」
　あまりにあまりな言葉で、初雪の心に純粋な怒りが沸いてくる。
　どうしてくれようか、どうしてこの男は自分の目論見をいとも簡単に粉砕して斜め下に行くのか。
「ふざけないでくださいッ!!　何を考えているんですかッ!!　学園一番の美少女で心清らかな聖女とも呼ばれ女としての価値の高い私がッ!!　こうも頼んで縋っているんですよ??　この自慢のスタイルだって今後も好き放題できるんですよ?　しかも真実の愛もお金も地位も付いてくるんですよ??　どうして救うって、或いは壊すって言わないんですか!!」
「あ、やっぱ自分に自信があったんだね君。そして恵まれている自覚もある。――精神的なモノを除いては」
「冷静に分析しないでくださいッ!!　ああもうッ、こうなったら力付くでも――ふぎぃッ!?　は、はぁッ!?　殴りましたッ!?　今、私を殴りましたか!?」
　涙目で額を押さえる初雪は、憎しみに燃える瞳を揺らめかしながら立ち上がって。

吉久もまた、くつくつと嗤いながら立ち上がる。
「ああ、ごめんね？　手加減しないと面白くないだろう？　適度な抵抗って燃えるんだよ。だって君さ、キスしたり乳首抓っただけで僕の言いなりになる体だろう？　それじゃあ踏みにじり甲斐がないじゃないか」
「私を甘く見た事を後悔しないでくださいましッ!!　体育の成績は私の方が上ですし護身術だって習ってるんです!!」
「襦袢姿で何処までそれが発揮できるのか見物だね、ああ、右手を封印しようか？」
「そういって、ここぞという時に右手を使うのでしょう？　遠慮はしません、――――黙ってパパになりなさい!!」
「アナル狂いの聖女様って素敵なワードだと思うんだよッ!!」
そして、二人のステゴロバトルが始まった。

がぶがぶ／２４　プリーズ・キル・ミー

「はッ!!　ご大層な口を聞いた割にはそんな程度ですかッ!!　ほらッ!!　ほらァッ!!　ちょっとは反撃してくれないと退屈じゃないですかッ!!」
「ッ、ぁ、ガッ、こ、このっ!!　僕だってなぁ――――っ、ああもうっ、いや君ステゴロ強く過ぎないっ!?」
たかが細腕の女の子一人、何とかなると思っていたのは確かだ。
だが現実は違う、吉久は初雪に圧倒されていた。
（掴みかかれば投げられてさぁ!!　殴っては回避されて、蹴ったら受け止められた挙げ句転ばされるって、実力差ありすぎないっ!?）
なんとか打撃に耐えてパンチを入れても、元の鍛え方が違う。
受け止められ、受け流され、まともに拳が入らない。
一度だけ顔面狙いが成功したと思えば、初雪の口元が少し切れただけ。
（勝機が見えない!?　やっぱベルト……僕に残された唯一の武器!!
今は初雪の背後に落ちてるけど、それを何とか拾えれば――）
しかし、その事を彼女も理解しているのだろう。
吉久が取りに行けない位置取りを崩さず、この分だと強引に行っても無理だろう。
（……片腕を犠牲に、いやでも、そういう素振りを見せただけで初雪が先に拾うかもしれない）
隙が欲しい、彼女の注意を反らす何かが。
時間は吉久にとって味方だ、この戦いが長引けば長引くほど利益が出る。
（やっぱり口で何とかするしかないか、怒らせるか戸惑わせるか、宥め賺す……うーん、どうしよう）
拳を握り闘志と構えはそのままに、ジリジリと距離を保ちながら考える吉久。
そんな彼を見て、初雪は悲しそうに構えを解く。

カウンターを誘われているのか、彼は判断を下すためにニヤと笑って。
「もう終わりかい？　そんなにアナル狂いにされたいの??　ははっ、もっと僕に君の心を見せてくれ!!　伝わってくるんだ君の拳の一つ一つに!!　さぁさぁさぁ!!　もっと感情を露わにして僕と戦えっ!!」
「――――もう、止めましょう吉久君」
「冗談だろ？　もっと抵抗してくれよ、僕は君を組み伏せて支配する快楽が欲しいんだ」
「嗚呼、憎たらしい程に酷いヒト……、そうやって私の憎しみを呼び覚まし暴力を振るわせる事でガス抜きをしているのでしょう？」
「……それ、は」
見抜かれていると、吉久は思わず動揺した。
だがそれがどうした、目的が達成できれば勝ち。
二人の関係は、もっと先に進める筈で。
だが。
「もう……もう止めて、止めましょう、止めてください、貴方が壊れてしまう、壊してしまう、いいえ私が壊れてしまう」
「例え僕が壊れても、君の壊れていく姿が見たいんだ」
「～～～～ッ!!　お願いですッ!!　もう貴方を傷つけたくないんですッ、自分でも分かるんです吉久君を殴る度に憎しみは少しだけ軽くなる」
「軽くなるなら――」
「――違いますッ!!　ただ憎しみが軽くなるならもっと貴方を殴りましょう!!　でも、でも!!　削れていくのです私の正気が、こんなものは愛ではないと、貴方を愛する資格なんてないと私が私を責めるのですッ!!」
ぁ、と小さな声が吉久から漏れた。
ぐらりと視界が歪んだような感覚、己はなんという事を見逃していた。
否、見て見ぬフリをしていたのだ。
彼女は真っ当な精神の持ち主だ、〝普通〟の幸せを夢見ている、

拘っている、だからこそ苦しんでいるのに。
（ごめん、なんて言えるわけが無いっ!!）
吉久は彼女を踏みにじっても幸せにする道を選んだのだ、他の道を選べない、妥協なんてしたくない諦めたくない。
彼女の幸せを踏みにじって今があるからこそ、決して諦めてはいけないから。
（でも、……初雪は苦しんでいるんだよっ!!）
悔しそうに黙り込む吉久にそっと近寄ると、初雪は彼の右手を両手で包み込み懇願した。
「殺してください、お願いです、もう、もう――私は自分で自分が分からないんです、貴方の子供が欲しい、でもそれは貴方の愛が欲しいからじゃない、幸せになりたいからじゃない、見ないフリをしていたんです……私は、私の正気を保つ為の何かが欲しかったんです」
「っ！　い、言うなっ、そんなコト言わないでくれ初雪!!」
「聞いてください、吉久君、聞いて、聞いてください……きっと、私はあの時に終わっていたんです。貴方にウェディングドレスで抱かれた時に、私は全ての願いが叶ってしまっていたんです、それが貴方にとって歪で、私にとっても歪でも、それでも、幸せだったのです」
「違うっ、違う違う違う違うっ!!　違うんだ初雪っ!!」
力なく首を横に振る彼の姿に、初雪は静かに告げる。
泣きそうな声で、吉久をまっすぐに見つめて。
「いいえ、違いません。貴方から与えられるだけの愛に溺れ、性欲に流され、未来を諦めたあの時に私は終わってしまっていたんです。だから、だから――――貴方と手と手を取り合って生きていく未来なんて、その資格なんて、最初から無かったんですよ」
「そんなの思いこみだっ!!　僕らはまだ付き合い始めたばっかりだし同棲だって始めたばっかりだっ！　まだまだ思い出だって、普通の幸せだってさぁっ!!」
「ふふっ、酷いヒト……本当に鬼畜なヒトですね吉久君。中途半場な優しさで、中途半場な希望を見せて、勘違いしてしまいました。……貴方を正面から愛せないのに〝普通〟の恋人達みたいに愛せるって、

そう錯覚してしまった」
「錯覚じゃないっ、君が諦めなければっ、僕が努力すれば出来る筈なんだよっ!!」
「でも――もう耐えられない。私はもう耐えられないんです」
日が沈む、初雪の後ろで落ちていく。
世界が終わっていく感覚がする、今までの世界が全て嘘だったような、手遅れ、その三文字が頭に染み着いて離れない。
硬直する吉久に、初雪は鈴の音が鳴るような声を出して。
「ごめんなさい、私の望み通りに愛欲をぶつける貴方になってくれたのに」
「僕はっ、……僕はっ!!」
「ごめんなさい、諦めてしまって、貴方に聖女という幻想を見せてしまって」
「違うっ、なんで君が謝るんだよっ!!」
「嗚呼、――あの時、最初に貴方に呼び出された時、あの手紙通りにデートのお誘いが本当だったら良かったのに……」
「――――っ、ぁ～～～～～～～～～～～～～～!!」
吉久は声無き慟哭をあげた、因果応報、全てが返ってきたのだ。
壊したいけれど、壊したくなかった。――だから解放した。
けれど、全て壊れていたのだ。
見ないフリをしていただけで、全て、そう全てが壊れていたのだ。
(もう……駄目なのか？　本当に、もう駄目なのか？)
何も言えなくなった吉久に、初雪はそっとキスをすると。
襦袢を脱ぎ捨てて裸になる。
夜の闇の中、星明かりが銀髪を幻想的に浮かび上がらせる。
彼女の裸体の線を、うっすらと描く。
「もう……どうなったって良いんです。だから最後まで愛してください。吉久君の望むがまま受け入れます、貴方の恋人として、妻として従順に振る舞います、望むなら抵抗だってします、だから、だから――今度こそ本当に、私を貴方の愛を受け入れるだけの性人形に堕としてください」

受け入れられない、そんな事、どうしたって受け入れる事が出来ない。
唇を噛みしめて今にも泣きそうな吉久に、初雪は虚ろな瞳で華やかに微笑んでみせる。
「そうでないのなら、……殺してください、貴方の手で殺して、私を終わらせてください」
その言葉に、吉久は昏倒しそうになった。

がぶがぶ／２５　手詰まり

「〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜ぁ!!」
「……」
初雪を強く抱きしめ、吉久は叫んでいた。
だが余りに悲しみが強いからだろうか、声に音はなく。
掠れた呻き声だけが、ただ響いて。
（ありがとう、吉久君）
温もりを痛いほどに、早鐘を打つ彼の鼓動を甘く感じながら彼女は今、感謝していた。
（今ここで、貴方に抱きしめられて終われるなんて、嗚呼……なんて、良い人生だったのでしょう）
きっと産まれる前からこのヒトと、そうする運命が決まっていたのだとすら考えてしまう。
（誰かに愛されながら死ねる……、ふふッ、思いもしませんでした）
愛を知らずに育った己は、誰も愛せずに、誰からも愛されずに死ぬのだと当然のように思っていた。
だから、こんな幸せな気持ちになるなんて想像すらしていなかったのだ。
（吉久君はどちらを選ぶのでしょうか、私を性奴隷……いいえ性人形にするか、それとも終わらせてくれるのか）
どちらを選んでも、初雪にとっては同じ事だ。
（どちらを選んでも、私の心は死ぬでしょう。そこに命があるかどうかなんて些細な差……）
口元から自然と笑みがこぼれる、今、とても笑い出したい気分だった。
こんなに安らかで穏やかな気分は、産まれて初めて。
（ありがとう、貴方に出会えて良かった……貴方に全てを捧げられて良かった……私を愛してくれる貴方、私が愛している貴方、竹清初雪と名前が変わる時が来なかったのは少し、そう、ほんの少し未練だっ

たけれど）
ありがとう、ありがとう、と感謝するしかない。
だからこそ、苦悩し答えが出せない吉久の姿には申し訳なく思う。
（僕は何が出来る？　何をしたらいい？　初雪さんをどうしたら――）
疲れたと言った、もう壊れていたのだと、聖女なんて幻想だったのだと、吉久には分からない、受け入れたくない。
そんな言葉なんて、全部全部全部、嘘だと笑って欲しい。
でも。
（殺してって願う人間に、なんて言えばいい？）
なんて己は中途半端なんだろうか、もし本当に全ての理性を愛に捧げ狂ってしまえていたなら。
彼女を今すぐ犯したのだろう、いや、そもそもこんな事にはなっていない。
今もあの部屋で、虚ろな瞳で微笑む彼女を大事にしていた筈だ。
（僕に……僕にさ、もう少し勇気があれば）
彼女に死を与える決心が出来ただろう、そして殺した後で己も死ぬのだ。
初雪の存在しない世界なんて、なんの意味があるのか。
そこは空気のない月面と同義、吉久には到底生きていけない。
（本当に選ぶしかないのか？　選んだら僕は……僕は）
苦しい、息を吸う動作とはどうすのだったか。
最近は頻繁に分からなくなっている気がする、苦しい、苦しい、確かに呼吸をしている筈なのに、生きていく上で必要な何かが致命的に足りない。
足りない、足りない、何もかもが足りない。
（僕には何もない、初雪を説得する言葉も、犯す狂気も、それでもと言い続ける勇気も、何も、何も無いんだよ……）
だから、吉久に残された選択肢は二つしかない。
本当に、本当に、心から初雪の事を考えるならば。
（殺すのか？　僕が？　初雪を？）

考えただけで寒くなる、温もりを求めて抱きしめてもなお寒くて。
歯を食いしばって、でも涙は止まらず。
（だからって、抱けって？　そんなの――）
この手で命を終わらすのと、心が死んだ最愛の者を傍らに起き続けるのは。
どちらが果たしてどちらが、彼女のとって救いなのだろうか。
救い、救う、それは救いなのか、救いではないのだとしたら。
（僕の好きな方を選ぶ、それが初雪にとっての幸せ？　だから――僕に選択を委ねたの？）
答えを出さなければならない、けれど何一つ決められなくて。
思考は堂々巡りする、己という存在はこんなにも愚鈍だっただろうか。
（選べない、僕は――何一つ選べない……）
まだ何かある筈だ、もっと捨てるべき何かがある筈だ、その先に希望があるかもしれない。
頭の片隅で欲望とも愛ともつかぬ何かが叫ぶ、それともそれは良心と呼ぶべき物だっただろうか。
分からない、今の吉久には何一つ分からず。
「殺しますか？　それとも抱きますか？」
死神の様な恐ろしく、月の様に美しい声が囁かれる。
タナトスが呼んでいる、そんな気さえする。
否、間違いではない、だって己の手に重ねられた彼女の手はこんなにも冷え切って冷たい。
「――僕には、選べない」
力なく消えそうな声で呟かれた回答に、初雪はゆったりと笑う。
初雪だけには誰よりも残酷で、誰よりも優しい人。
そんな彼だからこそ、選べないのは理解していた。
だから、願わくば。
「……ぁ、初、雪？」
「ならば、殺してください吉久君。――さあ、此方へ……」
彼からそっと体を離した初雪は、涙を流し続ける彼の手を引いて部

屋を出る。
（何処へ行こうって言うんだ？）
ひたひた、ひたひた、まるで幽霊の様に彼女は廊下を歩いていく。
少し歩いた所で、吉久には目的地が理解できたが。
それ故に、黄泉路への案内に思えて。
（この先は……初雪の部屋だ）
何度か来たことがある、あの半年間の陵辱の時に。
彼女の部屋というプライベートまで犯せば、彼女に吉久という存在を刻み込めると本気で信じていた。
なんて、本当に愚かなことだっただろうか。
（きっと……本当に初雪さんは聖女という虚像を作っていたんだね）
だから、無意味だったのだ。
己がやったのは、愛を知らず育った可哀想な女の子を。
無惨にも陵辱し、本来だったら気付かない素質を目覚めさせ歪めただけ。
（ごめん……ごめんよ初雪……っ!!）
今、吉久は心の底から悔いた。
己は本当にクズ男だった、卑劣な男だった、鬼畜で、身勝手で、自分勝手で、中途半端な優しさなんて愛じゃない、中途半端な愛など愛ではない。
――因果応報、吉久の愛に、悪行に報いが来たのだ。
「お入りください、懐かしいですか？」
「……」
彼女の自室は、前に訪れた時と同じく殺風景なままだった。
壁際に机、その上に教科書と筆記用具、それだけ。
良家の一人娘とは思えないほど、簡素で狭く何もない和室。
（――ああ、写真立てが増えてるな）
愛する者の死を目の前に、心が鈍化してしまったのだろうか。
たった一つだけの変化を、吉久は見つける。
だがそれが、今更何だというのか。
（この部屋は……初雪そのものだ）

何もない、伽藍とした部屋。
勉強して、寝て、起きて、余暇を楽しむという思考すら産まれない部屋。
「ふふッ、そのまま持ち歩いていて良かったです。自分でも不思議だったのです、どうしてこんな物を持ち歩いているのか」
そう言って彼女が通学鞄から取り出したのは、見覚えのある包丁。
吉久の部屋の台所にあったそれだ、しかし何故、彼女が持ち歩いているのか。
そんな視線を感じ取ったのか、彼女はうっとりとした表情で。
「実はですね、吉久君がペアリングを買いに出かけた時に後ろから着いていって、場合によっては殺そうかと思ってたのです」
「……なるほど??」
その瞬間、吉久の心に少し輝きが戻る。
然もあらん、実は以前から命の危機だったとか。
現在の危機とは、また別の意味で恐ろしい。
「あの夜、貴方の独り言を聞いていたんです。だから私も一緒にペアリングを選ぶものだと、その為にデートに連れて行ってくれると思っていたのに」
「その……なんかごめんね??」
「良いんです、吉久君は浮気をしなかったし。ふふッ、嬉しかったんですペアリング。だから、私は幸せだと思ったのに……いつもこの包丁を持ち歩いて」
「義務感百パーセントで聞くけど、なんで??」
「きっと――貴方に殺されたかったんです。幸せだったから、心は無意識に分かっていたんですね、私という存在がもう終わっていた事を」
儚げにそう言うと、初雪は吉久の手に包丁を握らせて。
続けて、その切っ先を己の心臓へと誘導する。
「どうか……ひと思いに」
（いやマジで駄目でしょコレっ!?　僕は!!　正気に戻ったっ!!）
手の中の嫌過ぎる重みに、少し動かしただけで彼女の肌が傷つく状

況に。

初雪の理不尽な二択の衝撃から、吉久は目を覚ました。

がぶがぶ／２６　復讐の在処

（そもそもさぁ……、なんでその二択なワケ??　なんで誰も得しない選択肢しかないの??）
　これまでの鬱々とした抑圧を発散するように、吉久はフツフツと怒りを沸き上がらせる。
　思い詰めていた自分をブン殴りたい、なんでこんなに思い悩まなければならないのか。
「……はぁ～～～～、僕も大概だけどさぁ。君も結構なメンヘラだよね」
「吉久君？」
「そもそもの話さ、何を勝手に諦めてるんだい？　心が疲れた？　いや疲れたなら休もうよ、回復するまで距離を置くとかさ、色々出来ることがまだあるよね??」
「吉久君??」
　急に態度を変えた彼に、初雪は困惑しかない。
　今の流れならば、もう終わるしか無い筈だ。
　それともこれは、彼なりの最後の足掻きなのだろうか。
「ええっと……コホン、私を殺すことに罪悪感があるならずっと私を覚えていて、誰とも結婚しないで一生引きずって生きていてください」
「いや殺さないし君としか結婚しないし、というかさ君は誰の女になったと思ってるの？　君を脅迫して陵辱した卑怯な男の女だよ？　勝手に病んで殺してとかさ、あり得ないでしょ」
「何を開き直ってるんですかッ!?　そうしたのは吉久君でしょうッ!?　本当の本当に限界で自分でも訳が分からなくなってだから、だから貴方を傷つけないようにでも一生残る傷をとッ!!」
「うーん、どうせなら生きて僕を苦しめてどうぞ？」
　真顔で言い放った吉久に、初雪の精神も息を吹き返す。
　この男は本当にどうして思い通りにならないのだろうか、どうして

この状況で元に戻れるのだろうか。
「それが出来ない程に疲れているから殺してって頼んでいるんでしょうがッ!!」
「はっきり言ってやる、答えはノーだっ!! まったくさぁ良くもやってくれたよね。いきなり拉致監禁して混乱している所に殴り合いで挙げ句の果てに殺してくれって? 危うく雰囲気に流される所だったよ」
「殴り合いにしたのは吉久君の方ですし、私への愛があるから先程まで殺すかどうか葛藤してくれていたのでは?」
「でもそれって、僕は何も得しないよね? 君だって何も得しないよね? 何で逃げの一手で諸共に破滅しなきゃいけないの?」
「貴方が私を追いつめたからでは??」
開き直った吉久と、それでもと望む初雪。
議論は平行線を辿るかと思われた、だが。
今の吉久は以前と同じ彼ではない、精神にかかった負荷を弾き飛ばした新たなる吉久だ。
だから。
「そこだよね、僕は君を追いつめた。それは確かだ」
「分かってるなら――」
「――じゃあ、何故追いつめる事になったのか」
「そ、それは、貴方が憎くて、でも愛していて……こんなの〝普通〟の幸せでは……」
「そう、多分ね、そこなんだよ」
うんうんと吉久は頷いた、今の彼には何が何でもやり遂げるという覚悟が産まれている。
それは、陵辱を決意したその時のそれに似ていたが。
違うことは、初雪に対する覚悟も決めた事だ。
「まったく……笑っちゃうよね。僕はまだ足りなかったんだ、僕の想いすら踏みにじる覚悟が足りなかった」
「……吉久、君?」
くつくつと笑う彼に、初雪は戸惑いを隠せない。

吉久はちらりと机の上の写真立てを見ると、満足そうに頷き。
（――――加害者は被害者に何が出来る、か）
あの時、紗楽が答えた言葉。
加害者が出来る事はひとつ、被害者の復讐を受け止める事。
あの時はそんなものだと流したが、今ならはっきりと理解できる。
（そうだっ！　嗚呼、なんて簡単なコトだったんだろうっ！　ははっ!!　こうすれば良かったんだっ!!）
己はまだ、全てを捨ててまで初雪を陵辱してなかったのだ。
「ねぇ初雪さん、僕は君を神聖視し過ぎていたんだ」
「私を脅迫して犯し性奴隷にする程には、そうなのでしょうね」
「何よりも綺麗で、輝いていて、尊く思えた、だから汚したいし汚したくなかった、誰かに取られる前に自分のモノにしたかったし、でも独占する事は嫌だった」
「……矛盾」
「その矛盾こそ、嗚呼、僕は自分自身で踏みにじらなければいけなかったのに、そうしてこそ本当に君を堕とすコトを意味していたのにさ」
「矛盾を踏みにじる？」
初雪には吉久が何を言っているか理解できなかった、だが事態が違う方向へ行っているのを肌で感じ取って。
（嗚呼、――こんな吉久君を期待してたのかもしれません）
心が踊り始める、甘く高鳴り始める、きっと彼は初雪が考えつかない方法で状況を壊してくれる。
都合の良い妄想とも直感ともつかない何かを、彼女は確信した。
だから告げる、彼と彼女の間にある壁、それは。
「私と貴方は被害者と加害者、だからこそ産まれた苦しみは吉久君がご自身の心を踏みにじった所で解決するのですか？」
「解決出来る、だってまだ僕は君に何一つ償っていない、そして君の存在を堕としていない」
「……陵辱の罪を償うと言って、私の存在を貶めすと？　それこそ矛盾の固まりではありませんか」
「違うね、君はそれを愛と呼んだ。そうだろう？」

「それは――――ッ」
反論する言葉が出てこない、確かに初雪は吉久のそれを愛だと受け取った、言った。
背筋がゾクリと震える、嫌な予感がする。
その衝動のままに、初雪は吉久に問いかけた。
「罪を償うとは？　私を堕とすとは？　いったい何をしようと言うんですかッ!!」
「簡単なコトだよ、――君は僕に復讐するんだ」
「復讐ッ!?　貴方を警察に通報しろとでも言うのですか？　まだそんな事を考えて――」
「違うよ、それは僕が望んだ罰であって君の復讐じゃない」
「では何だと言うんですッ!!」
「僕らは対等じゃない、だから〝普通〟にしようとして心が行き止まりになった。だから対等になるんだ今から」
吉久は心の中で紗楽に感謝の念を送った、彼女の言葉がなければ。
この決断は下せなかった、そして初雪にも感謝した。
彼女がこの状況を作り出さなければ、本当に手遅れになっていたのかもしれない。
「ここでクイズだよ初雪、僕が捨てて、君に残されている尊厳ってなーんだ？」
「ふざけているのですかッ!!」
「悲しいなぁ僕は真面目だよ、ヒントはさっき言ったから、はい解答をどうぞ？」
楽しそうな吉久は、しかして譲れない空気を出していて。
初雪は彼を睨むと、仕方なしに考え始める。
（ヒント……先程の会話の中……普通、復讐、償い、被害者と加害者……対等……）
初雪は被害者で、吉久は加害者だ、だから復讐を、罪を償わなければ対等にならない。
そして、吉久が捨てた尊厳、初雪に残された尊厳とは何か。
（――――私に何が残されているのでしょうか、身も心も汚され染め

上げられて、罪深い陵辱者に愛情すら覚えてしまった）
愛、それは両方共が持っている、彼は犯罪を犯してでも初雪を求める愛があって。
その時、彼女はビクリと体を震わせた。
もしかして、もしかすると。
「……人としての、尊厳、罪、――犯罪？」
「正解、そう犯罪行為だ。嗚呼、そうだ僕は犯罪者だっ!! そして君は哀れで可哀想な被害者っ!! そう僕は復讐されなければならないっ!! そして君は僕に復讐しなければならない――――その手を汚してでもだっ!!」
「ッ!?」
「ねぇ初雪さん、僕と君が対等になるにはさ。――この薄汚い犯罪者と同じく、君も犯罪者になれば良いと思わないかい？」
「わ、私に罪を犯せと言うのですかッ!?」
「そうだ、――君が僕を愛しているというなら、君も犯罪者になれ」
どこまでも身勝手な提案、しかし初雪の心は。
屈辱の憎悪と、愛しさによる歓喜で渦を巻き始めたのだった。

がぶがぶ／２７　比翼連理

「――――私に、何をさせようと言うのですか卑怯者、私が断れない事を知ってその提案、本当に鬼畜ですね吉久君」
「簡単な事さ、ここに君が持ってきた包丁がある。――僕を刺せ、憎悪の赴くままに、愛の赴くままに、嗚呼、殴る蹴るじゃ駄目かなんて言わないでよ？　そんなチャチな罪じゃ駄目だ、――殺人、或いは殺人未遂、強姦魔に相応しい罪はそれぐらいだろう？」
　狂気すら孕んだ彼の瞳の輝きに、初雪は思わず息を飲んだ。
　彼は今なんと言った。彼は今、何を望んでいる？
　理性が理解を拒む、だが欲望は誤解する余地がないほど理解して。
「貴方を傷つけたくないのに、傷つけろと言うのですか」
「君の言う傷つけるは軽すぎる、そんなのだから憎悪は晴らせずに心が壊れそうになるんだよ」
「もし死んだら取り返しのつかない事になるのですよッ!!」
「僕は君の愛を信じてる、君の愛があるなら僕は君に何回刺されても生き延びるだろう。――そして君は殺人未遂、傷害罪。今後一生、僕に負い目を感じながら生きることになる」
「それは私を陵辱した負い目がある貴方と同じ、そういう事ですか、――――バカなんです吉久君？」
　初雪は今、怒りで我を忘れそうになっていた。
　対等になる方法がある、陵辱しわすれていた所がある。
　それがこれか、傷つけろと、そうならない為に心を押さえて疲れ果てた初雪に、彼はそうしろと言うのだ。
「ふざけないでくださいッ!!　それの何処が対等――――ってぇッ!!
　なんで包丁を握らせるんですか止めて止めろ止めてくださいッ!!」
「ごめんね初雪さん、僕もう決めたから。嗚呼、もっと憎悪を煽った方が良い？　なら今から君を犯して体から説得するけど……」
「その我が儘だなぁって顔を今すぐ止めなさいッ!!　もおおおおおおおおッ、貴方は何でそうなんですかッ!!　バカバカバカバカ卑怯

者ッ!!　愛する者を犯罪者にしようだなんてクズ過ぎますッ!!」
「うーん、僕に終わらせてくれって言った人は言うことが違うなぁ……。ねぇブーメランって知ってる？　投げたら戻ってくるやつ」
「お望みなら、吉久君のアレを切り取ってブーメランにしますよ？」
「でもそれをするってコトはさ、犯罪者になる気だね？　いやぁじゃあそういうコトで」
「違いますよバカ!!」
どうしてこんな男を愛してしまったのだろうか、初雪の心に後悔が溢れる。
と見せかけて、そんな所も好き、と駄目な愛が胸にキュンと甘いときめきを起こす。
（ううッ、だ、駄目です、こんな事を嬉しいって――）
不味い、これはとても不味い事態だと彼女は焦った。
どうして立場が逆転しているのだろうか、このまま流されてはいけない。
こんなのは〝普通〟では、絶対に無い。
「すぅ～～～はぁ～～～……、コホン。冷静に話をしましょう吉久君、こんな事は愛ではありませんし、こんな事で私の存在が汚れるとでも？　本当に憎しみが晴れるとでも？」
「愛だね、愛としか言いようがない。それにさ〝普通〟を望む君にとって間違いなく存在を汚す行為だし、憎しみを晴らすんじゃなくて僕が君を憎む為に必要なコトだ」
「……ちょっと待ってください、吉久君が私を憎む為に必要な事??」
その不可解な言葉に、初雪は頭痛がする思いだった。
憎しみを晴らす、なら理解できる。
しかし何故、彼が初雪を憎むために必要な事になるのだろうか。
「まぁまぁ想像してみてよ、いくら自業自得だからってさ。刺された痛みは痛みだし恨むでしょ普通。それに君を愛し恨む僕、僕を恨み愛する君、――ほら対等じゃん」
「あ、貴方ってヒトは～～～～ッ!!」

「ワクワクするなぁ、これが終わってもし僕が生きていたらさ、僕らはどんな関係になるんだろうねぇ……」
刺々しくも求め合う様な感じだろうか、それとも甘々でイチャイチャしているのだろうか。
或いは、その両方かもっと他に二人なりの関係を築いているのだろうか。
未来に思いを馳せる吉久の顔を、初雪はグーで殴りたくて。
（お、おちッ、落ちつくのよ私ッ!!　歴史有る一条寺家の跡取り娘としてここは家の名を汚さない為にも冷静に――――ああ、でも一条寺ではなく竹清初雪になる可能性もある……じゃッ、ないッ!!）
肝心なのは、このままだと吉久を刺し殺してしまう可能性がある事だ。
流されては行けない、毅然とした態度でノーと言う。
否、それだけでは足りない、彼がこんな狂気の提案を取り下げるような衝撃を与えなければならない。
（何か、何かないのでしょうか。そう、吉久君がショックを受けそうな事……）
（ははーん？　これは変なことを考えている顔だね？　うーん、長引くなら脱ぎ捨てた襦袢を拾ってきた方がいいのかなぁ？）
（私が殺してくれと言ってもひっくり返されましたし……、そうなると、そうですねアレしかありません）
（あー、でもどうせ血で汚れるしそのままの方が良いかな？）
余裕を崩さない吉久と、何かを決意した初雪。
そして。
「――――分かれましょう、貴方には愛想が尽きました。もう愛せません」
「おっけー分かった、ならもう一度犯すね」
「……」「……」
「何でそうなるんですかッ!?　無敵の人じゃないですか吉久君ッ!?」
「今更じゃない？」
手強い、なんと手強い相手なのだろうか。
ならば次は。

「じゃ、じゃあ貴方を憎みますッ!!」
「今もだよね？」
「愛してません!!」
「じゃあ今すぐ帰るけど、今後は話しかけて来ないでくれるかい？」
「貴方がそんな事を出来る訳が無いでしょうッ!!　自分でも無理だって分かっている事を言わないでくださいッ!!」
「初雪だって無理だって分かってる事を言わない方が良いと思うんだ」
「うう～～～～ッ!!」
　全裸で包丁を持ったまま涙目で睨む初雪に、吉久は優しく微笑むと。
　おもむろに服を脱ぎだす、その光景に彼女はギョッと目を見開き絶句。
　全裸になった彼は、初雪の両手を己の両手で包み。
「――愛してる、好きだ、世界の誰よりも大切なんだ。僕と一緒に生きて欲しい」
「こ、今度は甘い言葉で説得ですか？　そんなものに惑わされませんッ」
「説得なんかじゃない、知って欲しいんだ。――これは愛の行為なんだって」
「何処がですかッ!!　恋人を刺し殺すのが愛の行為と??　サイコパスの所業ですそれはッ!!」
　がるると睨む初雪、しかし彼の手は振り払わずに。
「誰かを愛する事はさ、それ事態が狂気なんだと思うんだ。僕はね、君の為なら全てを投げ出せるし、君にもそれを求める」
「幼稚過ぎます、相手に同じ愛の重さを求めるなんて……ッ」
「幼稚でも良い、サイコパスと言われようが狂気の沙汰と言われようが、君に拒否されようがさ、――僕は君を全身全霊で愛する、君の心を手に入れる、同じように愛してもらう。……絶対に妥協なんてしない」
「～～～～～～ッ」

熱の籠もった愛の言葉に、初雪は不覚にも顔を真っ赤にした。
嬉しい、だって本当は。
（狡い、なんでこんな時に……嗚呼、私だって、私だってそう思って――――）
でも、だからこそ彼の提案は受け入れられない。
だってそれは、彼を失う可能性が高いからだ。
同じ選択を彼に突きつけた、でも、でも、でも。
「駄目……、駄目です吉久君……私は貴方を……」
「頼むよ初雪、僕に君の全てを受け止めさせてくれ、愛も憎しみも。……君が僕の愛を受け入れてくれた様に、僕にも受け止めさせてくれ」
「駄目です、卑怯です、狡いです……」
「ごめんね初雪、共犯者になれればもっと良かったんだろうけどさ。君が犯罪を犯す相手も、僕じゃなきゃ駄目だったんだ。――君の手を汚して欲しい、君の為じゃない僕の為に、犯罪者になってくれ」
くらくらと眩暈がする、まるで耳元で囁かれている様な。
いや違う、まるで、ではない。
初雪が気が付かない内に、耳元で囁かれていたのだ。
（わた、私は～～～～ッ）
ごくりと唾を飲む、心臓がバクバクと五月蠅い。
どうすれば良いのだろうか、彼をこの手の包丁で憎しみのままに、愛のままに刺す。
それは、何よりも甘美な誘惑に聞こえて。
「……お、お願い、します……考える時間をください、せめて明日の朝まで、考えさせて頂けませんか？」
雪のように白い肌を頬を赤く染めて俯く彼女に、吉久はにっこりと言った。
「ダメだね、今すぐ答えを出して」
「うう～～～～～～～～～ッ」
初雪は瞳を発情で潤ませて、唸る事しか出来なかった。

がぶがぶ／２８　甘く高まる鼓動

愛する者を殺す、実際に命を取るまではしなくても良いが。
好き勝手に、自由に、憎しみのままに、怒りのままに、そして愛のままに切り刻める。
それは、なんて甘美な誘いだろうか。
（こんなの、私、どうすれば……）
激情のままに殺してしまうかもしれない、だが、取り返しのつかない事をする。
愛する者の為に犯罪者となる、それは彼によって初雪が夢見ていた〝普通〟が失われる事でもあり。
（なんて……なんて狡いヒトなのでしょうか吉久君は）
とくん、とくん、胸の高まりが止まらない。
頬が思わず緩んでしまう。
屈辱だ、これは屈辱に他ならない。
（私が頼んだ事をやり返されたばかりか、嗚呼、予想もしていなかった救いの手の差し伸べてくれるなんて……）
ときめきが導火線となって、心臓が爆発しそうな気さえしてくる。
怖い、この誘いに乗ったら彼を殺してしまう。
だって初雪には正気を保つ自信が無い、残虐になぶった後で心臓を一刺しするだろう。
（――本当に？　私は吉久君を殺してしまうの？）
怖い、けどそれ以上に背徳感が、憎悪が、悦びが、愛が、初雪を誘惑する。
ふわふわと定まらない目つきで彼を見ると、必然的に裸体が目に入って。
（この体に、私の愛が刻める、決して消えない深い傷跡が、噛みつくよりもっと甘美な、私の男である証拠が刻める……）
下腹が疼く、呼吸が荒くなる、想像しただけで快楽が背筋を駆け上がり。

手が震えて、包丁を落としてしまいそう。
でも、だから。
「――――ダメ、ダメです吉久君、そんな事……」
「そう？　君の口以上にその目や体は正直みたいだけど？」
「違う、これは違うんです、ダメ、こんな事を喜んではいけないのです。愛じゃない、愛じゃないから」
「本当にそう思ってる？　残念だなぁ……僕が君に出来る最大の愛なのに、受け取ってくれないの？」
「そ、それは――……ッ」
彼を刺したい、でもそれはしてはいけない事で。
でも、でも、でも。
濡れた瞳で迷う初雪の頬に、吉久は手を添えて。
「考えてみて欲しいんだ、君が手を汚す意味を。――僕らはどうして対等に、そして未来に進めると思う？」
「……貴方は、私を強姦した犯罪者だから、陵辱した卑劣な男だから。私が吉久君を刺せば、犯罪者として対等になれる」
「それだけじゃあ半分だ」
「半分？」
「これはね君の復讐であると同時に、僕からの陵辱なんだ」
「陵、辱……？」
その響きに胸が甘くとろけそうになったが、初雪は正気を保って続きの言葉を待った。
「僕を刺すって事はさ、君は大切にしていた〝普通〟から完全に外れるんだ、そして僕に対して罪悪感を覚える、そうだろう？」
「それは……違わない、ですけど――」
確かにそうだ、愛と同時に憎しみが沸き上がってくる。
ぞわぞわと背筋に這い寄り、復讐が果たされると口元が歪む。
欲情しているのに、怒りで目が眩みそう。
「僕を刺すことによって、……君の憎悪は変質する。だって復讐は果たされるんだから、君自身も言い訳のしようもなく加害者になるのだからさ」

「愛と憎悪に……罪悪感という重石を更に乗せると？　吉久君はそう言うのですか？」
「そうだ」
「貴方って……貴方というヒトは……嗚呼、本当にッ、本当のッ、最低のクズ男なのですねッ!!」
　ギリと歯ぎしりし初雪は吉久を睨みつけた、こんな屈辱があるか、人生最大の屈辱かもしれない。
　目の前の男は身も心も陵辱しただけでは飽きたらず、彼女自身も陵辱者になるようにし向けているのだ。
「狡いッ、狡いです吉久君はッ!!　嗚呼、卑怯者ッ、クソ野郎ッ!!　私を最低最悪の存在である貴方と同じ低みにまで堕ちろと言うのですかッ!?　バカじゃないの？　正気の沙汰ですか？　ありえない、本当にありえないッ！　何で私は貴方のような社会の屑を愛しているんですか？　嗚呼、救いようがないッ、どうしたら救えるのですかッ!!」
「救えないからさ、一緒に堕ちようか」
「〜〜〜〜〜〜〜〜ッ!!」
　とんでもない誘いに、初雪の感情は感極まった。
　救えないから一緒に堕ちるだなんて、こんな誘い文句がこの世に存在すること事態がおかしい。
　だが、本当におかしいのは、救いようがないのは。
（こんなに嬉しいだなんて、嗚呼、今すぐ死んでしまいそうなぐらい嬉しいですッ!!）
　でも、だからこそ。
　芯が出る、愛欲と憎悪に溺れ死にそうなのが彼女の半分だとすれば、もう半分は。
「嗚呼、嬉しい……嬉しいです吉久君。――だからこそ、駄目です」
「……初雪？」
「それがどのような理由があっても、愛する者に己を刺してくれと頼むものではありません。今の私にそんな事を言う資格なんて無いでしょう。……でも、貴方の体は貴方だけのモノではありません」
「ああ、忘れていたな。それも君の本性だったね」

拒否されたと言うのに、吉久は嬉しかった。
今の彼女は、かつて吉久が憧れた聖女の姿。
人は極限状態で本性が出るという、ならば今の姿こそ、善性を露わにする彼女の姿こそ。
「貴方が傷つけば貴方のご両親や友人達が悲しむのです、なにより私も悲しく、とても辛い……」
「それでも、僕は君に復讐して欲しいんだ」
「復讐は無意味、なんて申しません。私は貴方に復讐したい、でも……吉久君を傷つけて傷つく人が居る限り、私は貴方に復讐をしない」
「君の心が壊れるとしても?」
「……貴方の心遣いは、愛情は嬉しいです。一緒に堕ちようと言ってくれて嬉しかった。でも、私は私の良心にかけて貴方をこれ以上、傷つける事は出来ません」
自己犠牲、思いやり、優しさ、愛、少し前までの吉久なら。
聖女としての初雪の姿に、改心すらしたかもしれない。
罪悪感のままに、逃げ出して自殺したかもしれない。
だが。
「まぁ君がそうしたいなら良いけどさ、今の状況を理解してる? 僕は君が嫌だと言っても無理矢理に刺させるけど??」
「貴方を傷つけるぐらいなら自ら死にます」
「君が自殺するのとさ、僕が君にキスしたり胸を揉んで腰砕けにするのとドッチが早いと思う?」
「体が如何に貴方の言いなりでも、譲れない所はあるのです」
「なら試す? 君が捨ててなければあの頃に使ってたバイブとかディルドーとかあるよ? 全部をウチに持ってきたワケじゃないし」
ぼっ、と初雪の顔が茹だった。
もじもじと腰を動かし始める、今、全裸なのがとても心細く感じる。
これは駄目だ、とても不味い状況だ。
「……ゆ、譲れない所だってあるのですよ?」
「三時間ぐらい絶頂寸前のままで、頭茹で蛸状態で愛を囁かれたらさ、

初雪はどうなると思う？」
「……うううううううううッ、卑怯者ッ!!　この変態ッ!!　吉久君は私を何だと思ってるんですかッ!!　か、仮にそんな状態で貴方を刺して私が罪悪感を覚えるとでもッ!?」
「ははっ、よく考えてみなよ初雪。そんな状態で君は手の力が十二分に入るかい？　そうだ僕の思いのままだ。するとどうなる？　――君はね、焦らされて焦られてその挙げ句に僕の心臓を切り裂いて、ああ可哀想に絶頂に達せないまま僕に死なれるのさっ!!」
「～～～～～～ッ、この卑怯者ッ!!　鬼畜ッ!!　それでも人なのですか？　本当に人間なのですか？　私に選択肢なんて無いじゃないですかッ!!」
　駄目だ、もう駄目だ、最後の抵抗が崩されてしまった。
　初雪にはもう、言い訳も逃走も残されていない。
　刺す、刺してしまう、吉久の皮膚を切り裂く感触とはどんなものだろうか、想像が妄想が止まらなくなる。
「……はぁ、ふぅ、はぁ、はぁ、だ、だめです、そんな、貴方を刺すだなんて」
「でもさ、君は理由が出来たよ。僕に脅迫されて仕方なく復讐するっていう建前がさ」
「そ、そんなの言葉だけです、そう、言葉だけなんです」
「けど、この言葉が欲しかった。そうだろう？　どうする？　僕は君の逃げ道を塞いだ、さっき君が僕にそうした様に。――覆せるかい？」
　嗚呼、と初雪はか細い声で震えた。
　その熱い吐息は、背徳の快楽か愛か、それとも憎悪と正しき怒りのそれか。
　或いは、全てか。
（だめ……、だめ、だめ、だめです吉久君――）
　ゆるゆると首を横に振る、理性が納得してしまう、欲望がそれを後押しする。
　愛のままに、憎悪のままに、首を縦に振りたくなる。

――それを、吉久が見逃す訳がなく。
「さ、一緒に堕ちようよ初雪。可哀想な君は哀れにもまた脅迫され陵辱され、そして僕をその手で刺してしまうんだ。憎む資格が無いって罪悪感が囁くんだ、愛される資格が無いって罪悪感が訴えるんだ、でも愛して、憎んで、……それを僕にまた蹂躙される日々が始まるんだよ」
「やめて、やめてください吉久君……誘惑しないでぇ……」
「憎悪によって増長した屈辱が、罪悪感によって受け入れられ快楽に変わるんだ、僕に愛され君が愛する事を罪悪感が仕方ないって受け入れてしまうんだ。――僕のえっちなお嫁さんになってくれないかい？　そして幸せに生きるんだ、子供だって作ろう、君が望むだけ産ませてあげる、昼は幸せな家庭で過ごし、夜は僕と背徳的に過ごすんだ」
「――――――……ぁ」
初雪は想像してしまった、そんな都合の良すぎる未来を。
けどそれは、復讐さえすれば手に入る未来であり。
少し間違えただけで、呆気なく消え去る未来でもある。
「もし君の復讐で僕が死んだら、君は僕が火葬される時に一緒に焼け死ね。――出来るだろう？」
「……は、……い。します……する、吉久君に、復讐します――――ッ!!」
今、初雪の心は本当の意味で堕ちたのだった。

がぶがぶ／２９　罪人、ふたり（最終話）

最初に刺すのは、果たして何処がいいのか。
初雪は少し悩んでから、吉久の心臓の上に手を当てて。
「ああ、とても残念です。心臓を貫かれても生きていければ良いのに……」
「遠慮しなくても良いんだよ？　君がしたいのならそうすればいい」
「うふふッ、その手には乗りませんわ。たった一回刺して終わりだなんて興醒めですもの。それに……、この先も吉久君と一緒に生きていきたい」
初雪はそう言うと、彼の胸板に軽いキスを三回落とした後。
ふわりと抱きついて、上目遣いで笑う。
「でも、引き返すなら今の内ですよ吉久君」
「君も言うね、けど安心してよ僕はどんな痛みにも耐える――いや違うな、きっと耐えられなくて叫んでしまう。でも……君はそれを無視していいんだ」
「嬉しい、初めて貴方に犯された時と同じようにしても良いのですね」
「そうだ。これは僕らの愛の営みで、君の復讐なのだから」
顔を綻ばせた初雪は、そっと目を閉じる。
吉久は彼女に顔を寄せて、ただ押しつけるだけのキスを行う。
一秒、二秒、三秒、そして十秒程だろうか二人は自然と顔を離す。
「不思議だ、これから痛みが待っているっていうのに。とても待ち遠しいんだ」
「でも貴方は痛みが快楽になるタイプではない、ええ、理解しているわ。だから――まずは軽く行きましょう」
これは愛の営み、ならばセックスと同じく前戯で慣れさせる事が必要だ。
彼女は包丁の切っ先を少しだけ沈ませて、心臓の上にバツ印を付ける。
「――っ、ぁ……」

軽く呻いた吉久の表情を、初雪は一瞬も見逃さずに開いた瞳孔で見つめる。
とても浅く切り裂いただけなのに、膝が震えるぐらい愉しくて。
（嗚呼、――いけない事をするって、こんなにも大きな悦びがあるのね）
しかも単に犯罪を犯しているのではない、憎悪をぶつける復讐であり、二人だけの愛の営みでもあるのだ。
頭がぐちゃぐちゃになりそうな快楽で、初雪はうっすらと笑みをこぼし。
「まだ序の口なのに、こんなに胸が高まるなんて……嗚呼、嬉しいです吉久君」
「ホント、そっくりやり返されてる気がするよ。僕もそんな感じでとても嬉しかったから」
「私を傷つけられて？　それとも処女を奪えたから？」
「両方さ、この手で君を僕のモノに出来た。それは何よりも嬉しい事だったから」
苦笑する吉久の左手首を握った初雪は、その甲に唇を強く押しつける。
幾度と無く彼女を愛し、幾度と無く傷つけた手。
「覚えています、この手が私の胸を犯しました、お尻だって手の痕が付くほど強く握って――」
嗚呼、と熱い吐息を一つ。
包丁を逆手に持ち替えた彼女は、左手の甲に包丁の先端を押しつけ。
ぷつん、と赤い血が一滴だけ流れた。
力を込めれば、この包丁は突き刺さって貫通する。
（嗚呼、嗚呼、嗚呼、突き刺してしまえばもう止まらない、私はこの復讐をやり遂げてしまう）
その時、吉久の命はあるのだろうか。
仮に彼の命があったとしても、己はきっと彼の目論見通りに変質してしまうだろう。

そう考えると躊躇してしまう、だがそれ以上に。
「……ねぇ吉久君、私、痛かったんです、悲しかったんです、貴方に犯されて、デートのお誘いの手紙なんて産まれて初めてだったんです。皆さん私を高嶺の花扱いして遠巻きに眺めるだけだったから、……嬉しかったんです、本当は断ろうかと思っていました。でも嬉しかったんです、本当に、嬉しかったのに」
でも。
「――貴方は嘘をついたッ!! デートなんて最初から誘う気なんて無かったのでしょうッ!? 挙げ句の果てに私の排泄写真やお父様の弱みを握りッ! 学園そのものを人質にとって脅迫するなんてッ!!」
愛されずに育ったから、だからこそ夢見ていた。
「白馬に乗った王子様が迎えにくるなんて思ってなかったッ、でもッ、キスは夫となる人に捧げたかったんですッ!! 私の初めては結婚初夜に新妻として捧げたかったんですッ! そんな小さな夢を貴方は汚したッ!! 私を犯したッ!! 止めてって何度行っても貴方は止まらなくてッ!! ～～～～ふざけないでくださいッ、何の権利があって貴方はそんな事をしたんですかッ!! 返してッ、私の初めてを、処女を、返してッ!!」
「……例え君が傷つこうとも、僕は欲しかったんだ」
「この人でなしッ!! 貴方なんて自分で死ねば良かったのですッ!! 死ねッ! 死ねッ!! 死んで、死んで詫びる事だって出来たでしょう――ッ!!」
「っ!? ぁ、っ～～～～～～～～!!」
その瞬間、最初に感じたのは冷たさだった。
すっと金属の温度が伝わり、ずぶずぶと沈んでいく。
「こんな痛みぐらいで、私の心の痛みがどうにかなると思わないでください……、あはッ、痛いですか? 痛いでしょう? でもまだまだこれからですよ?」
「ぐっ、っ、ぁ、はぁ、はぁ、ははっ、想像したより痛いなぁ……」
「嗚呼、――ずっと、ずっと、その苦痛に歪む顔が見たかったの……ッ」
包丁はゆっくりと引き抜かれて、その頃には神経が痛みを訴える。

ずきずきと傷んで、かっと熱くなって、血液がぽたぽたと流れ落ちる。
「ほら見てください……包丁が貴方の血で真っ赤に染まって……うふふッ、世の中にこんなに綺麗なモノがあるだなんて――――」
癖になってしまいそうだ、初雪は声にならない笑い声を漏らす。
そのまま血走った目で、勢いよく右手首を掴むと。
裏返して、掌の、その中指の先端に包丁を入れる。
「あ、安心してくださいッ、やりすぎませんッ！　嗚呼ッ、でも……この胸にされた屈辱は忘れませんッ！」
「っ、い、ぁ、はぁ、くっ、っ～～～～～～っ!!」
「あはッ、あはははははッ、いい気味ですねぇ吉久君ッ!!　自業自得ですそんなに痛がって、ふふッ、どうです？　先程よりかは痛くないでしょう??　丁寧に線を入れられる気持ちはどうですッ!!　嗚呼、なんて私は慈悲深いのでしょうかッ、胸を揉まれただけで言いなりなる体にされてッ！　乳首を抓られただけでキスを強請る体にされてッ！
きゃはッ、カカカカカカカカーーーーッ!!」
吉久の右の掌はゆっくり裂かれていった、深く入れていないのが救いなのかもしれないが。
それでも、縫合が必要なぐらいには深い。
指の腹から手首まで、それを一本一本繰り返し最後に手相を変えるように線を刻んでいき。
「知ってましたか？　実は私って占いが好きなんです、普通の女の子らしいでしょう？　手相を見ることが出来れば他の子と仲良くできるなんて、ああ、幼い頃の私は愚かだったのしょうね、努力の方向性を間違っていた、で、でもッ、あはッ、ねぇ吉久君？　貴方の運命はこれで私と生涯結ばれ、長生きして、幸せに暮らせる手相になったんですッ、喜んで？　ねぇ嬉しいって、ありがとうって言って言いなさいッ!!」
「ぁ、がっ、ぎ、ぃ、っ、はぁ、――は……ぁ、あ、ありがとう、う、嬉しいなぁっ!!」
「そうでしょうそうでしょうッ!!　嗚呼、まだあるんです貴方への恨

みはッ、まだまだ――――ッ!!」
　初雪は彼の掌から流れ出る血を己の体にベタリと付けて、雪のような肌を赤く斜めに線を入れた。
　まだ、まだ、まだ彼に言いたいことが、伝えたい事がある。
　なんて甘美な時間なのだろうか、愛、そう、これこそが人生にトラウマの様に刻まれる最初で最後の愛。
「ねぇ、聞いてください吉久君……、私、排泄する毎に快楽を得る体になってしまったんです。この惨めな気持ちが分かりますか？　毎朝トイレに座る度に、お尻を拭く度に絶頂しかけて、ウォシュレットなんてもう使えないんです、貴方にお尻の穴に入れられる惨めさが、感じてしまう屈辱と背徳感が理解できますか？　嗚呼、理解できないから、理解して無視して、私を何処までも支配したいからアナルを調教したんですよね？」
　初雪は吉久の顎を掴み、その頬を舌で舐めながら。
　右わき腹を、チクリチクリと刺す。
「――許しません、絶対に、でも感謝してくださいね？　同じ事はしません、だから……これで」
「ぐぐっ、ぁ、くっ、はぁ、は、あ、はぁ、っ……」
　力を入れて、わき腹を裂く。
「嗚呼、少し深くなってしまいましたね。でも内蔵までは届いていませんから。うふふッ、私ったらなんて優しいのでしょう――――ッ」
（そうだ、ぶつけて来いっ！　君の憎悪を、怒りを、これこそが必要だったんだ!!）
　吉久は歓喜に溢れていた、しかし同時に痛感していた。
　己は、被虐体質の持ち主ではない。
　この痛みは快楽に変えられない、誰かに好き勝手に切り刻まれる屈辱、憎みたくないのに、怒りたくないのに、初雪に対して憎悪してしまう、怒りを覚えてしまう。
（ははっ、絶対に言わない。人生最後になっても直接言ってやんない、だってそうだ、これは僕と初雪の愛なんだから、分かってる筈さ、今まさに感じてる筈さ、包丁を刺すひとつひとつが）

（そう、このひと刺しひと刺しが愛の証明、吉久君から私に、そして私から吉久君へと送られる最低最悪の愛の証明）
（この傷は、生涯消さないよ）
（絶対に消えない、私たちの、いいえ、私だけの愛おしい罪）
まだまだ伝えたい怒りがある、憎しみがある。
だが変わっていく、吉久の血が流れる度に、苦しむ顔を見る度に。
そして肉を裂く感覚が脳髄を犯す度に、憎しみが愛へと変わっていく。
「――――好き、好きです吉久君。世界の誰よりも素敵なヒト、私に温もりを教えてくれたヒト、私を愛して私に愛されるヒト」
「光、栄っ、だね……!!」
吉久は苦痛に顔を歪ませながら、必死になって笑顔を作った。
強制された訳じゃない、機嫌を取ろうと思った訳ではない。
ただ、そうしたかったから。
「君、が、好きだ……だぁっ、ぁ、く、ぃ～～～っ」
「嬉しい……、嬉しいです吉久君、私は今、心から貴方の好意を受け取れます、だから受け取ってください」
吉久の体が崩れ落ちる、それをゆっくりと支えながら初雪は優しく横たえて馬乗りになった。
そして、体を重ねるように倒すと彼の眼球を舐め。
「この目が好きです、私を崇拝し、けれど欲情にまみれて、誰よりも熱くまっすぐに私に心を伝えてくる目が、好き」
目から一直線に舌を這わし、右太股に来ると顔を上げ。
包丁を振り上げて、一気に貫いた。
「――がぁっ!!　ぁ、は、う、ぃ、ははっ、かかかかかかかっ!!　嬉しいなぁ!!　そんな風に思われていたなんてさぁ!!」
「そうですその目ですっ!!　そしてその唇だって好きなんです、私を傷つけた、けど優しく愛を伝えてくれる、労ってくれる、私の乳首を子供のように吸うその唇が愛おしいんです、独占欲のままにキスマークをつける唇が、歯形をつけるその口が、嗚呼、私には愛おしいッ!!」
ドス、ドス、ドス、吉久の太股が何度も貫かれる。

愛に突き動かされて初雪は包丁を床に刺し、彼の右手を取る。
そしてその傷跡を、指でぐりぐりと抉るように押して。
「嗚呼ッ、この手が好きなんです、なんて愛おしいんでしょう！　私の頭を何度も撫でてくれた手、支配欲を表すように頬に添える手、胸やお尻を揉む手、その指先で私を数え切れないほど絶頂に導いて、嗚呼、何よりも私と手を繋いでくれる、温もりをくれる手なんです!!」
「嬉しい!!　嬉しいなっ!!　ああ!!　君の愛が伝わってくる!!」
吉久は怒鳴るように言葉を返した、そうしないと意識を保っていられないからだ。
その様子を初雪は慈母のように見つめると、再び包丁を振り上げる。
（これで……最後です吉久君、嗚呼、私は取り返しのつかない傷を与えてしまった、そして今、最後の傷をつけようとしている――――ッ）
この一撃でもって、吉久と初雪は新しい関係になる。
もう憎しみが暴走する事はない、愛のままに傷つけ事はない。
二人並んで、歩いていけるのだ。
「竹清吉久君、いいえ、吉久。貴方の全てを愛しています」
「僕もだ初雪、いつか結婚してくれ。二人で幸せになろう……!!」
そして、初雪は包丁を彼の腹部に勢いよく突き刺した。
深く刺さったそれを今度は抜かず、愛おしそうに一度だけ撫でる。
「ありがとうございます吉久、私に復讐の機会を与えてくれて、嗚呼、本当にありがとうございます」
左手を取り、薬指のペアリングを舐める。
それから彼の顔に己の顔を近づけ、その唇を噛んだ。
がぶがぶ、がぶがぶ、血が出る程に強く強く噛んで。
「さぁ、お医者様が駆けつけるのが先か、貴方が死ぬのが先か、私たちの愛を天に任せましょう」
「愛してる初雪、で、でもさ、体が直ったら覚えておいてね……」
そう言った途端、吉久の意識は急激に薄れていく。
彼女が備え付けの内線で医者を呼び出す姿を見ながら、彼の意識はそこで途絶えた。

がぶがぶ／３０　あの日の誘い（エピローグ）

結論から言おう、吉久は生き残った。
一条家に常駐している医者が居なければ、後五分救急車が遅れれば、輸血用の血が足りなければ。
出血多量で死んでいた可能性が高い、と、死んでいても不思議じゃなかった、と彼は聞かされて。
（いやはや、三ヶ月で退院できるとはありがたいね）
後遺症も特になし、強いて言うなら大きな傷がいくつも。
温泉や海水浴に行ったとき、周囲の目が気になるだろうが。
五体満足なら、十二分過ぎる結末だ。
（今日で退院かぁ……、色々とお見舞いもあったねぇ……僕は幸せ者だよ）
夕日が差し込みはじめた病室で、思い出に浸りながらゆっくりと着替える。
入院した彼の所に真っ先に駆けつけたのは、紗楽と兼嗣だった。
『先輩もバカだなぁ、料理しててピラゴラスイッチ的に包丁がお腹にぶっ刺さって一条寺先輩が帰ってくるのが遅かったら死んでたかもとか、バカ丸出しでしょ』
『おいおいカネくん？　そんな言い訳を信じるのかい？　どう見ても……』
『ごめんね紗楽、君が僕を心配して怒りすら覚えてくれるのは分かる、けどさ……〝そういう事〟になったんだよ。僕ら二人がそう望んだ』
『だがね親友、ボクはそれで引き下がらないぞ。詳しい事情を聞くまで疑いの目を向けてしまう。……いつか、ちゃんと聞かせてくれるのかい？』
真剣な顔で問いかける紗楽に、兼嗣も同意する様に頷いて。
吉久として、首を縦に振りたい気持ちはある。
だから。
『……初雪が許可したらね、僕の方から言っておくよ』

『オッケ、それで手を打つぜ先輩。……所で、二度とこんな事はねぇだろうな？』
『勿論さ、これからは平和にイチャイチャできるってもんだ』
『はぁ……よっしー、他ならぬキミがそう言うなら引き下がろう、ボクの勘では全ての元凶はキミだと確信しているがね、ああ、どんな鬼畜で最低な人間でもボクとキミは親友さ』
へぇ、と吉久は内心で舌を巻いた。
彼女には何も言っていない、だが親友として何かを感じ取っていたのだろう。
『今までさ、心配をかけてたみたいだね。反省するよ親友』
『そうだぞクソ男先輩！　紗楽さんの広い心と友情に感謝するんだぞ!!　……また学園で会えるのを楽しみにしてますよ』
『そうだね、じゃあまた学園で会おう！　と言いたいけど何度かお見舞いにくるさ、じゃあね！』
そうして二人は去っていって、何度もお見舞いに来てくれた。
来客はそれだけではない、彼の親も来て泣かれた。
そう、泣かれてしまったのだ。
（親に泣かれると、ダメージ大きいなんて知らなかったよ……、うん、これからは無茶はしない、というかもう犯罪行為は懲り懲りだ）
しみじみと吉久は頷いて、更に言えば両親と顔を合わせた初雪が嫁認定されてたのも罪悪感が少し。
（こっちの外堀も埋まっちゃったよなぁ……いやさ、いつかは紹介しただろうけど。僕と初雪の出会いが出会いなだけに、うーん気まずい、これは一生付き合っていく気まずさなんだろうねぇ……）
今の彼に残された数少ない罪悪感、けれど初雪が隣にいるならば平気だ。
（そういえば、一回だけ義父さんもお見舞いに来たっけ……）
一人娘の凶行に流石の彼も肝を冷やしたのか、青い顔をして一緒に救急車に乗り込み。
その後は一度だけ、初雪がいない時間に会いに来て。
『これで何の障害もなくなって婿に入る、……いや婿入りはしなくて

も初雪と添い遂げてくれるな？』
『勿論です理事長、いえ義父さんと呼んだ方が良いですか？』
『是非とも義父と呼んでくれ、――そっちの方が初雪の印象も良くなるからな。……孫が産まれるまでに和解の機会をセッティングしてくれ、全てはそれでチャラにする。娘を放置した身ではあるが、その娘がこんな事をしでかした訳だが、何も察していない訳ではないし感じていない訳ではないのだよ』
『僕が言うことではありませんが、そう言いながらあのお店の割引券を要求するのってどうなんです??』
『それはそれ、これはこれ、だッ!!　娘をくれぐれも宜しく頼む!!　ああ、やっぱりアイツに似て行動が過激になるんだ、どうして一条寺の家系の女はいつもそうなんだ!!　母だって嫁いできた祖母だって――』
『うーん、聞きたくない情報だなぁ。それって僕らの子供も将来は……いや、今は考えないようにしよう』
他にも、クラスメイトや家庭教師で教えた生徒や以前のアルバイト先の店長などなど。
様々な人物が、吉久のお見舞いに来てくれた。
「――――よし、もう忘れ物はないな。じゃあ退院といこうか」
初雪が病院の玄関で待っている、彼は入院生活を懐かしみながら扉を閉じて。
（そういえば最後まで個室だったなぁ……、いやまぁね？　初雪の気持ちも分かるけども）
どうせ、他の病人と接触し何か事件を波乱を起こすのを厭ったのだろう。
勿論、独占欲もあったのだろうが。
（色んなお医者さんと仲良くなって色んな話が聞けたし、何人かは連絡先を交換したもんね。勉強になったなぁ……）
元々、吉久は探求心が強く物怖じしない性格だ。
躊躇無く突き進んだ結果、周囲の予想外に飛んでいく事もあるが。
基本的には善良な人間で、実の所、初雪はそんな彼の姿が見れて満

足していた。
「――やぁ、待った？」
「いいえ、ちょうど良いタイミングでした。では皆様にご挨拶して帰りましょうか」
二人は見送りに来た担当医や看護士に挨拶して、病院を出る。
これで問題なく退院できた、経過観察で暫く通院する必要は残っているが。
これでまた、元通りの生活である。
「よしっ、じゃあ帰ろうか！　懐かしの我が家へ！」
「はいッ、――所で吉久、あの約束は忘れてませんよね？　ええ、わざわざ人を使って手紙まで出したのですもの、忘れたと言ったら怒りますよ？」
「まさか、それをして僕らは完全にやり直すって感じだしね。……それとも直接誘った方が良かった？」
「いいえ、……とても、とても嬉しかったです」
手を繋いで歩く二人、初雪は少し涙ぐむ。
吉久は昨日、紗楽達に頼んでラブレターを渡していたのだった。
前回のように偽のデートの誘いではなく、今度は本当のデートを。
「良かった、じゃあさ、――――脱ごっか初雪、下着だけで良いよそこの木陰に行こうか」
「ちょっと吉久??　何を考えているのですか??」
「え？　だって僕は言ったよね？　後で覚えてろって」
「……ああ、確かに。で、でもですよッ!?　何で今なんですかッ！
良い雰囲気でしたよねッ!?」
「入院中さ、運動が禁じられてるから僕も君も溜まってるよね色々と、それに……あーあ、痛むなぁ、君に刺された所が痛むなぁ……、何処かの誰かは責任を取るべきだよねぇ??」
「――――～～～～ッ!?　ひ、卑怯です吉久ッ！　だからって、そんな今すぐッ!?」
思わず手を離し、少し距離を取って身を守るように己を抱きしめる初雪。

腕を乳房の下に回したせいで、その大きさが強調されて。
更に言えば彼女の頬は紅潮し、悔しそうに睨む目はしっとりと期待に濡れている。
「今日はじっくり虐めてあげる、安心して欲しい、晩ご飯だって口移しで食べさせてあげるし寝かさないからさ」
「……い、今から私を辱めようと言うんですか？　この変態、屈辱です、はぁ、はぁ、く、屈辱です」
「僕を憎むかい？」
「憎みます、でも私には憎む権利なんてもう無いんです、だからこんな憎しみ、性欲へのスパイスにしかならないのに……はぁ、ふぅ、ぁぁ、んっ、あ、貴方は分かっててそれをする、ああ、私はまた貴方に陵辱されてしまうのですねッ」
こんなの命令と変わらない、拒否権なんてないし、逃げ出すこともできない。
下着無しで歩くだけの筈がない、もっと淫らな事をされて焦らされたまま家まで歩かされるのだろう。
初雪は口元を歪ませながら、吉久にそっと近づくとその腕を弱々しく掴む。
「つ、着いてきてください、貴方の望み通りにすれば良いのでしょう？　ちゃんとその目で見て、大切に受け取ってください。……それから」
「それから？　ははっ、何を言って楽しませてくれるんだい？」
「――――後で、ちゃんとイチャイチャして優しく愛して、ください……」
「……うん、勿論さ僕の聖女様」
「約束ですよ、――――がぶがぶ、がぶがぶ」
初雪はとろんとした目つきで吉久の手を、がぶがぶと甘噛みする。
己が傷つけた痕を、丹念に優しく噛んでいく。
そのくすぐったいも愛を感じる感触に、吉久は微笑んで。
「さ、あの木陰に行こうか」
「……貴方を一生許さないし、離しません、ずっと、ずっと一

緒にいてください吉久」
「僕の事も、一生離さないでずっと一緒に居て欲しい」
「愛しています吉久」
「愛してる初雪」
二人は愛と情欲に支配された眼で、愛を誓いあい。
それからは、とても幸せな人生を送ったのだった。

――――完